

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (158)

中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅳ)

しば はら
芝原遺跡 2

(南さつま市金峰町)

縄文時代遺物編

第 2 分冊

2011年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

本文目次

巻頭図版		
序 文		
報告書抄録		
例 言		
目 次		
第1章 調査の経過	1	
第1節 調査に至るまでの経緯	1	
第2節 事前調査	1	
第3節 本調査	2	
第4節 整理・報告書作成	6	
第2章 遺跡の位置と環境	9	
第1節 地理的環境	9	
第2節 歴史的環境	9	第1分冊
第3章 発掘調査の方法	15	
第1節 調査の方法	15	
第2節 層序	15	
第4章 調査の成果	18	
第1節 縄文時代の調査	18	
第2節 土器・土製品	30	
1 春日式土器	30	
2 阿高式土器	72	
3 岩崎式土器	97	
4 南福寺式土器	114	
5 出水式土器	136	
観 察 表	147	
6 磨消縄文系土器	1	
7 指宿式土器	44	
8 その他の後期前半の土器	370	第2分冊
観 察 表	371	
9 松山式土器	1	
10 市来式土器	12	
11 鐘崎式土器	40	
12 北久根山式土器	40	
13 西平式土器	42	
14 入佐式土器	44	
15 円盤形土製品・土製品	51	
第3節 石器・石製品等	65	
第5章 自然科学分析	163	
第1節 概要	163	
第2節 芝原遺跡の自然科学分析	163	第3分冊
第3節 鹿児島県芝原遺跡出土土器に 附着した炭化物について	169	
第4節 芝原遺跡出土石器の産地推定	173	
第6章 総括	183	
第1節 磨消縄文土器と指宿式土器・松山式土器	183	
第2節 指宿式土器の 装飾把手・装飾突起について	187	
観 察 表	191	
付 編 鹿児島県南さつま市上水流通跡 出土土器の胎土分析	203	
図 版		第4分冊

挿図目次

第120図	磨消縄文土器 (1) 深鉢Ⅰ類①	1	第165図	指宿式土器 (9) I a 類⑨	52
第121図	磨消縄文土器 (2) 深鉢Ⅰ類②	2	第166図	指宿式土器 (10) I a 類⑩	53
第122図	磨消縄文土器 (3) 深鉢Ⅰ類③	4	第167図	指宿式土器 (11) I a 類⑪	54
第123図	磨消縄文土器 (4) 深鉢Ⅰ類④	5	第168図	指宿式土器 (12) I a 類⑫	55
第124図	磨消縄文土器 (5) 深鉢Ⅰ類⑤	6	第169図	指宿式土器 (13) I a 類⑬	56
第125図	磨消縄文土器 (6) 深鉢Ⅰ類⑥	7	第170図	指宿式土器 (14) I a 類⑭	57
第126図	磨消縄文土器 (7) 深鉢Ⅰ類⑦	8	第171図	指宿式土器 (15) I a 類⑮	58
第127図	磨消縄文土器 (8) 深鉢Ⅰ類⑧	9	第172図	指宿式土器 (16) I a 類⑯	59
第128図	磨消縄文土器 (9) 深鉢Ⅰ類⑨	10	第173図	指宿式土器 (17) I a 類⑰	60
第129図	磨消縄文土器 (10) 深鉢Ⅰ類⑩	11	第174図	指宿式土器 (18) I a 類⑱	61
第130図	磨消縄文土器 (11) 深鉢Ⅰ類⑪	12	第175図	指宿式土器 (19) I a 類⑲	62
第131図	磨消縄文土器 (12) 深鉢Ⅰ類⑫	13	第176図	指宿式土器 (20) I a 類⑳	63
第132図	磨消縄文土器 (13) 深鉢Ⅰ類⑬	15	第177図	指宿式土器 (21) I a 類㉑	64
第133図	磨消縄文土器 (14) 深鉢Ⅰ類⑭	17	第178図	指宿式土器 (22) I a 類㉒	65
第134図	磨消縄文土器 (15) 深鉢Ⅰ類⑮	18	第179図	指宿式土器 (23) I a 類㉓	66
第135図	磨消縄文土器 (16) 深鉢Ⅱ類①	19	第180図	指宿式土器 (24) I a 類㉔	67
第136図	磨消縄文土器 (17) 深鉢Ⅱ類②	20	第181図	指宿式土器 (25) I a 類㉕	68
第137図	磨消縄文土器 (18) 深鉢Ⅱ類③	21	第182図	指宿式土器 (26) I a 類㉖	69
第138図	磨消縄文土器 (19) 深鉢Ⅱ類④	22	第183図	指宿式土器 (27) I a 類㉗	70
第139図	磨消縄文土器 (20) 深鉢Ⅲ類①	23	第184図	指宿式土器 (28) I a 類㉘	71
第140図	磨消縄文土器 (21) 深鉢Ⅲ類②	24	第185図	指宿式土器 (29) I a 類㉙	72
第141図	磨消縄文土器 (22) 深鉢Ⅳ類①	25	第186図	指宿式土器 (30) I a 類㉚	73
第142図	磨消縄文土器 (23) 深鉢Ⅳ類②	26	第187図	指宿式土器 (31) I a 類㉛	74
第143図	磨消縄文土器 (24) 鉢Ⅰ類①	27	第188図	指宿式土器 (32) I a 類㉜	75
第144図	磨消縄文土器 (25) 鉢Ⅰ類②	28	第189図	指宿式土器 (33) I a 類㉝	76
第145図	磨消縄文土器 (26) 鉢Ⅰ類③	29	第190図	指宿式土器 (34) I a 類㉞	77
第146図	磨消縄文土器 (27) 鉢Ⅰ類④	30	第191図	指宿式土器 (35) I a 類㉟	78
第147図	磨消縄文土器 (28) 鉢Ⅰ類⑤	32	第192図	指宿式土器 (36) I a 類㊱	79
第148図	磨消縄文土器 (29) 鉢Ⅱ類①	34	第193図	指宿式土器 (37) I a 類㊲	80
第149図	磨消縄文土器 (30) 鉢Ⅱ類②	35	第194図	指宿式土器 (38) I a 類㊳	81
第150図	磨消縄文土器 (31) 鉢Ⅱ類③	36	第195図	指宿式土器 (39) I a 類㊴	82
第151図	磨消縄文土器 (32) 鉢Ⅲ類①	37	第196図	指宿式土器 (40) I a 類㊵	83
第152図	磨消縄文土器 (33) 鉢Ⅲ類②	38	第197図	指宿式土器 (41) I a 類㊶	84
第153図	磨消縄文土器 (34) 鉢Ⅲ類③	39	第198図	指宿式土器 (42) I a 類㊷	85
第154図	磨消縄文土器 (35) 注口土器・ 小型土器、広口壺、浅鉢	40	第199図	指宿式土器 (43) I a 類㊸	86
第155図	磨消縄文土器 (36) 持込み土器①	42	第200図	指宿式土器 (44) I a 類㊹	87
第156図	磨消縄文土器 (37) 持込み土器②	43	第201図	指宿式土器 (45) I a 類㊺	88
第157図	指宿式土器 (1) I a 類①	44	第202図	指宿式土器 (46) I a 類㊻	89
第158図	指宿式土器 (2) I a 類②	45	第203図	指宿式土器 (47) I a 類㊼	90
第159図	指宿式土器 (3) I a 類③	46	第204図	指宿式土器 (48) I a 類㊽	91
第160図	指宿式土器 (4) I a 類④	47	第205図	指宿式土器 (49) I a 類㊾	92
第161図	指宿式土器 (5) I a 類⑤	48	第206図	指宿式土器 (50) I a 類㊿	93
第162図	指宿式土器 (6) I a 類⑥	49	第207図	指宿式土器 (51) I a 類㉀	94
第163図	指宿式土器 (7) I a 類⑦	50	第208図	指宿式土器 (52) I a 類㉁	95
第164図	指宿式土器 (8) I a 類⑧	51	第209図	指宿式土器 (53) I a 類㉂	96
			第210図	指宿式土器 (54) I a 類㉃	97

第211國	指宿式土器 (55)	I a 類⑤	98
第212國	指宿式土器 (56)	I a 類⑥	99
第213國	指宿式土器 (57)	I a 類⑦	100
第214國	指宿式土器 (58)	I a 類⑧	101
第215國	指宿式土器 (59)	I b 類①	102
第216國	指宿式土器 (60)	I b 類②	103
第217國	指宿式土器 (61)	I b 類③	104
第218國	指宿式土器 (62)	I b 類④	105
第219國	指宿式土器 (63)	I b 類⑤	106
第220國	指宿式土器 (64)	I b 類⑥	107
第221國	指宿式土器 (65)	I b 類⑦	108
第222國	指宿式土器 (66)	I b 類⑧	109
第223國	指宿式土器 (67)	I b 類⑨	110
第224國	指宿式土器 (68)	I b 類⑩	111
第225國	指宿式土器 (69)	I b 類⑪	112
第226國	指宿式土器 (70)	I b 類⑫	113
第227國	指宿式土器 (71)	I b 類⑬	114
第228國	指宿式土器 (72)	I b 類⑭	115
第229國	指宿式土器 (73)	I b 類⑮	116
第230國	指宿式土器 (74)	I b 類⑯	117
第231國	指宿式土器 (75)	I b 類⑰	118
第232國	指宿式土器 (76)	I b 類⑱	119
第233國	指宿式土器 (77)	I b 類⑲	120
第234國	指宿式土器 (78)	I b 類⑳	121
第235國	指宿式土器 (79)	I b 類㉑	122
第236國	指宿式土器 (80)	I b 類㉒	123
第237國	指宿式土器 (81)	I b 類㉓	124
第238國	指宿式土器 (82)	I b 類㉔	125
第239國	指宿式土器 (83)	I b 類㉕	126
第240國	指宿式土器 (84)	I b 類㉖	127
第241國	指宿式土器 (85)	I b 類㉗	128
第242國	指宿式土器 (86)	I b 類㉘	129
第243國	指宿式土器 (87)	I b 類㉙	130
第244國	指宿式土器 (88)	I b 類㉚	131
第245國	指宿式土器 (89)	I c 類①	132
第246國	指宿式土器 (90)	I c 類②	133
第247國	指宿式土器 (91)	I c 類③	134
第248國	指宿式土器 (92)	I c 類④	135
第249國	指宿式土器 (93)	I c 類⑤	136
第250國	指宿式土器 (94)	I c 類⑥	137
第251國	指宿式土器 (95)	I c 類⑦	138
第252國	指宿式土器 (96)	I c 類⑧	139
第253國	指宿式土器 (97)	I c 類⑨	140
第254國	指宿式土器 (98)	I c 類⑩	141
第255國	指宿式土器 (99)	I c 類⑪	142
第256國	指宿式土器 (100)	I c 類⑫	143
第257國	指宿式土器 (101)	I c 類⑬	144
第258國	指宿式土器 (102)	I c 類⑭	145

第259國	指宿式土器 (103)	I c 類⑮	146
第260國	指宿式土器 (104)	I c 類⑯	147
第261國	指宿式土器 (105)	I c 類⑰	148
第262國	指宿式土器 (106)	I c 類⑱	149
第263國	指宿式土器 (107)	I c 類⑲	150
第264國	指宿式土器 (108)	I c 類⑳	151
第265國	指宿式土器 (109)	I c 類㉑	152
第266國	指宿式土器 (110)	I c 類㉒	153
第267國	指宿式土器 (111)	I c 類㉓	154
第268國	指宿式土器 (112)	I d 類①	155
第269國	指宿式土器 (113)	I d 類②	156
第270國	指宿式土器 (114)	I d 類③	157
第271國	指宿式土器 (115)	I d 類④	158
第272國	指宿式土器 (116)	I d 類⑤	159
第273國	指宿式土器 (117)	I d 類⑥	160
第274國	指宿式土器 (118)	I d 類⑦	161
第275國	指宿式土器 (119)	I d 類⑧	162
第276國	指宿式土器 (120)	I d 類⑨	163
第277國	指宿式土器 (121)	I d 類⑩	164
第278國	指宿式土器 (122)	I d 類⑪	165
第279國	指宿式土器 (123)	I d 類⑫	166
第280國	指宿式土器 (124)	I d 類⑬	167
第281國	指宿式土器 (125)	I d 類⑭	168
第282國	指宿式土器 (126)	I d 類⑮	169
第283國	指宿式土器 (127)	I d 類⑯	170
第284國	指宿式土器 (128)	I d 類⑰	171
第285國	指宿式土器 (129)	I e 類①	172
第286國	指宿式土器 (130)	I e 類②	173
第287國	指宿式土器 (131)	I e 類③	174
第288國	指宿式土器 (132)	I e 類④	175
第289國	指宿式土器 (133)	I e 類⑤	176
第290國	指宿式土器 (134)	I e 類⑥	177
第291國	指宿式土器 (135)	II a 類①	178
第292國	指宿式土器 (136)	II a 類②	179
第293國	指宿式土器 (137)	II a 類③	180
第294國	指宿式土器 (138)	II b 類①	181
第295國	指宿式土器 (139)	II b 類②	182
第296國	指宿式土器 (140)	II b 類③	183
第297國	指宿式土器 (141)	II b 類④	184
第298國	指宿式土器 (142)	II b 類⑤	185
第299國	指宿式土器 (143)	II b 類⑥	186
第300國	指宿式土器 (144)	II b 類⑦	187
第301國	指宿式土器 (145)	II b 類⑧	188
第302國	指宿式土器 (146)	II b 類⑨	189
第303國	指宿式土器 (147)	II b 類⑩	190
第304國	指宿式土器 (148)	II b 類⑪	191
第305國	指宿式土器 (149)	II b 類⑫	192
第306國	指宿式土器 (150)	II c 類①	193

第307回	指宿式土器 (151)	Ⅱ c 類②	194
第308回	指宿式土器 (152)	Ⅱ c 類③	195
第309回	指宿式土器 (153)	Ⅱ c 類④	196
第310回	指宿式土器 (154)	Ⅱ d 類①	197
第311回	指宿式土器 (155)	Ⅱ d 類②	198
第312回	指宿式土器 (156)	Ⅱ d 類③	199
第313回	指宿式土器 (157)	Ⅱ d 類④	200
第314回	指宿式土器 (158)	Ⅱ d 類⑤	201
第315回	指宿式土器 (159)	Ⅱ d 類⑥	202
第316回	指宿式土器 (160)	Ⅱ e 類①	203
第317回	指宿式土器 (161)	Ⅱ e 類②	204
第318回	指宿式土器 (162)	Ⅱ e 類③	205
第319回	指宿式土器 (163)	Ⅱ e 類④	206
第320回	指宿式土器 (164)	Ⅱ e 類⑤	207
第321回	指宿式土器 (165)	Ⅱ e 類⑥	208
第322回	指宿式土器 (166)	Ⅱ e 類⑦	209
第323回	指宿式土器 (167)	Ⅱ e 類⑧	210
第324回	指宿式土器 (168)	Ⅱ e 類⑨	211
第325回	指宿式土器 (169)	Ⅱ e 類⑩	212
第326回	指宿式土器 (170)	Ⅱ e 類⑪	213
第327回	指宿式土器 (171)	Ⅱ e 類⑫	214
第328回	指宿式土器 (172)	Ⅱ e 類⑬	215
第329回	指宿式土器 (173)	Ⅱ e 類⑭	216
第330回	指宿式土器 (174)	Ⅱ e 類⑮	217
第331回	指宿式土器 (175)	Ⅲ a 類①	218
第332回	指宿式土器 (176)	Ⅲ a 類②	219
第333回	指宿式土器 (177)	Ⅲ a 類③	220
第334回	指宿式土器 (178)	Ⅲ a 類④	221
第335回	指宿式土器 (179)	Ⅲ a 類⑤	222
第336回	指宿式土器 (180)	Ⅲ a 類⑥	223
第337回	指宿式土器 (181)	Ⅲ a 類⑦	224
第338回	指宿式土器 (182)	Ⅲ a 類⑧	225
第339回	指宿式土器 (183)	Ⅲ a 類⑨	226
第340回	指宿式土器 (184)	Ⅲ b 類①	227
第341回	指宿式土器 (185)	Ⅲ b 類②	228
第342回	指宿式土器 (186)	Ⅲ b 類③	229
第343回	指宿式土器 (187)	Ⅲ b 類④	230
第344回	指宿式土器 (188)	Ⅲ b 類⑤	231
第345回	指宿式土器 (189)	Ⅲ b 類⑥	232
第346回	指宿式土器 (190)	Ⅲ b 類⑦	233
第347回	指宿式土器 (191)	Ⅲ b 類⑧	234
第348回	指宿式土器 (192)	Ⅲ c 類①	235
第349回	指宿式土器 (193)	Ⅲ c 類②	236
第350回	指宿式土器 (194)	Ⅲ c 類③	237
第351回	指宿式土器 (195)	Ⅲ c 類④	238
第352回	指宿式土器 (196)	Ⅲ c 類⑤	239
第353回	指宿式土器 (197)	Ⅲ c 類⑥	240
第354回	指宿式土器 (198)	Ⅲ c 類⑦	241

第355回	指宿式土器 (199)	Ⅲ c 類⑧	242
第356回	指宿式土器 (200)	Ⅲ c 類⑨	243
第357回	指宿式土器 (201)	Ⅲ c 類⑩	244
第358回	指宿式土器 (202)	Ⅲ c 類⑪	245
第359回	指宿式土器 (203)	Ⅲ c 類⑫	246
第360回	指宿式土器 (204)	Ⅲ c 類⑬	247
第361回	指宿式土器 (205)	Ⅲ c 類⑭	248
第362回	指宿式土器 (206)	Ⅲ c 類⑮	249
第363回	指宿式土器 (207)	Ⅲ c 類⑯	250
第364回	指宿式土器 (208)	Ⅲ c 類⑰	251
第365回	指宿式土器 (209)	Ⅲ c 類⑱	252
第366回	指宿式土器 (210)	Ⅲ c 類⑲	253
第367回	指宿式土器 (211)	Ⅲ c 類⑳	254
第368回	指宿式土器 (212)	Ⅲ c 類㉑	255
第369回	指宿式土器 (213)	Ⅲ c 類㉒	256
第370回	指宿式土器 (214)	Ⅲ d 類①	257
第371回	指宿式土器 (215)	Ⅲ d 類②	258
第372回	指宿式土器 (216)	Ⅲ d 類③	259
第373回	指宿式土器 (217)	Ⅲ d 類④	260
第374回	指宿式土器 (218)	Ⅲ d 類⑤	261
第375回	指宿式土器 (219)	Ⅲ d 類⑥	262
第376回	指宿式土器 (220)	Ⅲ d 類⑦	263
第377回	指宿式土器 (221)	Ⅳ 類①	264
第378回	指宿式土器 (222)	Ⅳ 類②	265
第379回	指宿式土器 (223)	Ⅳ 類③	267
第380回	指宿式土器 (224)	Ⅳ 類④	268
第381回	指宿式土器 (225)	Ⅳ 類⑤	269
第382回	指宿式土器 (226)	Ⅳ 類⑥	270
第383回	指宿式土器 (227)	Ⅳ 類⑦	271
第384回	指宿式土器 (228)	Ⅳ 類⑧	273
第385回	指宿式土器 (229)	Ⅳ 類⑨	274
第386回	指宿式土器 (230)	Ⅳ 類⑩	275
第387回	指宿式土器 (231)	Ⅳ 類⑪	276
第388回	指宿式土器 (232)	Ⅳ 類⑫	277
第389回	指宿式土器 (233)	Ⅳ 類⑬	278
第390回	指宿式土器 (234)	Ⅳ 類⑭	279
第391回	指宿式土器 (235)	Ⅳ 類⑮	280
第392回	指宿式土器 (236)	Ⅳ 類⑯	281
第393回	指宿式土器 (237)	Ⅳ 類⑰	283
第394回	指宿式土器 (238)	Ⅳ 類⑱	284
第395回	指宿式土器 (239)	Ⅳ 類⑲	285
第396回	指宿式土器 (240)	Ⅳ 類㉑	286
第397回	指宿式土器 (241)	Ⅳ 類㉒	287
第398回	指宿式土器 (242)	Ⅳ 類㉓	288
第399回	指宿式土器 (243)	Ⅳ 類㉔	290
第400回	指宿式土器 (244)	Ⅳ 類㉕	291
第401回	指宿式土器 (245)	Ⅳ 類㉖	292
第402回	指宿式土器 (246)	Ⅳ 類㉗	293

第403図	指宿式土器 (247)	Ⅳ類㉔	294
第404図	指宿式土器 (248)	Ⅳ類㉕	295
第405図	指宿式土器 (249)	Ⅳ類㉖	297
第406図	指宿式土器 (250)	Ⅳ類㉗	298
第407図	指宿式土器 (251)	Ⅳ類㉘	299
第408図	指宿式土器 (252)	Ⅳ類㉙	300
第409図	指宿式土器 (253)	Ⅳ類㉚	302
第410図	指宿式土器 (254)	Ⅳ類㉛	304
第411図	指宿式土器 (255)	Ⅳ類㉜	305
第412図	指宿式土器 (256)	Ⅳ類㉝	306
第413図	指宿式土器 (257)	Ⅳ類㉞	307
第414図	指宿式土器 (258)	Ⅳ類㉟	308
第415図	指宿式土器 (259)	Ⅳ類㊱	310
第416図	指宿式土器 (260)	Ⅳ類㊲	311
第417図	指宿式土器 (261)	Ⅳ類㊳	312
第418図	指宿式土器 (262)	Ⅳ類㊴	313
第419図	指宿式土器 (263)	Ⅳ類㊵	314
第420図	指宿式土器 (264)	Ⅳ類㊶	315
第421図	指宿式土器 (265)	V類①	316
第422図	指宿式土器 (266)	V類②	317
第423図	指宿式土器 (267)	V類③	319
第424図	指宿式土器 (268)	V類④	320
第425図	指宿式土器 (269)	V類⑤	321
第426図	指宿式土器 (270)	V類⑥	322
第427図	指宿式土器 (271)	Ⅵ類①	323
第428図	指宿式土器 (272)	Ⅵ類②	324
第429図	指宿式土器 (273)	Ⅵ類③	325
第430図	指宿式土器 (274)	Ⅵ類④	326
第431図	指宿式土器 (275)	Ⅶ類①	327
第432図	指宿式土器 (276)	Ⅶ類②	328
第433図	指宿式土器 (277)	Ⅶ類③	329
第434図	指宿式土器 (278)	Ⅶ類④	330
第435図	指宿式土器 (279)	Ⅶ類⑤	331
第436図	指宿式土器 (280)	Ⅶ類⑥	332
第437図	指宿式土器 (281)	Ⅶ類⑦	333
第438図	指宿式土器 (282)	Ⅶ類⑧	334

第439図	指宿式土器 (283)	Ⅶ類⑨	335
第440図	指宿式土器 (284)	Ⅶ類⑩	336
第441図	指宿式土器 (285)	Ⅶ類⑪	337
第442図	指宿式土器 (286)	Ⅶ類⑫	338
第443図	指宿式土器 (287)	Ⅶ類⑬	339
第444図	指宿式土器 (288)	Ⅶ類⑭	340
第445図	指宿式土器 (289)	Ⅶ類⑮	341
第446図	指宿式土器 (290)	Ⅶ類⑯	342
第447図	指宿式土器 (291)	Ⅶ類⑰	343
第448図	指宿式土器 (292)	Ⅶ類⑱	344
第449図	指宿式土器 (293)	Ⅶ類⑲	345
第450図	指宿式土器 (294)	Ⅶ類⑳	346
第451図	指宿式土器 (295)	Ⅶ類㉑	347
第452図	指宿式土器 (296)	Ⅶ類㉒	348
第453図	指宿式土器 (297)	Ⅶ類㉓	349
第454図	指宿式土器 (298)	底部①	350
第455図	指宿式土器 (299)	底部②	351
第456図	指宿式土器 (300)	底部③	352
第457図	指宿式土器 (301)	底部④	353
第458図	指宿式土器 (302)	底部⑤	354
第459図	指宿式土器 (303)	底部⑥	355
第460図	指宿式土器 (304)	底部⑦	356
第461図	指宿式土器 (305)	底部⑧	357
第462図	指宿式土器 (306)	底部⑨	358
第463図	指宿式土器 (307)	底部⑩	359
第464図	指宿式土器 (308)	底部⑪	360
第465図	指宿式土器 (309)	底部⑫	361
第466図	指宿式土器 (310)	底部⑬	362
第467図	指宿式土器 (311)	底部⑭	363
第468図	指宿式土器 (312)	底部⑮	364
第469図	指宿式土器 (313)	底部⑯	365
第470図	指宿式土器 (314)	底部⑰	366
第471図	指宿式土器 (315)	底部⑱	367
第472図	指宿式土器 (316)	底部⑲	368
第473図	指宿式土器 (317)	底部⑳	369
第474図	その他の後期前半の土器		370

表 目 次

表25	磨消縄文系土器観察表 (1)	371
表26	磨消縄文系土器観察表 (2)	372
表27	磨消縄文系土器観察表 (3)	373
表28	磨消縄文系土器観察表 (4)	374
表29	指宿式土器 I a 類観察表 (1)	374
表30	指宿式土器 I a 類観察表 (2)	375
表31	指宿式土器 I a 類観察表 (3)	376
表32	指宿式土器 I a 類観察表 (4)	377
表33	指宿式土器 I a 類観察表 (5)	378

表34	指宿式土器 I b 類観察表 (1)	378
表35	指宿式土器 I b 類観察表 (2)	379
表36	指宿式土器 I b 類観察表 (3)	380
表37	指宿式土器 I b 類観察表 (4)	381
表38	指宿式土器 I c 類観察表 (1)	381
表39	指宿式土器 I c 類観察表 (2)	382
表40	指宿式土器 I d 類観察表 (1)	382
表41	指宿式土器 I d 類観察表 (2)	383
表42	指宿式土器 I e 類観察表	384

表43	指宿式土器Ⅱ a 類観察表	384	表59	指宿式土器Ⅳ類観察表 (2)	391
表44	指宿式土器Ⅱ b 類観察表 (1)	384	表60	指宿式土器Ⅳ類観察表 (3)	392
表45	指宿式土器Ⅱ b 類観察表 (2)	385	表61	指宿式土器Ⅳ類観察表 (4)	393
表46	指宿式土器Ⅱ c 類観察表	385	表62	指宿式土器Ⅳ類観察表 (5)	394
表47	指宿式土器Ⅱ d 類観察表	385	表63	指宿式土器Ⅴ類観察表	394
表48	指宿式土器Ⅱ e 類観察表 (1)	385	表64	指宿式土器Ⅵ類観察表 (1)	394
表49	指宿式土器Ⅱ e 類観察表 (2)	386	表65	指宿式土器Ⅵ類観察表 (2)	395
表50	指宿式土器Ⅲ a 類観察表 (1)	386	表66	指宿式土器Ⅶ類観察表 (1)	395
表51	指宿式土器Ⅲ a 類観察表 (2)	387	表67	指宿式土器Ⅶ類観察表 (2)	396
表52	指宿式土器Ⅲ b 類観察表 (1)	387	表68	指宿式土器Ⅶ類観察表 (3)	397
表53	指宿式土器Ⅲ b 類観察表 (2)	388	表69	指宿式土器底部観察表 (1)	397
表54	指宿式土器Ⅲ c 類観察表 (1)	388	表70	指宿式土器底部観察表 (2)	398
表55	指宿式土器Ⅲ c 類観察表 (2)	389	表71	指宿式土器底部観察表 (3)	399
表56	指宿式土器Ⅲ d 類観察表 (1)	389	表72	指宿式土器底部観察表 (4)	400
表57	指宿式土器Ⅲ d 類観察表 (2)	390	表73	その他の後期後半の土器観察表	400
表58	指宿式土器Ⅳ類観察表 (1)	390			

6 磨消縄文系土器

ここでいう磨消縄文系土器とは、いわゆる磨消縄文を施すものだけでなく、磨消部分がないもの、全縄文の一部を沈線で消すもの、口縁端部など部分のみに縄文を施すもの、すべての縄文をナデ消しているものなど土器の一部に縄文の残る広義のものを指している。沈線は基本的に並行する2本線で、縄文はその間のみに残されたものが多いが、なかには逆のものや、沈線の外の部分に消し残されたものもある。

器種には深鉢・鉢・注口土器・小型土器・広口壺・浅鉢などがあるが、圧倒的に深鉢が多い。

本道跡における磨消縄文土器の出土は県内の他遺跡に比べると多いほうであるが、共存すると思われる指宿式土器に比べると少ない。また、指宿式土器に比較すると軟質に焼けているが、一部を除いて胎土に大きな違いはなく、在地産のものかほとんどと思われる。

(1) 深鉢 (第120図～第142図)

深鉢には器形的に外反するものと、直口するものの2種がある。また、外反するものの中には丸く収まる口縁端部に沈線のあるものなどがある。口縁部は多くが波状を呈し、波頂部は分厚くなり、ここに突起部のあるもの、把手の付くものなどがある。

ここでは大きく①外反し、口縁端部が丸く収まるもの(Ⅰ型) ②外反し、丸く収まる口縁端部(口唇部)に1本の沈線が施されるもの(Ⅱ型) ③口縁端へ開きながらまっすぐ伸びるもの(Ⅲ型) ④縄文が外面全体に施されるもの(Ⅳ型)の4種に分ける。

の(Ⅳ型)の4種に分ける。

ア 深鉢Ⅰ類土器 (第120図～第134図 1001～1113)

やや丸みをおびた胴部からゆるやかに外反し、丸みをおびた口縁端へ向かうが、口縁端は丸みをおびたものと、矩形を呈するものがある。

1001は口径が29.5cmで、4か所に低い突起があり、ここに4本の沈線がある。縄文原形はRLで、沈線内は丁寧に消され、口縁端部のみ残っている。沈線は弧状・斜行・J字文等があり、三角形・矩形等になっている。

1002は口径が28.6cmで、肩が張らず、なだらかである。斜行・横・縦などの沈線で、三角形・菱形・矩形などを呈しているが、沈線内の縄文は丁寧に消され、口縁端のみにRLの縄文原形が残っている。低い突起部には3列の押圧文がある。1001とよく似ている。

1003は3本沈線で、沈線間にRLの縄文原形が残る。

1004～1006も2本沈線に挟まれた縄文原形があるが、1004・1006はRLで、1005はLRである。1004は粗いヘラナデ調整であるが、1005・1006は丁寧に消される。

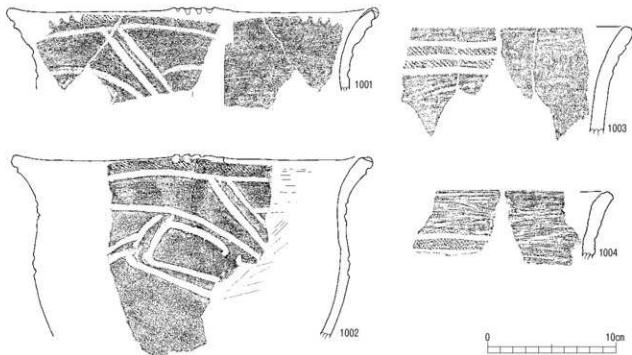
1007は横沈線と矩形の沈線で、円形補修孔が外面右下隅に見られる。

1008は上の沈線が口縁に向かって上がる破片である。

1009は3本沈線で、細い作りだが、縄文も細かい。

1010は口縁端近くをやや肥厚させ、ここに横方向の2本沈線を施している。その間にLRの縄文がある。

1011は口径が24.5cmで、4か所に突起がある。口唇部には縄文が残り、突起部には4列の押圧文が施されている。



第120図 磨消縄文土器 (1) 深鉢Ⅰ類①

る。外面には2本沈線により多くの文様が施されているが、上部では棧とその中間部の8か所に上向き半円状の文様が施されている。その下にはJ字文・長楕円文など直線と曲線が描かれている。縄文原体はRLである。

1012は把手状の突起部で、4本の縦沈線と、その脇に矩形文が見える。縄文原体はLRである。本体にも把手の手前まで横方向の沈線が見える。ヘラによって丁寧に横ナデしている。

1013は口径31cmの胴部下半まである破片である。低い頂部が4か所にあるが、ほぼ平坦である。頂部には4列の巻貝押圧文がある。内外面とも縦横状のハケによって横あるいは斜方向にナデられており、口縁部付近のみに横・J字文・曲状の沈線によって磨消縄文が施されている。縄文原体はRLで、頂部付近では最上にある横線が上にはね上がり、その間に三日月状の短沈線が向かいあっている。その下には円・矩形・入組文などがある。

1014は分厚い口縁で、矩形沈線と横沈線が描かれている。矩形内の縄文はすり消されている。

1015~1020は口縁端がすり消され、その下の2本沈線間にいずれもRLの縄文原体が施される破片である。2本沈線外は丁寧にすり消されているが、1016・1020・1021などは一部残っている所もある。1015は2段に2本沈線があり、1017は波頂部近くで、下の沈線から下方へ縦線が伸びている。

1021・1022は同一個体かと思われる破片で、いずれも分厚い作りで、RLの縄文原体を2本の沈線で挟み、縄文帯の中に巻貝殻頂の押圧と思われる竹管状の押圧文が沈線と並行に施されている。

1023は波状口縁で、楕円沈線と曲線文との組み合わせで、RLの縄文原体である。

1024は肩部で、2本の横沈線・葉手文と幅広の単筋rの縄文原体と磨消が組み合わさっている。下の方は縄文帯の中に楕円形が描かれている。

1025~1030は突起部あるいは把手である。

1025は口縁部の突起で、下の方は二又に分かれた把手となる。頂部は2本の円文と縦方向の2本短沈線からなり、縄文原体はLRである。摩耗が目立つ。

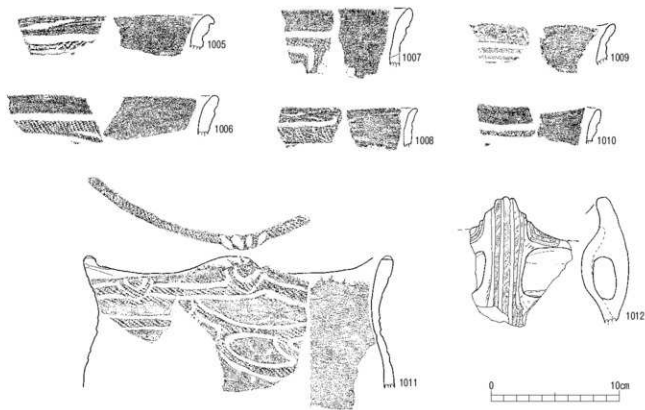
1026は耳栓状を呈する把手で、LR原体の細かい縄文の中央に沈線がある。

1027は筒状の突起で、周りには2本沈線に挟まれたRL原体の縄文があり、頂部から深い穴がえぐられている。下の方は左側が本体口縁部に、右側は把手となって、肩部に接合するものと思われる。粘土紐を接合している状況がうかがえる。

1028~1030は板状の把手である。

1028は上下が欠けている。RL原体の縄文の中に2本の沈線を引き、その間をすり消した磨消縄文である。

1029は頂部に付く把手で、肩部に貼付く下半部が欠け



第121図 磨消縄文土器(2) 深鉢I類②

ている。幅が約5cm、厚さが1.5cmほどあり、頂部は左上部分が口縁部に貼り付くようである。天井部は2本の沈線と刺突文、J字文、RLの縄文がある。外面はJ字文や三日月文などで入組文とし、中央には円形の穿孔がある。1030は1029と同一一体の可能性のある把手で下半部が欠けている。頂部はJ字状沈線で入組文となり、左側のみが口縁部と接着する。右肩は外側から内側へ短沈線がある。外面は上に入組文を配し、両端近くの2本の縦線の間に楕円状の穿孔がある。縄文原体はRLである。

1031～1035は口縁端が丸みを帯びたもののうち、端部近くが無文となるものである。

1031・1032は貝殻条痕のあとヘラによって丁寧な横ナデの施された口縁部で、2本の横方向沈線と途中でカーブする狭い楕円状を呈する沈線の間にRL原体の縄文が施されている。1032は入組様の曲がり、渦巻文となっている。

1033は波状となる口縁部で、RL原体の縄文に4本の横方向沈線が引かれ、中央の縄文帯はすり消されている。1034も同じような文様だが、口縁端がやや丸まっており、内面は横方向のヘラミガキで仕上げている。

1035は口径が34cm、残存高が23cmあり、やや細長い器形をしている。RL原体の縄文に2本の沈線で、入組文や渦巻文・矩形などの文様が施されている。内面は丁寧なヘラナデ（下半は縦方向、上半は横方向）で仕上げているが、外面には貝殻条痕が残っている。

1036～1039は胴部破片である。多くはヘラナデで仕上げているが、1039は貝殻条痕がわずかに残っている。

1036は肩部で、単筋の縄文原体に楕円や長楕円形の沈線文が施され、文様内はすり消されている。

1037はLR縄文原体に3本沈線が並行に引かれ、中央の縄文帯は消されているが、部分的に縄文が残っている。上方の縄文帯の上には刺突文が並行に押されている。

1038は肩部で、こまかいRL原体の縄文に楕円・入組文・菱形文などの沈線が引かれる。

1039は胴の下半部に近く、RLの縄文原体にやや細めの沈線で菱形や横方向沈線が施されている。

1040は4か所に分厚い突起部のある、口径が28.8cmのものである。RL原体の縄文に2本沈線で長楕円・菱形・円文などが描かれている。突起部にも縄文が付されたあと、縦方向に3本の凹線が引かれ、内面にはその下に横方向の短い凹線が引かれている。

1041は4か所に3本のねじり紐を貼り付けて突起部を作るもので、口径が31cmある。縄文原体はLRで2本沈線によって菱形・あるいは楕円形の文様を描いている。頂部直下の沈線は上へ突き出してJ字状を呈しており、2本沈線の下には三日月状の押圧文も見られる。

1042は三角形に突き出す突起部で、口唇部はやや角ばって、ここに6列のヘラによる押圧文が付される。そ

の下には内側から外へ向かって直径1cmほどの孔が穿たれる。口縁部外面にはLR原体の縄文を囲んで並行する2本の横方向沈線が引かれ、突起部付近では渦巻文となる。

1043～1045も波状となる口縁部破片で、口縁頂部近くは厚さをやや増す。

1043はLRの縄文原体で、並行沈線に挟まれている。周辺はすり消されている。

1044はRLの縄文原体と沈線が下部に見られ、頂部では外面に縄文、内面に刺突文が見られる。外面には剥離痕が見られることから把手の付く可能性はある。

1045はRL縄文原体を2本の沈線で挟んでいる。

1046・1047は中央付近の口縁部破片で、2本の沈線間にRL縄文原体が見える。

1048は分厚くなる口縁突起部で、口縁端の3本沈線は突起部で口唇部へ上がり、左端の沈線は内面まで至る。その下には2本沈線に挟まれた細かいRL縄文原体が見られる。胎土に金雲母が含まれている。

1049は口径が39cmあり、丸みを帯びた口唇部にもRL縄文原体が付されているが、ほとんどすり消されて一部にしか残っていない。4か所に低い波頂部があると思われる。ここには3列以上のヘラによる押圧文が見られる。口縁部の下は磨消部となり、その下に2本沈線に挟まれたRL縄文原体がある。沈線は口縁と並行する横線、楕円文、菱形文などからなる。内面は丁寧なヘラによる横方向のナデ調整である。

1050～1054は口縁部付近の破片である。

1050はLR縄文原体を2本沈線で挟んでいるが、中央にある2本は途中で縦方向に折れて矩形を呈し、その中の縄文はすり消されている。矩形と矩形の間には3列以上の巻貝刺突文がある。内外面とも横方向のヘラナデを基本とするが、外面の下部はやや粗い斜方向である。

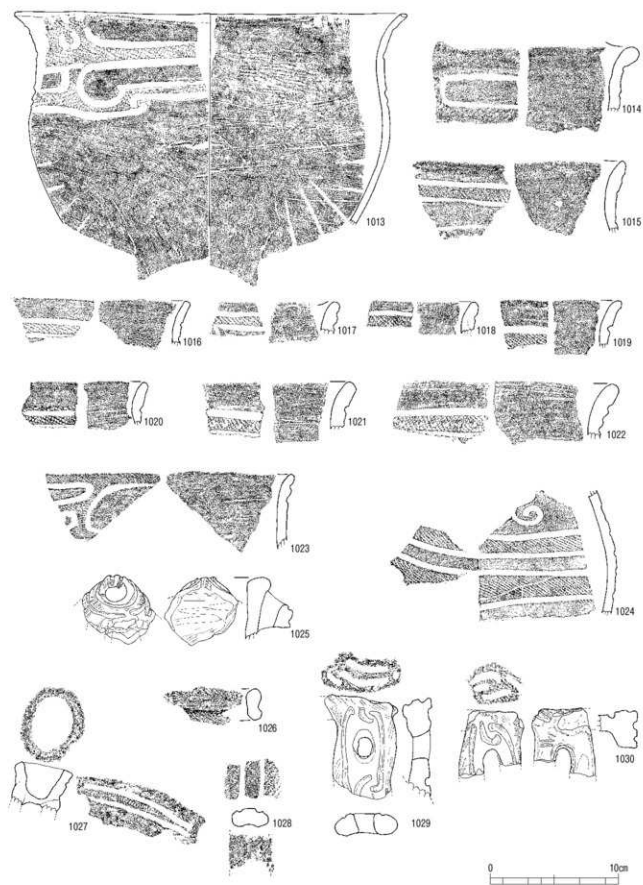
1051は波状となる口縁部で、頂部の口唇部には押圧文がある。LRの縄文原体を挟んで直線・曲線の沈線が三角文・楕円文・菱形文と思える文様を呈しているが、頂部近くでは最上部の沈線が上へJ字状に曲がっている。

1052は薄い作りで、口縁上部にLR原体の縄文が付されたあと、2本の平行沈線が引かれ、最上沈線の上にある縄文はすり消されている。下の沈線下には縄文が一部残っている。

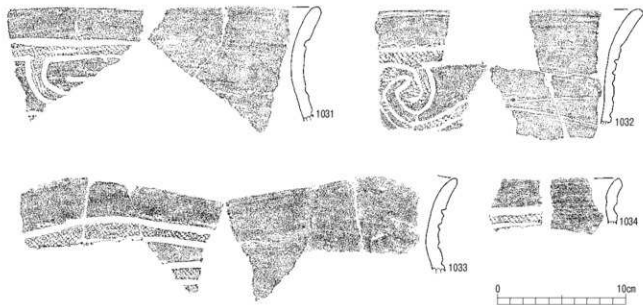
1053は矩形・入組文・楕円文などの沈線の間にRLの縄文原体があり、広い空間は磨消部となる。内面には頸部近くに指圧痕が残る。下部はヘラによる横方向のナデ調整だが、口縁付近はミガキとなる。

1054は影らむ器形で、波状を呈す。RLの縄文原体を挟んだ2本沈線は入組文・渦巻文・菱形文などを呈する。ヘラの横ナデ調整だが、外面のナデは丁寧である。

1055～1058は肩部近くの破片である。



第122図 磨消縄文土器(3) 深鉢I類③



第123図 磨消縄文土器(4) 深鉢Ⅰ類④

1055は単節rの縄文原体を沈線が斜方向やU字状に囲み、飛び飛びに磨消も施される。内面はヘラによる丁寧な横ナデである。

1056は幅広くRLの縄文原体が付され、その間に縦・横・円などの沈線と磨消部が施され、円文・矩形・楕円文・横線文となる。

1057は内面が貝殻条痕のあと、ヘラによる横ナデ調整で仕上げたもので、外面はこまかいRLの縄文原体和沈線で、横線の間に渦巻文・矩形をつくる。長石・石英・茶色石・灰色石など3mmまでの小石を多く含む胎土を用い、ピンク色がかつた明茶褐色を呈していることから指宿地方産のものと思われる。

1058はRLの縄文原体和J字文・横・斜方向などの沈線で、入組文・矩形・菱形などの文様を呈する。

1059-1064は口縁の下が無文で、その下に刺突文が口縁と並んだり、沈線の中に刺突文が並ぶものである。

1059は4か所に山形突起のある、口径が29.2cmの波状口縁を呈するものである。薄い作りで突起部にはねじり紐が貼り付けられ、直径が1cmほどの孔が穿たれている。縦方向の押圧文間にLRの縄文原体が残されている。その下に横方向の沈線があり、中に刺突文が付される。

1060も4か所の突起部に3本のねじり紐が貼り付けられ、口径が32cmの波状口縁を呈するものである。口縁下にLR原体の縄文があり、その上には横並びの刺突文が、縄文を挟んだ下には直線あるいは曲線の沈線がある。直線内は矩形あるいは楕円状のすり消し部分がある。

1061は波状口縁の突起部付近で、上の沈線が直に立ち上がり、左の方は入組文になっているようである。縄文原体はRLである。内外面とも貝殻条痕のあとヘラで横

方向にナデている。

1062は幅広の無文帯の下にLRの縄文帯があり、その最上部に巻貝殻頂の竹管状刺突文が横方向に見られる。その下には沈線による横線・入組文・長楕円文などがある。内面はヘラによる丁寧な横ナデである。

1063・1064は沈線間の縄文帯に刺突文がある。

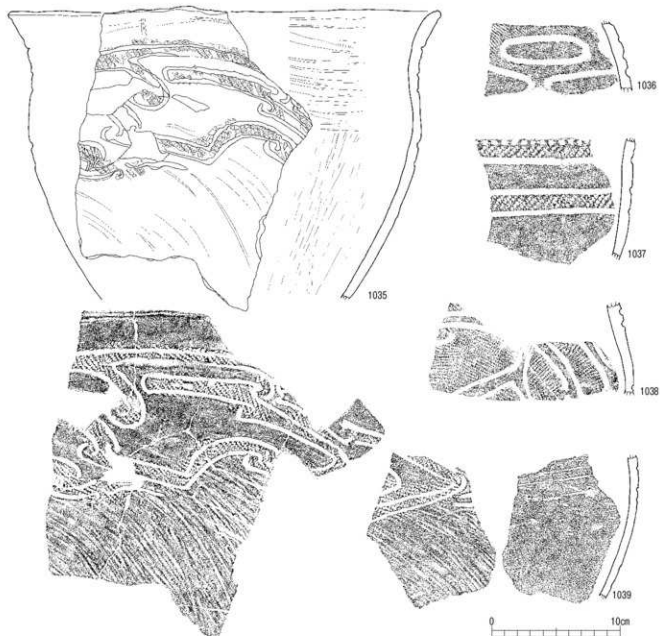
1063は4か所に3本のねじり紐を貼り付けて突起部を作る波状口縁のものである。突起部の下で入組文となる横方向の沈線の下は幅広のRL縄文帯で、その中に横あるいは斜方向に巻貝殻頂の押圧文が見られる。

1064も同様の文様帯となる口縁部だが、巻貝の刺突文は横並びの3・4段となっている。内外面とも貝殻条痕のあとヘラで横方向にナデている。

1065は口径が34.4cmの、ほぼ直に立ち上がる口縁である。口縁端近くに巻貝殻頂部による連続刺突文があり、その下には横方向沈線がある。その下はRL原体の縄文があり、そこに曲線の沈線が描かれ、沈線内は縄文がすり消される。

1066は肩部で、RLの縄文原体和磨消部、沈線による入組文あるいは渦巻文などがあり、縄文帯の中に巻貝刺突文がある。

1067・1068は口縁下にヘラの幅広沈線のあるもので、同一個体と思われる。1067は口径が40cmで、平口縁となる。残存高は26cmある。口縁に最大径があり、頸部でややくびれ、胴部は丸みを帯びて底へ伸びる。内外面ともヘラによる横ナデで調整している。口縁部はやや分厚くなっており、短沈線で三角文を描き、その間を右下がり、あるいは左下がりの短沈線で埋めている。三角文の間にJ字文も見られる。胴部上半はRLの縄文原体があり、



第124図 磨消縄文土器(5) 深鉢1類⑤

その中に直線を主とした沈線が巡り、磨消縄文の文様となる。入組文・菱形・細長矩形などがある。

1069は口径が51cmある大型の深鉢で、4か所に突起部がある。突起部には7列の押圧文があり、その下に3列4段の刺突文がある。これを境として左右に2段の矩形や1本の横線が見られ、下の矩形内には菱形・楕円・J字文などが描かれている。縄文原体はRLである。外面のヘラナデは右下がりであり粗いが、内面は丁寧である。

1070は口縁部の短い波状口縁で頂部には3列のヘラ押圧文がある。外面はRLの縄文原体が幅広く付され、その間に曲・直・J字文などの2本を主体とした沈線が施され、幅広の部分は丁寧にすり消している。

1071は波状口縁の突起部で、突起部を一部欠いている

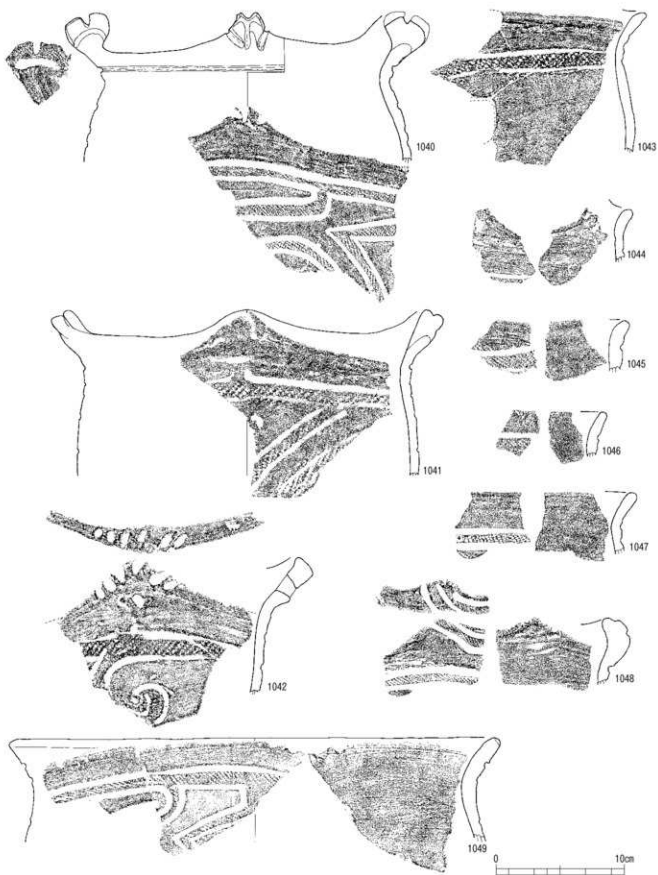
ために詳しくは不明だが、外に粘土を貼り付けて分厚くし、この外面に下向き三日月形の短沈線と、これに向かう両側からの沈線がある。口縁下に1本の斜方向沈線があり、さらにその下にRLの縄文原体を挟む2本沈線がある。上の沈線との間は菱形状になっている。

1072は口径が90cmほどで、曲線を主体とした文様である。楕円・矩形・J字文・三角形などがあり、縄文原体はRLである。

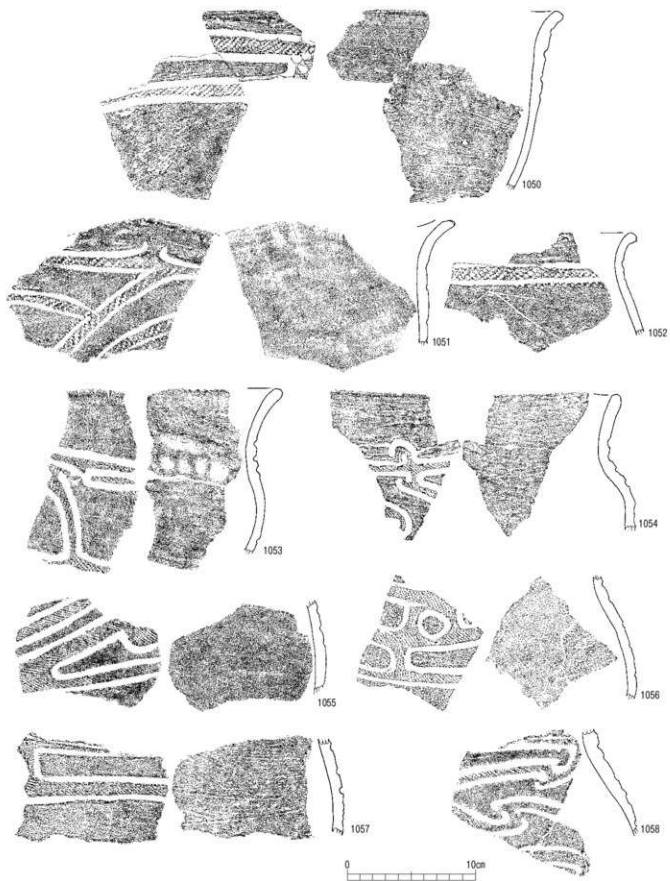
1073は頸部付近の破片で、横・斜め・二重楕円の沈線があり、RLの縄文原体が中にある。磨滅が目立つ。

1074も胴部で、RLの縄文原体の周りを曲・直の沈線で囲み、部分的にすり消している。

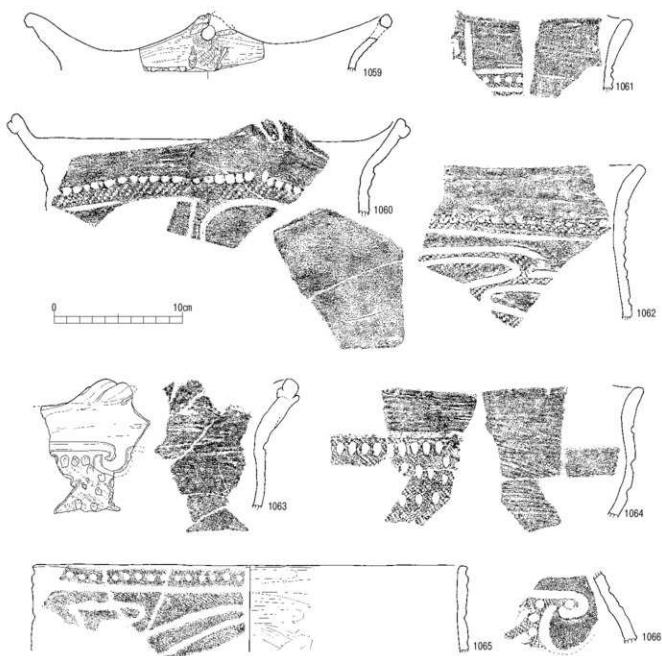
1075は口径が96.2cmあり、丸みをもった胴部から、頸



第125図 磨消縄文土器(6) 深鉢I類⑥



第126図 磨消縄文土器(7) 深鉢I類⑦



第127図 磨消縄文土器(8) 深鉢I類⑧

部で外へまっすぐ伸びる口縁へ強く変化する。頭部内面はここで段となる。4か所に突起部があり、ここに長い7列のヘラ押圧文がある。外面口縁端にもヘラ押圧文がある。外面には楕円文・入組文などが描かれる。内面は横方向のヘラナデで仕上げている。

1076は胴下半部で、LRの縄文帯が幅広く残しており、磨消部も丁寧である。

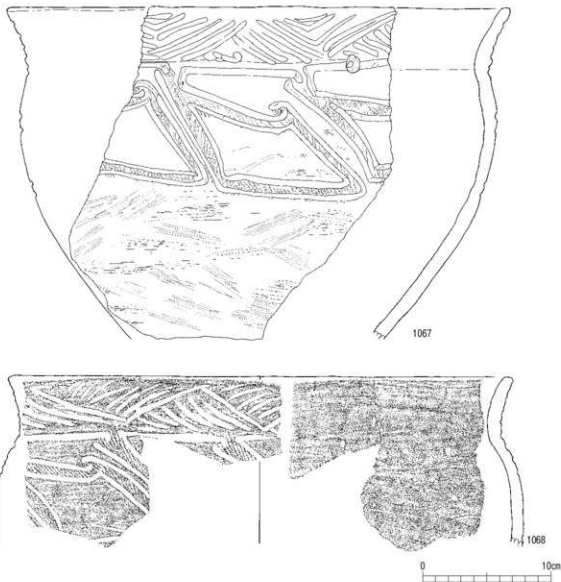
1077も胴下半部で、渦巻文風となっている。

1078は口縁部が短い。口径は28.5cmあり、やや山形となる突起部には4列のヘラ押圧文が見られる。胴部に

は、直線・曲線の沈線で、入組文・矩形文様がある。幅狭の沈線間にRLの縄文原体が残る。

1079は口縁部の短い器形をしたもので、口径が35cmである。条痕のあと丁寧にヘラナデ調整したもので、下半は縦方向、上半は横方向である。沈線は曲線と直線からなり、入組文風にしたもの、楕円のものなどがあり、幅狭の部分だけにRL原体の縄文が残っている。

1080・1081は外反しながら丸みをもった口縁端へ至るが、1080が口縁端部を丁寧にすり消しているのに対し、1081は口縁端部に縄文を残すものである。



第128図 唐滑縄文土器(9) 深鉢I類⑨

1080は口径が40cmある大型のもので、やや内傾ぎみに口縁へ向かい、肩部近くで外反する。縄文原体はRLで、磨消部に縄文がいくらか残るが、よく消している。肩部には複雑な沈線が施され、入組文、三角形などの文様が2本沈線で描かれている。内面は横方向のヘラナデで、ススが口縁部から外面に多く付着している。

1081は口径が25.4cmあり、胴部下半まで2本沈線による文様が描かれる。縄文原体はRLで、狭い2本沈線間に縄文が残り、広い空間はすり消される。上の方には矩形と円文が繰り返され、下の方は曲線とJ字文で三角形などが描かれる。J字文と釣針状のカーブで入組文に似た形をつくっている。

1082はLRの縄文原体を施す肩部で、2本沈線が3段にあり、下の方には三角文も見られる。

1083は突起部の破片で、口縁端でやや内反し、そこに

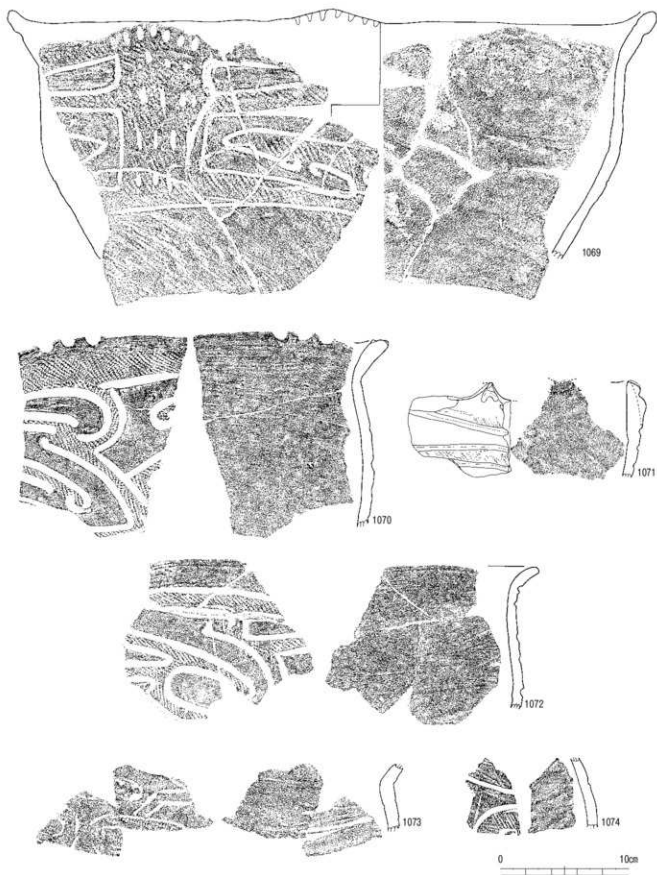
内向きの分厚い突出部が貼り付けられている。分厚い口唇部にRLの縄文が転がされ、そのあと3列の押圧文が施されている。

1084は波状口縁の突起部で、突起口唇部に3列のヘラ押圧文があり、その下には時計回りの渦巻文が見える。その脇には矩形らしき沈線が見え、縄文原体はRLである。

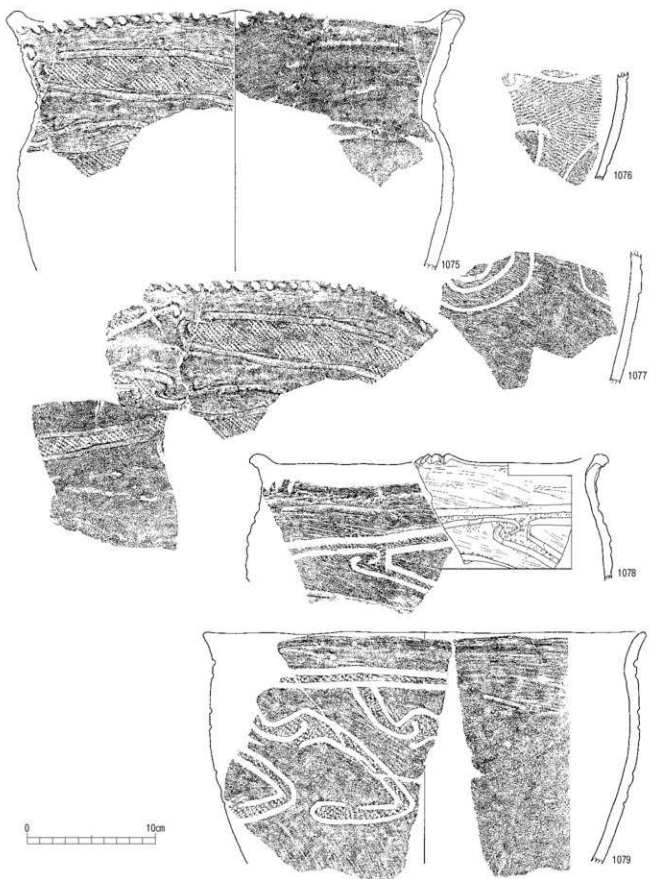
1085は山形の波状口縁で、頂部には幅の広い4列以上のヘラ押圧文があり、その下にRLの縄文原体と太めの横沈線がある。端は押ししている。

1086は外へ強く反る器形で、突起部は内外に幅広く膨らむ。突起部に原体がRLの縄文が付き、内面はその中央が丸く窪んでいる。外面はヘラによる丁寧な横ナデ調整で、その中に渦巻沈線とRL原体の縄文が見られる。

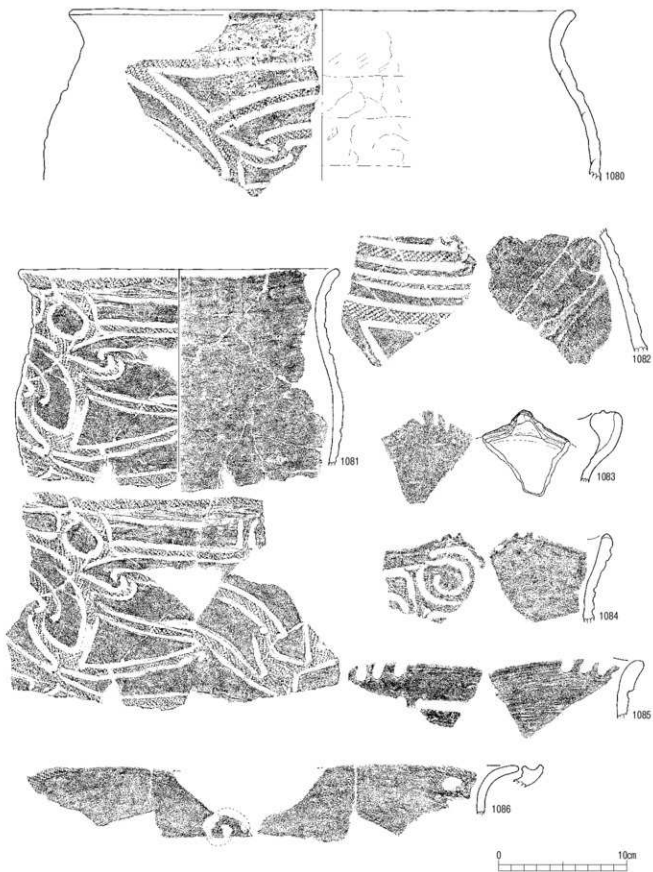
1087は口縁部が直口し、胴部が張る器形を呈し、口唇



第129図 唐滑縄文土器 (10) 深鉢I類⑩



第130図 磨消縄文土器 (11) 深鉢I類①



第131図 唐消織文土器 (12) 深鉢I類②

部にはLR原体の縄文がある。口径は24.5cmである。外面には横長長楕円形の文様が描かれ、この中だけ縄文が残されている。

1088は外反度が弱く、頸部から直に近く立ち上がる器形をしており、口径は23cmである。外面の口縁下に1本の沈線があるが、途中で途切れて少し上へ立ち上がる。肩部付近には端がJ字状に立ち上がる2本沈線、渦巻文などがあり、沈線間にはRL原体の縄文が残るものもあるが、その外や一部の沈線間は縄文がすり消される。内外面とも条痕のあとヘラによる横ナデである。

1089～1092は口縁端付近に縄文を残している。

1089は口径が34cmあり、口唇部にRL原体の縄文が残る。2本沈線が2段にあり、上の沈線は途中で上へ屈折している。内外面とも丁寧なヘラナデ調整である。

1090は波状口縁となる突起部で、突起の口唇部にやや深い押圧文が3列あり、外には入組文がある。縄文原体はRLである。

1091は細いつくりで、横と矩形の沈線とRL原体の縄文とすり消して、文様を構成している。

1092は山形突起部で、突起部に4列の押圧文が付され、その下には4列2段の縦押圧文が見られる。その左右には矩形沈線と2本のJ字文が施され、RLの縄文原体とすり消しの文様が付されている。

1093～1096は胴部で、縄文原体はRLである。いずれも2本沈線で、横・J字文・入組文・三角文・矩形などが描かれる。幅状の沈線間だけに縄文が残されている。

1097～1100は口縁帯が肥厚し波状となる突起部で、文様は似ている。最頂部の中央に円文の窪みがあり、それを囲むように同心円沈線文があり、さらにそれを囲むように4本の半円文が左右にある。その外側には沈線の楕円文がある。1099・1100は半円文が5本となる。1097・1098は突起部の頸部から下に縦方向の並行状沈線が10本以上あるが、1099・1100にはない。1099は口唇部の一部から内面にかけてRLの縄文が見られる。

1101は2本の紐を貼り付けて分厚い突起部を作っている。外面はRLの縄文原体を転がしたあと端をナデ消し、そのあと左下がりの短沈線を9本以上並べ、その下にドンダグリのもの刺突文を施す。口縁下部には横方向沈線が引かれるが、沈線は斜方向・横方向とも端が盛りあがっており、生乾きの時期に引いた状況がうかがえる。

1102は1013と同じ様な調整・文様をしており、同一個体の可能性もあるが、頂部下の文様が向かいあう三日月文だけでなく、中央に刺突文がある。

1103も突起部で、外面はRLの縄文原体に横方向の短沈線が2本、斜線が1本あり、突起部下の口縁部には突起部でやや盛りあがる沈線と、その下にRLの縄文帯が見える。頸部は縄文がすり消されている。内面は突起部外面から伸びるRLの縄文原体の下に横方向の短沈線が

1本ある。内面はヘラによる横方向のナデ調整である。

1104・1105は波状口縁の突起部頂部付近で、2本沈線のうち上の方は上へ跳ね上がり、その間に刺突文がある。縄文の下は矩形を呈する。縄文原体はRLである。

1106は波状口縁で、口縁下部に段を作り、その上の先端がJ字状となる横線との間は幅広い突帯状となっている。その上の沈線は左の頂部付近で下へ曲がっていることから段とあわせて楕円形を呈するようである。RLの縄文原体と2本沈線間のすり消しで見事な磨消縄文を呈している。

1107も1106と同じ様な口縁で、幅広いLR縄文原体の中に矩形沈線とヘラ押圧文があり、矩形の中は縄文がすり消されている。

1108・1109はよく似た口縁部で、並行した2本の横沈線と、RLの縄文原体が組み合わさっている。

1110・1111は内面に段のある口縁で、まっすぐ外へ開いており、口縁端にはLRの細かい縄文原体があり、屈曲部の下に横方向の沈線があり、その下に縄文帯がある。内面も丁寧なヘラナデである。1111の口縁端は外側がややへこんでいる。

1112と1113は同一個体である。

1112は口径が32.3cmの胴部下半まである破片で、内外面ともヘラによる横方向のナデ調整である。4か所に高い波頂部があり、その下には渦巻文、半楕円文などの沈線がある。最上部には時計回りの渦巻文がある。その下には下向きの2本の沈線からなる半楕円文がある。この半楕円文の中央に縦線が見られる。最下部には上向きの2本の沈線からなる半楕円文があり、この半楕円文の中央にも縦線が見られる。2本沈線からなる横方向の沈線が渦巻文の下と斜向き半楕円文の下にあり、それを右下がりとし右がりの斜方向2本沈線が結んで三角帯を作っている。LRの細かい縄文原体が2本沈線間には残っているが、三角帯部分は丁寧にすり消している。

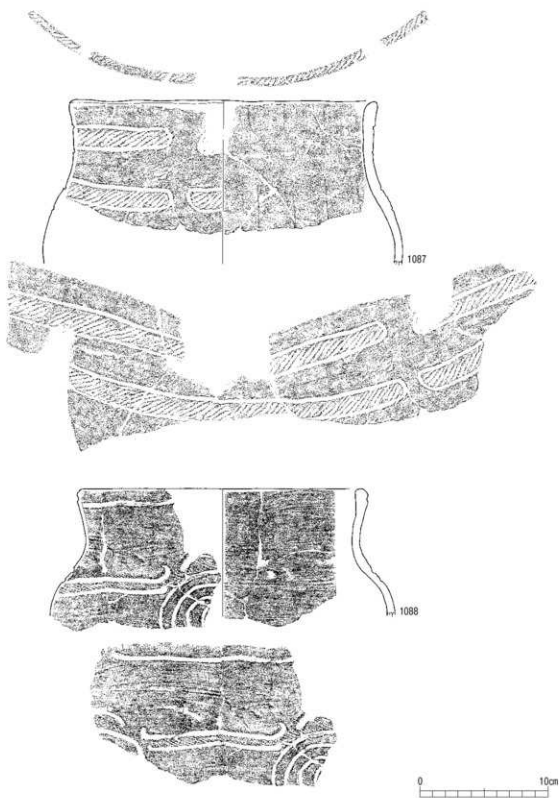
イ 深鉢Ⅱ類土器 (第135図～第138図 1114～1145)

外反する口縁部の端に沈線のあるもので、沈線の内側の縄文はすり消されることが多い。

1114は口縁端に粘土紐を貼り付けて肥厚させ、RLの縄文原体が残っている。口縁上部には沈線があり、その内側の縄文はすり消されている。

1115は外へ強く反る口縁突起部で、突起部は三角状を呈し、両側から延びてきた口唇部の沈線はここで強く押されて止まる。口縁外面の沈線は矩形を呈し、その下の矩形沈線との間には向かい合う短い半円形押圧文が見られる。RLの縄文は口縁端で止まり、その内面は丁寧にすり消されている。

1116は口径が44.4cmある大型の土器で、4か所の角が高く上がっている。突起部の口唇部は両側からの沈線が止まり、長楕円形の窪みとなる。RLの縄文は他のもの



第132図 唐滑縄文土器 (13) 深鉢I類③

と同じく外側と突起部周辺だけが残され、内側はすり消されている。突起部外面は楕円形の沈線があり中央には広い孔が穿たれている。外面の口縁部は沈線とRLの縄文原体、すり消して文様が描かれるが、突起部を境にして文様が変わる。左側は幅広の矩形で囲み、中心付近に2本の端がJ字文となる横方向沈線が引かれる。右側は2個の横長矩形文が縦に並ぶ。この矩形文の下には横方向の沈線が引かれ、突起部付近で入組文となる。沈線間の幅の狭い部分は縄文が残る、矩形部分はすり消している。内面はヘラで丁寧に横ナデをしている。

1117は口径が22.6cmとやや小さく外反度が弱い波状口縁である。口縁端のみにRLの縄文が残っており、突起部で両側からの沈線は止まり、J字状の短沈線が見られる。突起部は内側に張り出し幅広となっている。外面の沈線は直・曲線からなり、入組文・三角文などを呈するが、縄文はほとんど消されている。

1118は内側に張り出して分厚く作る突起部で、外面はRL縄文に突起部で途切れる横沈線が引かれ、その下にも横沈線がある。突起部の左側は透しとなっている。内面の頂部は半円の中央に円形の浅い押圧文がある。縄文は半円形以外はほとんど消されている。

1119～1121も同じような形状をしているが、1121はやや分厚い。ともに口縁下には1本の沈線、その下は2本沈線だが、1119は逆三角形や長方形、1120は矩形の文様を呈する。1120が幅狭の沈線間縄文を残しているのに対して、1119はほとんどすり消している。

1122は頂部破片で、口唇部にはRLの縄文と内側へノの字に曲がる沈線、深い刺突文がある。外面は曲線の沈線があり、口縁端を残して縄文はすり消されている。

1123はLRの縄文原体をもつ波状口縁かと思われる破片で、外面沈線上部の縄文は残されている。口唇部内側と沈線下部はすり消されている。内面下部にはコゲが付着している。

1124・1125ともRLの縄文原体が口唇部外側と外面上部のみに残り、外面には横方向の沈線が施されている。1126は磨耗の目立つ口縁部で、RL原体の縄文も一部だけが残っている。4本の横方向沈線からなる。

1127は口縁端へ向って強く外反する器形で、沈線の外側は強く押されて矩形を呈している。口唇部にはLR縄文原体と沈線が付され、沈線内側の縄文はすり消されているが、一部には残っている。外面にはJ字文が向かい合い、入組文となる。

1128はRLの縄文原体だが、磨耗が激しいこともあり、ほとんど見えない。外面には2本の沈線が見られるが、下の沈線の中にはヘラ押圧文が並んでいる。内面はヘラによる丁寧な横方向のナデで仕上げられている。

1129は外面に1本の沈線がある破片だが、縄文はほとんど残っていない。

1130はRLの縄文原体だが、粗くすり消しているために、口唇内面や、外面沈線の上下などに部分的に縄文が残っている。

1131はLRの縄文原体だが、外面は磨耗のため痕跡がはっきりしない。

1132は口唇部の内側に幅広く沈線を施したもので、外側にかけてはRLの縄文原体が見られる。

1133・1134は口縁端から口唇部にかけてRLの縄文が残っているもので、1134の外面は2本の縦方向沈線間に縄文が残っている。

1135は口径が44cmある波状口縁で、口縁端の沈線が頂部で強く押されて止められている。横方向・斜方向の沈線は頂部で上へ少し持ち上がっている。LRの縄文原体が沈線を境として、残った部分と丁寧にすり消された部分とに分かれ、菱形の文様を呈している。内面も丁寧に横方向のヘラナデで仕上げられている。内面は口縁から3cmほど下がった所でコゲが付着しており、外面にはススが見える。

1136も口径が42.6cmある大きなもので、4か所に低い山形の稜があり、この両側で口縁端の沈線は止まり、そこには刺突文を中心として半円の押圧文が向かい合っている。RLの縄文が口縁端付近には残っているが、口唇部から肩部にかけては縄文が丁寧にすり消され、部分的にしか残っていない。直・曲線の沈線によって入組文・矩形文・三角文・長楕円文などが描かれている。

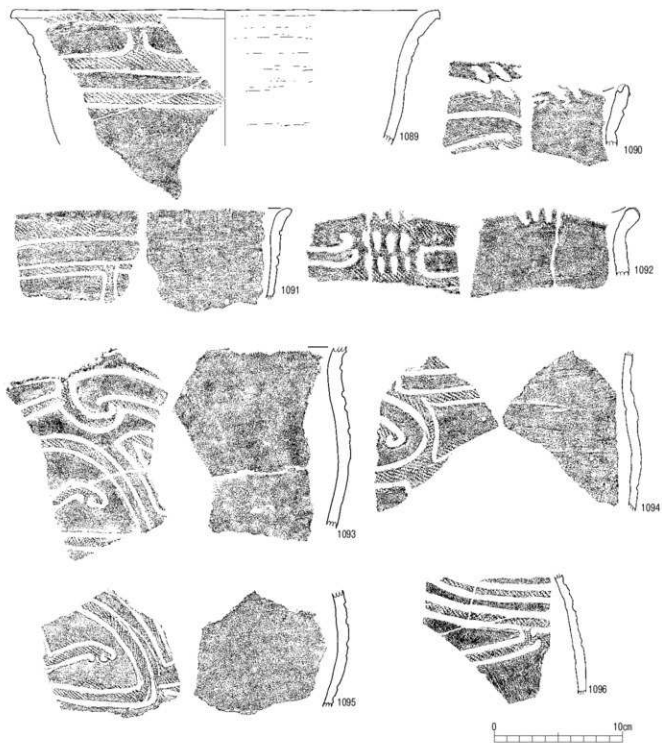
1137は口径が34.5cmある波状を呈する口縁部で、突起部は山形を呈し、分厚くなる。口唇部は8か所で内側へ折れ曲がる沈線があり、そのうち突起部では4列の巻貝殻頂の刺突文が、突起間では外向きに渦巻文風の沈線が見られる。外面はRLの縄文のあと横長の矩形・楕円形・入組文などの沈線が引かれ、中央部には縦長の矩形文が見られる。

1138は口縁端が内側に伸びて幅広くなる突起部で、口唇部の沈線はここで内側へ屈曲し、そこに三日月形沈線で挟まれた刺突文がある。外面はLRの縄文原体に矩形・入組文の沈線がある。内面の口縁端近くの窪みにススが付着している。

1139はLRの縄文原体に弧状曲線・J字文などの沈線が引かれ、沈線間の縄文が一部すり消されている。

1140は紐状の粘土が貼り付けられた突起部である。ねじれのように外から内へ貼り付けられ、直径が5～7cmの孔が穿たれている。この部分にRLの縄文原体が付けられ、そこから口唇部には沈線が引かれている。外面の口縁下に横方向の沈線があり、突起部で上にJ字状の文様が施されている。

1141も突起部近くで口唇部から外面にかけてRLの縄文原体があり、突起部中央は三日月形沈線に挟まれた円形刺突文があり、そこから脇へ横線が伸びている。外面



第133図 磨消縄文土器 (14) 深鉢I類⑬

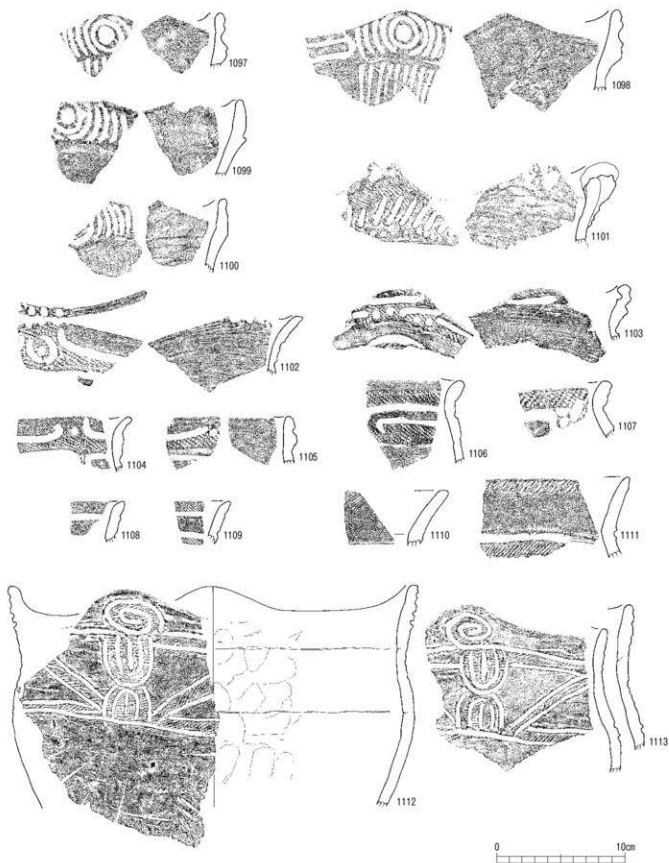
には横と斜方向の沈線があり、縄文とヘラミガキの磨消縄文がある。

1142も波状突起部付近で、口唇部は横方向の沈線が頂部で止まり、ここに深い刺突文がある。外面は矩形の沈線があるが、縄文はすり消されている。

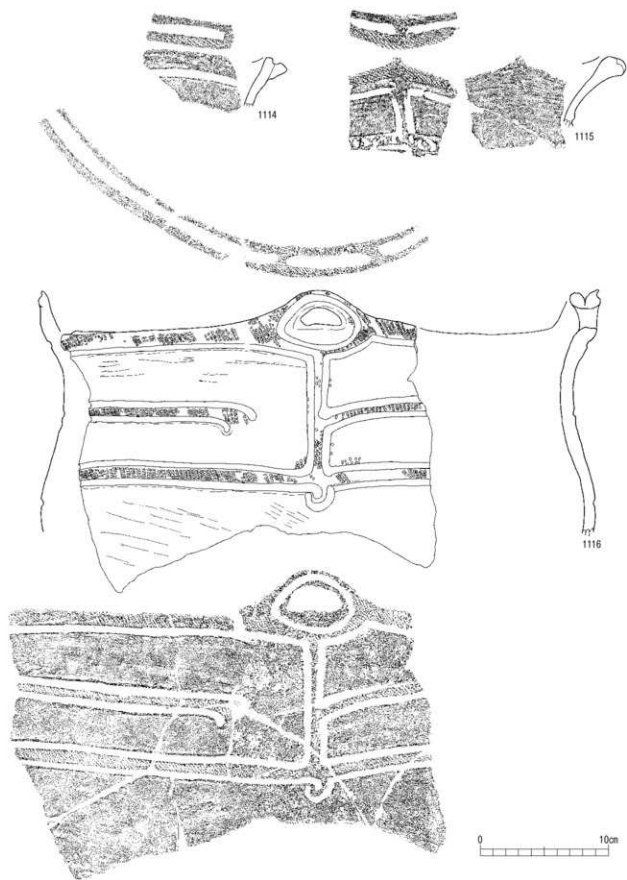
1143は外面に分厚くなった波状口縁の頂部で、口唇部

中央に刺突文があり、それをハの字状短沈線が挟んでいる。外面にもLRの縄文が残り、矩形沈線で囲んでいる。

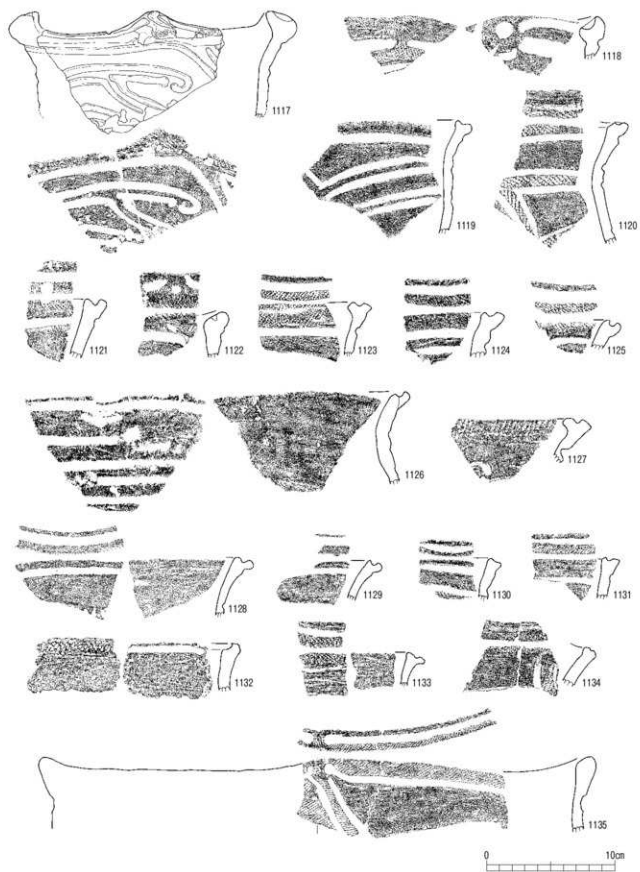
1144・1145は口唇部の沈線内に刺突文があるもので、同一個体と思われる。1144は突起の頂部で、内側に円盤状の粘土が貼り付けられ、これには中央に円形の窪みがあり、それを囲むように刺突文が密に丸く施されている。



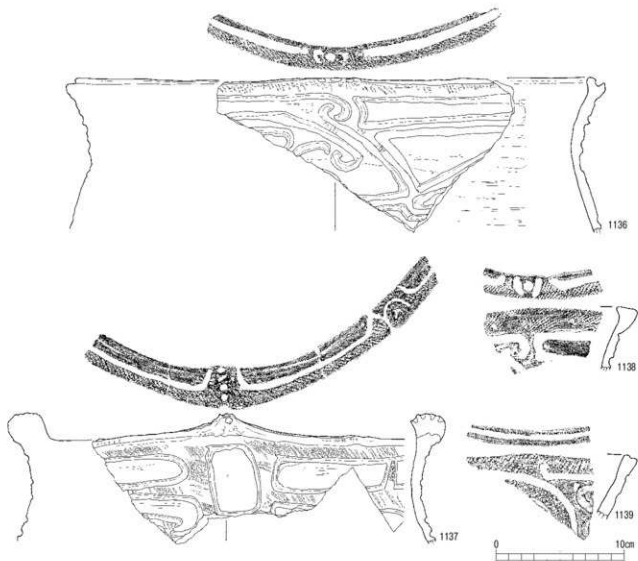
第134図 磨消縄文土器 (15) 深鉢I類⑨



第135図 唐消縄文土器 (16) 深鉢Ⅱ類①



第136図 唐滑縄文土器 (17) 深鉢Ⅱ類②



第137図 磨消縄文土器 (18) 深鉢Ⅱ類③

突起には他のものと同じようにLRの縄文原体が全体に施されている。外面は縦方向のヘラナデ調整で、上の方に2本の細かい沈線があり、下には普通の幅の沈線が1本ある。1145も口縁近くにLR原体の縄文が残っている。内面はヘラによる丁寧な横ナデである。

ウ 深鉢Ⅲ類土器 (第139図～第140図 1146～1178)

外へ開きながらまっすぐ伸びる器形を呈している。

1146は口径が23.6cmあり、端部は矩形を呈する。内面は粗い横方向のヘラナデで調整しており、外面に丁字文などを用いて、三角文や楕円文・矩形・入組文などを描いている。縄文原体はRLである。

1147は突起部で、2個の山形突起からなる。この頂部を中心に半円形の沈線が2本あり、その間に2段の刺突文(上が7個、下が8個)がある。直線や曲線で文様を描くが、線の端は丸く止めている。

1148はやや直口ぐみを呈しており、低い波状口縁の可

能性がある。最上部に8か所くらいで上に立ちあがる部分のある横沈線があり、そのだいぶ下にある横沈線との間はRL原体の縄文で埋めているが、その中に長方形を呈する沈線区画があり、その中はすり消している。

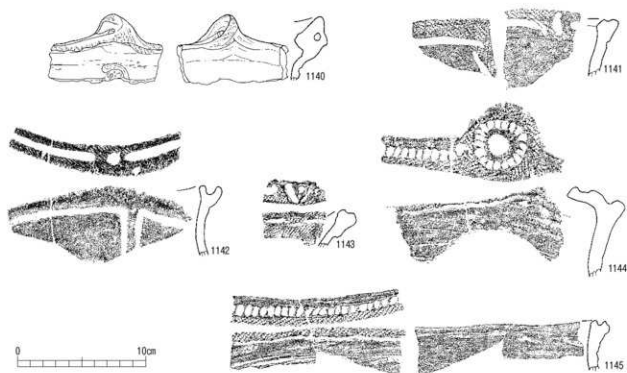
1149も同じような器形・文様を呈している。

1150も同じような器形だが、端部が丸みをおびた波状口縁で、突起部にはヘラ押圧文が見られる。突起部の数ははっきりしないが、3つの可能性がある。RLの縄文原体に横線と、楕円沈線文が見られる。

1151は横方向の沈線間にRLの縄文原体と磨消部がくり返される。

1152は頂部に押圧文があり、三角形沈線の外側にRLの縄文がある。

1153は口唇部が矩形を呈するが、口縁端には竹管状を呈する巻貝刺突文が施される。その下には2本の沈線間にRLの細かい縄文原体が見られる。



第138図 磨消縄文土器 (19) 深鉢Ⅱ類④

1154も同じような器形を呈した波状口縁で、横方向の沈線を用い、縄文原体はRLである。

1155・1156は端部が丸みをもつものである。

1155の口縁端近くはすり消しているが、その下に幅広くRLの縄文原体があり、そこに横あるいは斜めの直線や渦巻文が見られる。

1156は横線と楕円文・矩形が施され、その間にRLの縄文原体と磨消部が繰り返される。

1157は口径が26.5cmあり、横・斜め・J字文などの2本沈線で、矩形や三角形の文様を描いている。

縄文原体はRLで、磨消部分への縄文のはみ出しが多く見られる。1158とよく似ており、同一個体の可能性がある。

1159は波状口縁で、口縁部に2本沈線に挟まれたRLの縄文原体がある。

1160・1161は口唇部に押圧文のあるもので、縄文原体はRLである。横・斜状の沈線があり、三角形を呈する。1160には円形の補修孔が右下隅にある。

1162は内外面ともミガキに近い丁寧なヘラ横ナデで調整されている。口縁端を欠いているが、口縁部はやや膨らんでおり、RLの縄文原体のあと、縦方向の短沈線が並行して引かれる。外面の縄文は上部を残し、丁寧にすり消されている。

1163は三角形の突起部で、口唇部には左右3か所ずつのヘラ押圧文が付されている。内面はヘラによる横ナデで調整され、外面は突起部で入組文となる。RL縄文原

体が下にある横沈線との間に残るが、入組文左のすり消しは雑である。

1164は分厚く作られた突起部破片で、大きな孔が穿たれ、その周りには内外面とも沈線が施される。縄文も見え、外面には曲線や菱形の沈線文が見られる。磨耗が目立つ。

1165は貝殻条痕を地文とし、そのあとRLの縄文原体を付し、矩形と渦巻状の沈線を施している。

1166は分厚い口縁である。磨耗のため縄文がはっきりしないが、口縁端と2本沈線間に帯状で残っている。

1167は3本の横沈線とその間にRL縄文原体がある。口縁部は内側がまっすぐ伸び、外側は丸みをおびている。

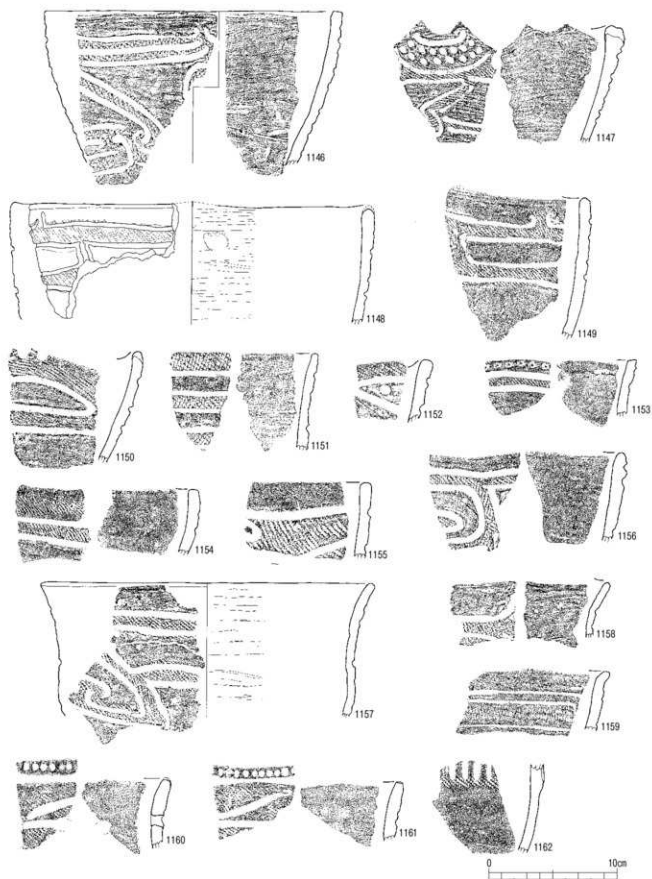
1168は口唇部が矩形を呈しており、横方向と斜方向の沈線で、矩形や三角形の文様となっており、最上の沈線は上へ屈曲している。2本沈線間の狭い部分はRL縄文原体が残り、その外はすり消している。内外面とも横方向貝殻条痕のあと、ヘラで横方向にナデ調整をしている。

1169も端部が矩形を呈し、2本沈線の間にRL縄文原体が残る。

1170は口唇部が丸みをおびた波状口縁で、口縁上部のRL原体の縄文は幅広い。縄文の下に横方向の2本沈線があり、縄文はほとんどすり消されている。

1171は口縁端近くで短く外反する器形で、2本沈線で矩形を作り、矩形内にはRL原体の縄文が残る。

1172は口縁端が丸みをもってやや膨らんだ波状口縁で、横方向やJ字文の沈線があり、矩形等をつくってい



第139図 唐消織文土器(20) 深鉢Ⅲ類①

る。沈線間にあったRLの縄文原体はほとんどすり消されている。

1173は内外面ともヘラで丁寧にナデたあと、2本沈線間にRL縄文原体を残す。沈線の中には両方とも横方向に巻貝による刺突文が並んでいる。

1174は口縁下にRLの縄文原体があり、その下に沈線がある。口唇部の縄文はすり消されている。

1175も口縁端を欠いているが、やや肥厚する口縁部近くの破片で、沈線が横方向に引かれ、その上にRLの縄文原体が残る。沈線内の円孔は、補修孔かと思える。

1176は口縁上部にRLの縄文原体があり、その下は幅が狭くて浅い横方向の貝殻条痕で消している。縄文残存部には矩形的沈線があり、矩形内はすり消されている。矩形と矩形の間には2つの刺突文がある。

1177は口唇部が矩形となり、外へまっすぐ開く口径が9.5cmの小型のものである。矩形を呈する突帯枠が横方向に連なり、四隅に刺突文のある枠と、中央に横方向の沈線の引かれる枠とがある。矩形の下にRL原体の縄文

がある。外面にはススが附着している。

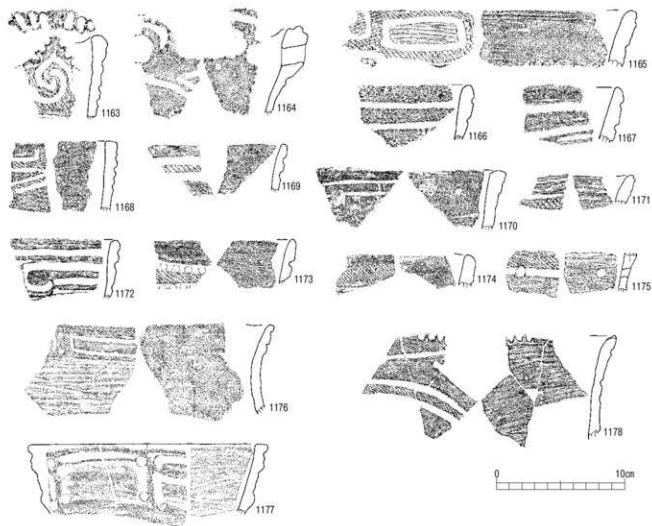
1178は直・斜・弧状の沈線で矩形等の文様を作っているが、沈線の端部は押し起している。口唇部に4列以上の押圧文が見られ、磨消部分は丁寧である。

Ⅱ 深鉢Ⅳ類土器 (第141図・第142図 1179~1193)

外面の口縁部から胴部にかけて全体に縄文の付されたもので、これらの中には刺突文・突帯文・沈線文・押圧文のあるもの、貝殻条痕でナデ消したものなどもある。

1179は口径が21.8cmで、外反ぎみの器形を呈している。口縁端はやや丸みをおびた、矩形である。縄文原体はRLで、幅は2cm足らずである。横方向に転がしている。内面はヘラによる丁寧な横方向ナデ調整で、外面にススが附着している。

1180は口径が21.8cmで、やや内反ぎみにまっすぐ立ち上がる器形をしている。縄文原体がRLのやや大粒の縄文が全面に施されたあと、口縁近くに細かい横方向の刺突文が押し起され、そこから口縁までは縄文が丁寧にすり消されている。外面も部分的にヘラナデのされた場所があ



第140図 磨消縄文土器 (21) 深鉢Ⅲ類②

る。内面は丁寧な横方向のヘラナデ調整で、外面にススが付着している。

1181は低い波状となる口縁部で、口縁端部近くでゆるやかに外反する器形である。外面は2cm足らずの幅をもつRLの縄文原形があり、口縁端部近くはすり消されている。内面はヘラによる丁寧な横ナデ調整である。

1182・1183は丸みをもった口縁部で、2cm幅ほどのRL縄文原形が外面に施されている。上の方は右下がり、下は縦方向である。内面は横方向のミガキに近い丁寧なヘラナデで調整される。内面にベンガラが付着している。1183は外面にススが付着している。1183がやや内反し、波状を呈しているが、同一個体の可能性がある。

1184は端部がやや外反する器形を呈しており、RLの縄文原形を外面に付している。上の方が左下がり、下の方が右下がり、畿形を呈している。

1185は内面に指頭圧痕が残り、外へ開きながらまっすぐ伸びる器形を呈している。RLの縄文原形が右下がりに付され、口縁近くには突帯が貼り付けられている。縄文部分も部分的にヘラナデが見られる。内面は横方向のヘラナデで仕上げているが、コゲが多く付着している。

1186はRL原体の縄文が付され、外へまっすぐ伸びる器形を呈している。口唇部は矩形を呈し、巻貝殻頂による竹筥状突文が押されている。

1187は口径が28.4cmあり、4か所に山形突起がある。突起部は分厚く作っており、3列のヘラ押圧文が見られ

る。外面から口唇部にかけてRL原体の縄文が付いているが、外面はのちに貝殻条痕で調整しているため、部分的にしか残っていない。内面も貝殻条痕で仕上げているが、下半部分はそのあとヘラでナデで調整している。

1188は単節縄文原形で、口縁端近くはナデ消されている。縄文のあと、あるいは波状の2本沈線が施され、沈線間は縄文を消している。器形は口縁へ向かって外反し、口縁の内外面にススが付着している。

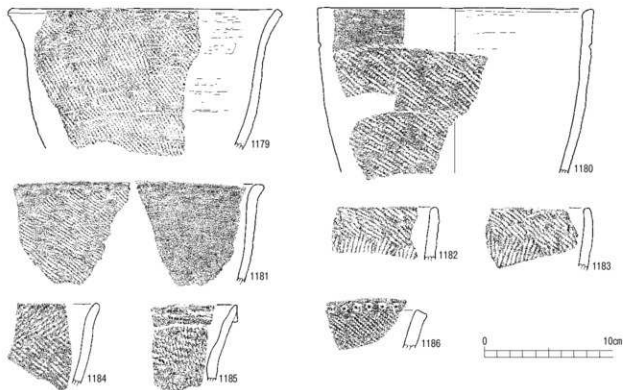
1189は大き目のLRの縄文原形が施された胴部で、つづら折り状の曲線が2本引かれている。内面は横方向のヘラナデである。色調・胎土などから指宿産のものと思われ、円盤形土製品として再利用された可能性もある。

1190は縦方向に縄文原形の施された胴部で、内面調整はミガキに近いヘラによる丁寧な横ナデである。

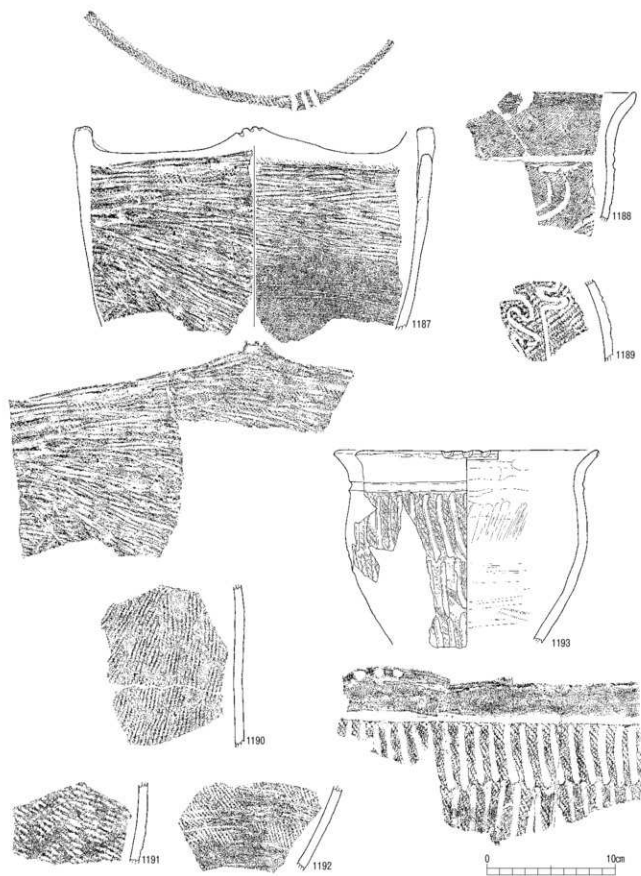
1191は大粒のRLの縄文原形が付された胴部で、部分的にナデ消されている。内面調整はヘラ横ナデである。

1192はRLの縄文原形のある胴部下半で、縄文が部分的にナデ消されているが、底に近い部分は丁寧に帯状に消している。内面の底近くにはコゲが付着している。

1193は口径21cm、残存高15cmの長胴形をしたもので、4か所に分厚く作った個所があり、ここに3列のヘラ押圧文が押されている。RLの縄文原形があるが、頸部に幅の広い凹線があり、そこから上はすり消されている。凹線の下部は縦方向の短い凹線が3段（ないしは4段）に、横へ間隔をもって引かれている。内面のヘラナデは、



第141図 磨消縄文土器(22) 深鉢IV類①



第142図 磨消縄文土器 (23) 深鉢Ⅳ類②

口縁と胴下部が横方向、胴上半が縦方向である。

(2) 鉢 (第143図～第153図)

深鉢に比べて器高が低く、頸部がくびれる器形を呈しているものである。これらの中には大きく分けて、頸部から丸みをもった口縁端へ外反する器形のもの（Ⅰ類）、Ⅰ類と同じく外反する器形であるが、口縁端（口唇部）に沈線を巡すもの（Ⅱ類）、無頸のもので内反する器形のもの（Ⅲ類）の3種類がある。

ア 鉢Ⅰ類土器 (第143図～第147図 1194～1233)

深鉢Ⅰ類とよく似た器形をしているが、頸部内面に稜をもち、器高が低く、頸部でくびれてから口縁端へ向かって外へ強く反るものが多い。肩部が外へ張り出し、丸みをおびた胴部から底部へすはまっていく。口縁部は端部が丸みをもつものと、矩形のものがあり、波状を呈するものが多い。波頂部は分厚くなり、ここに突起のあるもの、把手の付くもの、ヘラによる押印文のあるものもある。

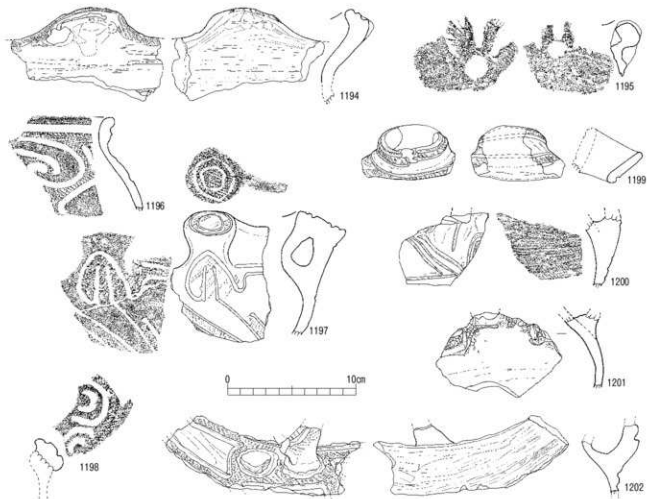
1194と1195は波状口縁の突起部である。

1194は突起部がやや分厚くなっている。RL原体の縄文が口縁端の外側から内側の一部に残っており、外面に沈線が横方向に短く引かれる。外面には突起部に把手の剥離痕と思われる部分があり、頸部には横方向の沈線が残っている。内面の口縁端付近は内側へ窪みをもって曲がっており、指頭圧痕もある。内面は横方向のヘラミガキで仕上げている。1195も突起部の破片で、この部分が分厚くなっており、3列の押印文が内面から外面へかけて見られる。内外面とも押印文の下に円形の窪みがある。表面が磨滅しているためにはっきりしないが、口縁端部にはRL原体の縄文が見える。

1196は口縁端が分厚く、やや波状を呈している。内面は横方向の縦線状ハケナデのあと、丁寧にミガかれている。外面は口縁下に横沈線があり、その下は2本沈線で「J」字文・楕円文・入組文などが描かれている。沈線間にはRL原体の縄文が残っているが、幅広い部分や口縁下の縄文はすり消されている。

1197～1199は突起部である。

1197は端部がやや内反する器形を呈し、これに把手状



第143図 磨消縄文土器 (24) 鉢Ⅰ類①

の突起が付いている。頂部はLRの縄文原体に2本の細い沈線があり、その周りの口唇部の縄文はすり消されている。外面は斜方向・横方向・縦方向・弧状などの沈線で複雑な文様をしており、狭い沈線間以外の縄文はすり消されている。

1198は円盤状を呈する突起部である。RL原体の縄文に半円状を呈する2本沈線が2か所反対向きに並んでいる。

1199は直径が4.5cmある筒形の突起で、まわりにRLの縄文本体と、これを挟んで楕円形状の2本沈線2段、磨消部とがある。

1200～1202は肩部の破片である。

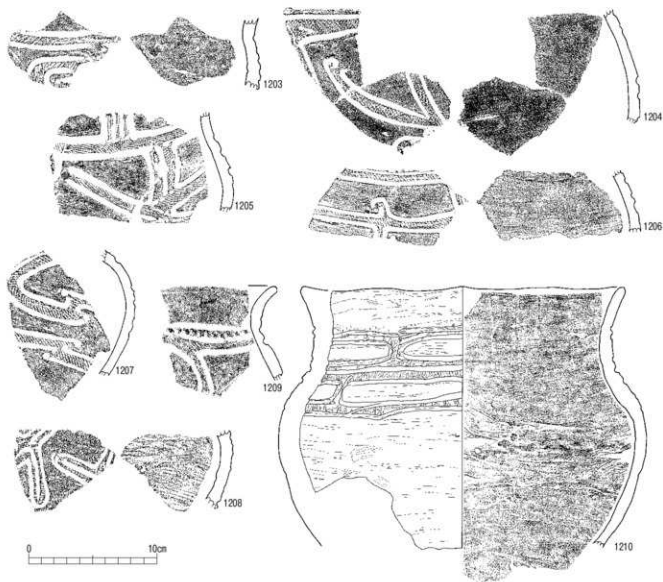
1200は棒状把手の欠けた痕跡が内外にあり、斜め・縦・横の3本沈線で三角形が描かれている。

1201も把手の欠けた痕跡が見られる。把手を囲むよう

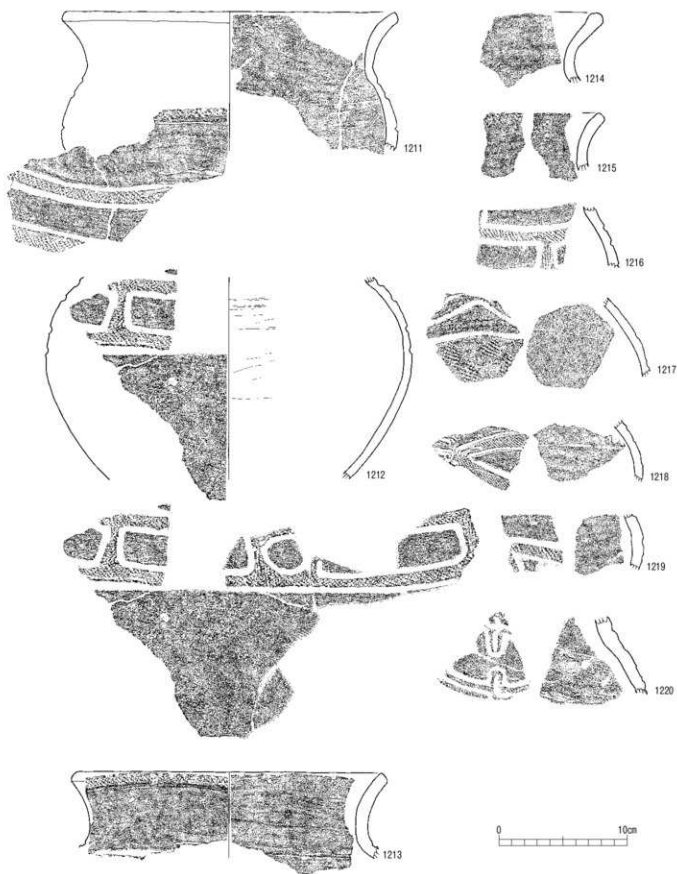
にしてRL原体の縄文と沈線があり、矩形を呈するものと思われる。内面は丁寧なヘラによる横ナデ、外面はヘラミガキで仕上げている。

1202も把手の欠けた痕跡がある。把手は二又に分かれて、口縁で合流するものであるが、わずかに残っているものはさらに二又に分かれていることから、棒状になるものと思われる。RL原体の縄文を幅広く把手の周りまで付けているが、矩形となる沈線に囲まれた部分はヘラミガキにより、すり消されている。内面は横方向のヘラナデだが、部分的にミガキが加えられる。

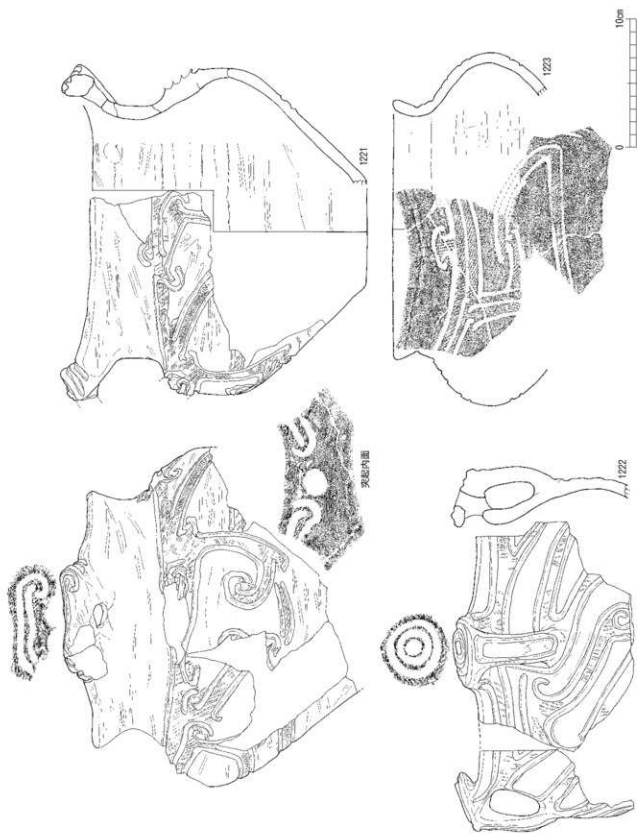
1203～1208は胴部の破片である。いずれも内面はヘラによる横ナデで、ミガキに近い丁寧なナデをしたものが多い。沈線はいずれも2本でなり、幅の狭いものが多い。この間に縄文が残り、外側はすり消されている。縄文本体は1203のみがLRで、ほかはRLである。



第144図 磨消縄文土器 (25) 鉢I類②



第145图 唐消绳文土器 (26) 鉢I類③



第146図 藤沼編文土器 (27) 鉢 1類④

1203は頸部付近の破片で、上に横方向の沈線があり、その下には楕円形状の枠内に短い横線がある。右側の方には把手の剥脱部があり、口縁突起につながるものと思われる。

1204は横・斜め・縦方向の直線や曲線・J字文などの沈線で、円文・三角形などを描いている。

1205は頸部近くの破片で、2本沈線だが、縦方向の沈線間はやや幅広く、その間に2本あるいは1本の縦線を引くが、その上下は沈線で囲っている。沈線間は三角形あるいは矩形・円形となる。

1206の沈線は深く、矩形を呈しているが、入組文も見られる。外面はミガキに近い丁寧なヘラ横ナデである。1207は曲線を主体とした文様構成で、端部は入組文を呈する。

1208は1220と似たような文様だが、斜め方向に向いており、長さが長く、Uの字のつけ根は三角形状となる。内面調整は最初が貝殻条痕で、そのあとヘラナデとなる。外面の沈線外はヘラミガキである。

1209は口縁部付近の破片で、頸部に2本沈線があり、その下に楕円文と矩形がある。2本沈線間には巻貝殻頂の刺突文があり、その下の沈線間にはRL原体の縄文が残されている。楕円と矩形の中、口縁端部分は縄文がすり消されている。

1210は口径が25.6cmある波状口縁で、胴下半部を欠いている。残存高は20.5cmで、口縁部の4か所に低い山状の高まりがある。内面はミガキに近い丁寧なヘラによる横ナデで仕上げている。外面は横方向のヘラミガキである。胴部上半から口縁部にかけて、2段の2本沈線とRL原体の縄文からなる文様が施されている。上から下へ3段の横沈線があり、その間に上段が楕円、下段が矩形を呈した文様があるが、ともに横長である。上段横線の一部に下向きのJ字文があり、下段の横線からその上の矩形へ結ぶ斜線もある。沈線間は幅狭の部分だけに縄文が残っている。

1211は口径が26.6cmである。横方向にまわる2本沈線が2段あり、その中にはRL原体の縄文がある。口縁端にも縄文があるが、その他は丁寧に横方向のヘラミガキですり消されている。内面も丁寧なヘラナデ調整である。

1212は胴部の大きな破片である。胴部上半に2本の沈線に挟まれたRL原体の幅広縄文帯がある。縄文帯の中には矩形と円形の沈線文があり、その中の縄文はすり消されている。下半部と内面は、ヘラによる丁寧な横ナデである。

1213-1215は1211と器形・文様・調整等が似ており、同一個体の可能性があるが、1213の口径は24cmとなり、やや小さい。外面に化粧土らしいものが見られる。1215の外面には赤色顔料も見られる。

1214も同じような器形をしており、磨滅しているためにはっきりしないが、口唇部にわずかに縄文の痕跡がある。内外面ともヘラによる丁寧な横ナデ調整である。

1216・1219は肩部と胴部で、2本沈線にはRL原体の縄文が残るが、その外はすり消されている。1216は矩形、1219は矩形あるいは変形文かと思われる。内面はともにヘラによる横ナデ調整である。

1217は肩部の破片で、上の方にある2本沈線は三角形状を呈している。縄文原形はRLで、下の方は縄文帯が幅広い。赤みがかった明茶褐色を呈しており、胎土などからしても指宿地方産のものと思われる。また、形状からして円盤形土製品として再利用された可能性もある。

1218も肩部の破片で、2本沈線は三角形状となっており、中の磨消部は菱形を呈しているようである。

1220は突起部の下にある肩部と思われる。上にある2本沈線から下へU字状しており、下の3本沈線からは上へやはりU字状に上がっている。中央沈線はこのU字の中央へ伸びている。縄文原形はRLで、沈線内だけに残っている。

1221は対面する2か所にこぶ状突起のあるもので、ここには把手が付く。口径は20.3cm(突起部で26.5cm)、高さは22cm(突起部で24cm)、底径は8.5cmである。内面はヘラによる粗い横ナデだが、部分的にはミガキしている所もあり、指頭圧痕も一部に残っている。外面は2本沈線による直線・曲線・J字文などが複雑にからんで三角形・矩形・入組文などを描いている。幅の狭い部分にはRL原体の縄文が残っているが、そこ以外は丁寧にミガキ・ナデで縄文をすり消している。突起部は3本の沈線と縄文で巻いており、頂部は両側がJ字状に曲がる沈線と、その中に横沈線があり、そのまわりに縄文がある。突起の内面は2本沈線と三日形沈線が両側にあり、その中央には孔が上から下へ穿たれている。はずれているが、突起の外面の左側から肩部に把手がかかる。

1222は4か所に把手付きの突起がある口径が28.6cmの鉢である。内面はヘラによる丁寧な横ナデで、外側には曲線やJ字文を主とした2本沈線で、楕円形・矩形などを描き、狭い部分はRL原体の縄文を残し、広い部分は縄文がすり消されている。突起部から肩部へ向かって板長の把手が貼り付けられる。把手の外面は2本沈線で縦長の矩形を描いている。頂部は2本沈線で同心円文が描かれ、その中央は円形の孔が穿たれている。外面にはスガ、内面にはコゲが付着している。

1223は口径が20.6cmある鉢で、胴部が強く外へ張り出し、低い器形となる。口縁はゆるやかな波状となり、口縁端外面にRL原体の縄文が残っている。その下は直線や曲線・J字文を主とした2本沈線で矩形・入組文などが描かれているが、最上の沈線には冠状をした文様も見られる。部分的には中央に沈線がはいつて、3本沈線

となる所もある。内面は丁寧なヘラによる横ナデ調整である。

1224は胴部から内傾しながら口縁へ向かっているが、口縁端近くで短く外反し、端部が細くなるものである。肩部に3本の細い沈線とRL原体の縄文が見える。最上の横方向沈線は途中で上へ上がり、その部分で中央の沈線が上へ山形に立ち上がっている。沈線の外は縄文がすり消されている。

1225は口縁端から内面にかけてRL原体の縄文があり、内面の口縁端近くに沈線がある。

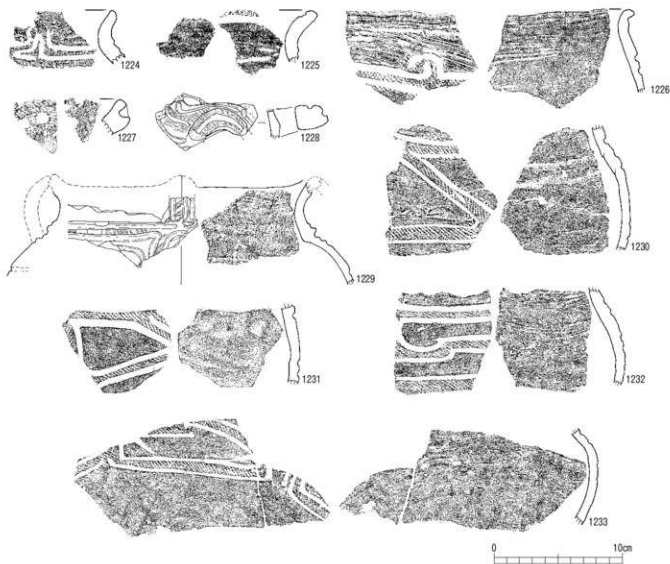
1226は口縁端部が外へ張り出しており、外面に入組文と渦巻文かと思える2本沈線と、RL原体の縄文が施されている。内外面ともに貝殻条痕のあとヘラによる粗い横ナデで調整されている。

1227は突起部の破片で、口縁端にRL原体の縄文があるが、その下はすり消されている。縄文帯には沈線と押

圧文がある。

1228は口縁部近くの破片で、幅が2cm、厚さが2.5cmある横長の把手が貼り付けられている。把手にはRL原体の縄文と、端がJ字文などとなる短い横長の沈線が施されている。

1229は口縁部を欠いているため全容がはっきりしないが、4か所に突起があり、そのうち2か所には把手の付くものである。口径は21.5cmほどである。把手の付かない方の突起部は上が欠損しているが、幅2cmほどに突出した帯状突起に縦方向の3本沈線があり、その間にRL原体の縄文が残っている。この突起部の下には短い横沈線があり、その脇は1本の沈線が伸びている。この沈線の下は帯状に突出しており、その上に縄文がある。その下には直線・曲線となる沈線があり、突起の下は円文あるいは渦巻文かと思われる文様がある。この左側は入組文か矩形となる。あとひと組の突起部は二又に分かれる



第147図 磨消縄文土器 (28) 鉢1類⑤

把手が付く。胴部にも1本の沈線がある。内面はヘラによる丁寧な横ナデである。外面はヘラミガキがしてある。

1230～1233は胴部である。

1230は肩部近くで、横あるいは斜方向の2本沈線で三角文が描かれる。RL原体の縄文が沈線間のみに残り、その外側はすり消されている。1.5cm幅の粘土紐で積み上げている状況が内面でうかがえる。

1231は肩部近くの破片で、2本沈線で三角文がつけられる。RL原体の縄文は沈線間だけに残り、三角文部分は丁寧にすり消されている。

1232は肩部で、3段の横線からなり、一部にJ字文が見られる。

1233は胴部の彫らんでいる部分で、RL原体の縄文と2本沈線で三角形などの文様が描かれる。縄文は2本沈線内だけに残り、周辺はすり消されている。沈線は端がJ字文状に曲がり、入組文のようになる所もある。ここの下部には沈線が見られない。

イ 鉢Ⅱ類土器 (第148図～第150図 1234～1246)

口縁部が外反し、丸くなった口縁端に1本の沈線が施されるもので、深鉢はほとんどが外面に縄文を残すのに対し、鉢は残さないものもある。外反度が弱いもの、直口釜みのもの、長胴形のもの、把手の付くものなど多様である。

1234は口径が20cmで、低い器形をしている。内面は横方向のミガキに近い丁寧なヘラナデである。口縁端はRL原体の縄文が施され、その中央を沈線が巡る。胴部から上方に横や縦・斜方向の沈線が施され、三角形や冠形などを呈する。沈線間には縄文が残るが、周辺はすり消されている。胎土に金雲母が含まれている。

1235は口径が22.5cmほどで、4か所の突起部には把手が付く。把手は上面が円形を呈し、RL原体の縄文が付される。この縄文地に渦巻文が2本沈線で描かれ、中央には孔が穿たれている。口縁端には縄文地に1本の沈線が引かれるが、突起部近くで内へ折れ、突起部近くには縦方向の2本沈線が引かれる。この把手は途中で二又に分かれ、肩部に貼り付く。肩部にはRL原体の縄文地があり、そこに直や曲の2本線が引かれ、三角文や入組文などを描く。沈線内は縄文が残るが、周辺はすり消されている。

1236は口径が30cmあり、強く外反する器形で、波状とはならないが、四隅で口縁端の沈線は端が上へ曲がり、その間に刺突文が見える。肩部を沈線がまわり、そこから下へ複雑に弧状の沈線が巡って、RL原体の縄文が部分的に残っている。内外面ともヘラナデで仕上げているが、磨耗が目立つ。

1237は波状となる口縁の突起部で、口縁端の両方からきた沈線が切れて、刺突文がある。外面には矩形沈線が

ある。

1238は口縁端にRL原体の縄文が付されるが、沈線の外側だけでなく、内側にも残っている。外面には横方向の沈線がある。内外面ともヘラナデで仕上げている。

1239は突起部で、リング状の突起が貼り付けられている。横から見ると、RL原体の縄文に円形の沈線文があり、縄文を挟んで中央には孔が穿たれている。口縁端近くからやや内へ広がる内面上部にかけては縄文があり、その下はヘラによる横方向のナデで仕上げている。

1240は口径が30.2cmで、口唇部には巻貝殻頂部による竹管風の連点刺突文がある。4か所に山形の低い突起があり、この突起の左側で端がJ字文状に折れ曲がる2本沈線が2段ある。上段・下段ともRLの縄文が中に残っており、上段と下段の間や、下段の下は縄文がすり消されているのに対し、上段から上は広く縄文が残っている。右側には矩形・楕円文があるが、上の矩形は縄文が残っているのに対し、楕円のほうはすり消されている。

1241は口径が21cmとやや小さいもので、口縁部が頸部から外へ開きながら直に近く立ち上がる長胴形の器形を呈す。口縁端の沈線外側には巻貝殻頂部による刺突文が連なっている。頸部から下には波状など複雑な沈線が見られ、沈線間にはヘラナデのままだが、やや下部にはRL原体の縄文が幅広く転がされている。赤っぽい明茶褐色を呈している色調などからして指宿地方産かと思われる。

1242は口縁端が矩形を呈し、口径が36.6cmと大きい鉢である。口縁端は4つある突起部で沈線が止まり、そこに縦方向の短い沈線が付けられる。内面は横方向の貝殻条痕だが、外面は丁寧な横方向のヘラナデである。外面には2本沈線で上下に横線が引かれ、その間に楕円文と矩形が描かれる。幅狭の沈線間にはRL原体の縄文が残されているが、その外や楕円・矩形の中はすり消されている。

1243は口縁部が短く、すぐに肩部へ移る器形をしており、外面には横方向を主とした沈線がある。2本沈線間は狭く、口唇部外面のみにRL原体の縄文が残っている。沈線の端部は押圧文あるいはJ字文状となる。内外面とも丁寧なヘラによる横ナデである。

1244～1246は同じような口縁部破片で、1244だけが波状となる。口縁端外面に残る縄文原形はいずれもRLで、外面に沈線がある。横方向に1244・1245は1本、1246は2本が引かれ、1244はさらに直交する縦方向に2本が引かれている。

ウ 鉢Ⅲ類土器 (第151図～第153図 1247～1269)

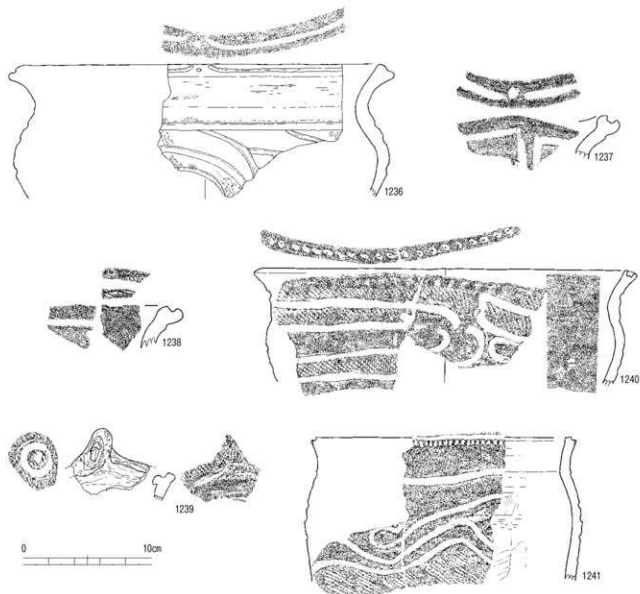
口縁部が内反するもので、これにも軽く内反するものと、強く内反するものがある。

1247～1256は直口に近く、ゆるやかに内反するものである。

1247は口径が24.2cmで、底部からまっすぐ立ち上がり、



第148図 唐消繩文土器 (29) 鉢Ⅱ類①



第149図 磨消縄文土器 (30) 鉢Ⅱ類②

口縁近くでゆるやかに内反するもので、端部は丸みをおびた矩形を呈する。外面は直あるいは曲線の2本沈線で三角形や菱形あるいは楕円形などの文様をつくり、主として狭い沈線間にはRL原体の縄文が残り、広い空間の縄文はすり消されている。内面はヘラによる丁寧な縦を主としたナデで仕上げているが、部分的に積み上げ直や、指頭圧痕が残っている。外面はミガキに近い横や斜め方向の丁寧なヘラナデである。

1248は口径が30.4cmある大型のもので、口縁は内反しながら、端部でわずかに外へ反っている。ほぼ平口縁で、2本沈線は直を主体とし、最上の横線が、1か所で上へJ字状に立ち上がり、最下の沈線はそこで下半円状に曲がっている。その間にはRL原体の縄文があるが、その中に細長い矩形の沈線が引かれ、矩形内は縄文がすり

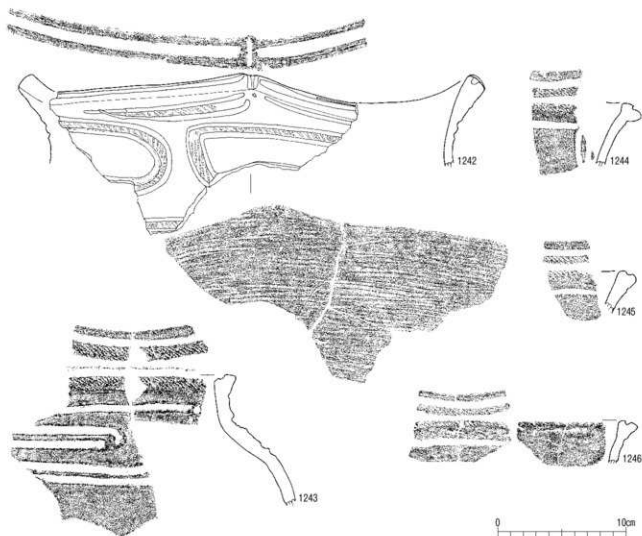
消されている。内外面ともヘラによる横方向のナデ調整だが、外面はミガキに近い。

1249～1251は内傾する口縁で、端部はいずれも丸みをおびているが、1249は矩形に近い。

1249は上に横方向、下にJ字文を含む横沈線があり、その中はLR原体の縄文がある。この縄文帯の中に矩形と楕円の沈線が描かれ、その中は縄文がすり消されている。内外面とも丁寧なヘラによる横ナデ調整である。

1250は口径が22.6cmあり、無文であるが、外面をヘラミガキで仕上げているため、この類にいれた。内面もヘラによる丁寧な横ナデである。

1251は口縁の端近くに幅広い原体RLの縄文帯があり、その中と下に2本の横沈線がある。沈線の下は丁寧にヘラでナデている。



第150図 磨消縄文土器 (31) 鉢Ⅱ類③

1252は口縁突起部の破片で、外面の左側に把手の剥離痕が見られる。口縁端部にRL原体の縄文を挟んだ2本沈線があり、突起の左右両側にも縄文を挟んだ2本沈線がある。中央に大きな孔が穿たれ、把手の逆側には浅い窪みがある。

1253はやや薄い作りの口縁部で、波状口縁となる。縦・横・斜方向の直線や曲線・J字文の沈線によって矩形・入組文などを描いている。RL原体の縄文が沈線間や口縁端には残っているが、その外や矩形内などはすり消されている。

1254は2本沈線で直線・V字状の文様を描き、沈線の幅狭のほうにRL原体の縄文が残る。内面は丁寧なヘラによる横ナデで仕上げている。

1255は2本沈線の中にRL原体の縄文が残る口縁部で、その外は丁寧にすり消されている。左側には入組文と、渦巻文らしき沈線が見られる。

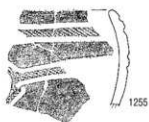
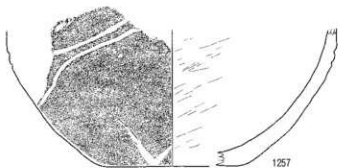
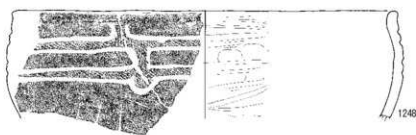
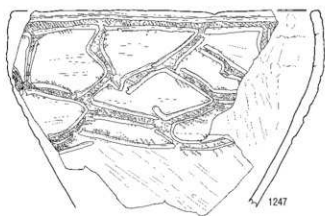
1256は突起部を欠いているが、波状となる口縁で、突

起部では入組文など曲線を複雑に描いている。幅狭の沈線間にRLの縄文が残っている。

1257は底径が11.4cmある浅いあげ底で、丸みを持った鉢の下半部である。底の角部分はすれている。内外面ともヘラによる横ナデ調整だが、外面は特に丁寧にナデられている。外面には幅の狭い2本沈線の曲線が描かれているが、沈線間にはRL原体のこまかい縄文が残されている。

1258~1267は強く内反するもので、その中には縄文原体を残さないものもあるが、沈線間を丁寧に研磨しており、この類にいられた。

1258の最大径は胴部であり、約23cmあるが、そこから内反し、口径は18.4cmである。内面はミガキに近い丁寧なヘラナデで、輪積み痕跡を残している。外面の下半部は斜方向のヘラケズリであるが、上半部はヘラミガキで仕上げ、そこに直線・曲線が沈線で引かれる。短い線も多く、長楕円形や縦長の菱形、横長の三角形などがある。



第151图 唐消绳文土器 (32) 鉢Ⅲ類①

1259は口径が22cmで、最大径は29cmある。内面はヘラによる丁寧な横方向のナデで、輪積み痕跡を残している。外面はヘラミガキで仕上げている。短い横線、縦線や連続する曲線などの沈線が引かれ、楕円文・長楕円文・三角文、あるいは横長押印文・つづら折り文などが描かれている。

1260は最大径が22.8cmあり、内反して口縁部へ向かうが、口縁部が欠けている。内面はヘラによる丁寧な横ナデ、外面は丁寧なヘラミガキで仕上げている。端を押さえる沈線で曲線を主体としており、楕円形あるいは渦巻文や矩形・靴形などを表現している。

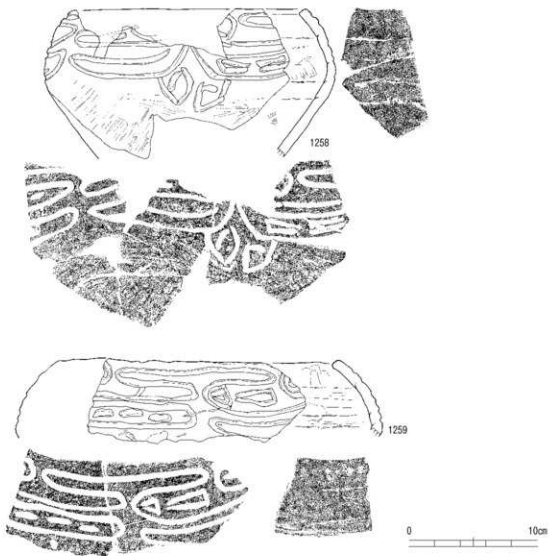
1261は最大径が28cmあり、口縁部を欠いているため、あるいは外反する形かもしれない。内面はミガキに近いヘラによる横方向のナデで、外面はヘラミガキで仕上げている。3本沈線で、三角文や円文を描いているが、沈

線の端がJ字状に曲がるものもある。沈線内にRL原体の縄文が残っている。

1262は口径が19cmで、内面はヘラによる横ナデ、外面はヘラミガキで仕上げている。内面には2か所に輪積み痕が見られる。口縁端近くに2本沈線があり、間にRL原体の縄文が見られる。

1263は口縁部が水平に近く屈曲しているもので、波状を呈している。内面はヘラによる横ナデで仕上げ、外面は細かいLR原体の縄文が全体に付けられ、その中に矩形や半円形の沈線が施されている。外面の右端には補修孔らしき直径約8mmの円孔が穿たれ、胎土に金雲母が含まれている。

1264は肩部の破片である。RL原体の縄文が間にある2本沈線が2段あり、その間はミガキによって縄文がすり消されている。下の沈線は矩形と思われる。内面調整



第152図 磨消縄文土器 (33) 鉢Ⅲ類②

もミガキに近いヘラによる丁寧な横ナデである。

1265は2本沈線が渦巻状に曲がっている。沈線間の狭い部分にはRL原体の縄文があり、その間の広い部分はヘラミガキで縄文をすり消している。

1266も肩部の破片で、横方向の沈線と5本の縦あるいは斜方向の沈線が引かれる。その間にはLR原体の縄文が残っているが、その外側はすり消されている。沈線は巻貝殻頂で引かれており、線の端は深く刺突されている。小型のものと想定される。

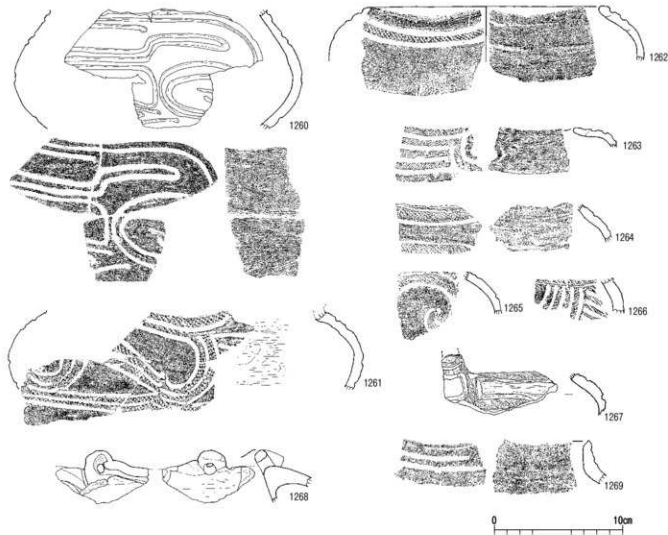
1267も肩部であるが、突起部近くの破片で、棒状把手が折れている。把手の周りを含めて肩部にはRL原体の縄文が施されており、棒状の周りには一周する沈線で、肩部には矩形状の沈線が施され、矩形の中の縄文はすり消されている。

1268は波状となる口縁の突起部で、内面は横方向のヘラナデ、外面は丁寧なヘラミガキで仕上げている。口縁には帯状の突起が貼り付けられ縦方向に孔が穿たれている。突起を巻くように沈線が施され、ヘラミガキの中にかすかにRL原体の縄文が見える。突起の下に把手の折れ口が見える。

1269は内反しながら、端部が短く直に立ち上がる口縁で口縁端付近にLR原体の縄文がある。矩形に上へ曲がる沈線とその中央に横沈線が施されている。沈線の下は縄文がすり消されている。

(3) 注口土器 (第154図 1270~1273)

完全な形を留めるものはないが、注口部や形状の似たものを含めて4個体分ある。胴部は丸みをおびた鉢形を



第153図 磨消縄文土器 (34) 鉢Ⅲ類③

呈しており、把手を有するものもある。

1270は注ぎ口付近の破片である。注ぎ口の端は一部が欠けているが、長さが4cmほどで、直径が2.4cm、孔径が1cmあり、注ぎ口の端は矩形を呈している。注口部の脇に榫状の折れ口があることから、把手が付いていたものと思われる。注口周辺と把手近くにはRLの縄文原体が見られ、2本沈線がある。2本沈線内の縄文は残され、周辺がすり消されている。外面はヘラによる丁寧な横ナデで調整し、内面はヘラ横ナデ調整だが、指頭圧痕も多く見られる。

1271は注口部と、そこから口縁部へ延びる把手がある。注ぎ口は長さが約7cm、長径が2.3cm、孔径が1cmあり、端部は丸みをもっている。注口部の付け根付近から把手へ向かって1本の沈線がある。ヘラによるミガキに近い丁寧なナデ整形で仕上げ、明茶褐色を呈している。焼成度は良い。

1272は注口部の付け根下部である。直径は2.5cm、孔径は1cmほどと思われる。付け根の周りにはLR原体の縄文と、注口へ向く半円形沈線、注口から外へ向く3つの楕円形沈線がある。楕円形内は縄文がすり消されてい

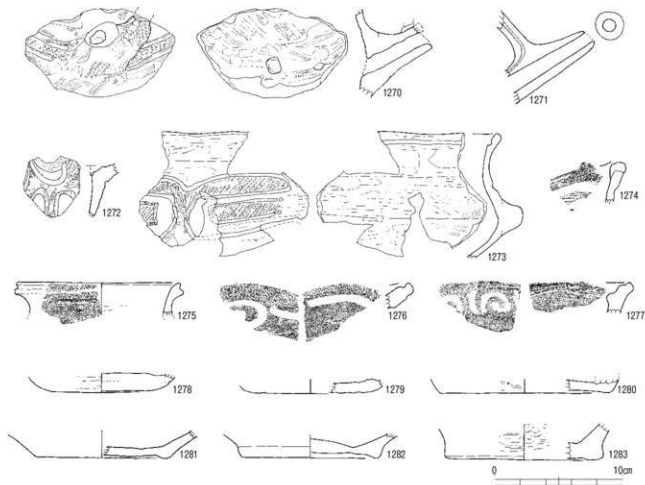
る。黒っぽい淡茶褐色を呈している。内面はヘラナデ調整である。

1273は注口部がないが、こぶ状の貼付突起があり、ここで扱った。ゆるやかに外反し、端部が矩形を呈する口縁部から、胴部で膨らみ、丸みをおびて底部へうつる低い器形である。先端が直径1.5cmほどのブタ鼻状の突起が1か所あり、ここを中心として楕円形あるいは矩形を呈する沈線が見られる。沈線の端には小さな刺突文がある。突起部では沈線がX字状を呈する。楕円・矩形内にはLR原体の縄文が残り、周辺はすり消されている。内面はヘラによる横ナデ調整で、外面は丁寧なヘラミガキである。口縁近く内面に1本の沈線が通っており、乳茶褐色を呈している。

(4) 小型土器・広口壺・浅鉢 (第154図 1274~1277)

深鉢・鉢・注口土器のほかにも多様な器種がある。

1274は突起部のある小型の深鉢である。三角形状に突き出した突起部が4か所にあると思われるが、この突起部は貼り付けによって作られる。この突起部で高くなる波状の2本沈線間にはRL原体の縄文が残っており、周



第154図 唐消縄文土器 (35) 注口土器・小型土器・広口壺・浅鉢

辺はすり消されている。内面はヘラによる右から左への横方向ケズリで仕上げ、外面はヘラナデで仕上げている。焼成は良好である。

1275は口径が12.8cmある広口小壺の口縁部である。口縁部は肥厚し、この端部にRL原体の縄文が施され、その中央に沈線がある。内面はヘラによる丁寧な横ナデで、外面はミガキで仕上げている。深鉢Ⅱ型に似た口縁である。

1276も広口壺と思われる。外面はRL原体の縄文と渦巻状あるいは蕨手文の沈線からなり、沈線間あるいは沈線下はすり消しとなる。内面には途切れる沈線がある。こまかい砂質土を用いている。

1277は皿状になるような器形をしているが、浅鉢かもしれない。内外面ともヘラによる横方向のナデだが、口唇部は矩形となり、調整はミガキに近い。内面の上向き部分に蕨手文と三日状の沈線がある。白雲母や石英などのこまかい土を用い、黒褐色を呈している。

(5) 底部 (第154図 1278~1283)

多くの深鉢・鉢があるが、完形品は少なく、底部の形状は定かではない。ここでは形状・調整などからして磨消縄文土器の底部と考えられる2種の底部を紹介しておく。この他にも異なった底がある可能性はある。

1278・1279は丸みをおびた底である。

1278は底径が8cmほどで、厚さが1.5cmあるが、粘土帯を底に貼り付け、厚くしている。外面は丁寧な横方向のヘラナデ、内面はヘラナデで仕上げている。茶褐色を呈している。

1279は底径が11cmほどで、厚さは0.8cmである。内外面ともヘラナデだが、外面調整は丁寧なヘラナデである。1280はあげ底となる底径13.2cmの平底で、内外面ともヘラによる丁寧なナデ調整だが、外面は特に丁寧にミガキに近い。底と胴部の貼り付けは、ヘラナデをしたあと、ある程度乾いてから積み上げ、内側には薄く粘土を補充している。乳茶褐色を呈している。

1281~1283は底部端が高い高台状となるもので、高台状部分の豊付部はいずれも磨滅している。

1281は底径が10.4cmで、外へ強く開いており、器種は鉢の可能性が高い。外面はヘラによる丁寧な横方向のナデで、ミガキに近い。内面はヘラナデで、茶褐色を呈している。

1282もヘラナデで仕上げているが、あげ底となる外底部は特に丁寧である。底径は10.6cmで、底の上から外へ強く反っており、これも鉢かと思われる。

1283は先の2つに比べて分厚く、深鉢かと思われるが、底の形状は似ている。底径は12.4cmで、内外面とも横方向のヘラナデで仕上げているが、外面調整は特に丁寧にあげ底となる。焼成度は良い。

(6) 持ち込みざれたと思われる土器 (第155図・第156図 1284~1298)

県内において磨消縄文土器の出土は少なく、これまではいずれも持ち込みの品と考えられてきたが、近年調査が進むにつれて、量産に出土する遺跡もでてきた。始良市干迫遺跡などはその代表的な遺跡である。干迫遺跡は本遺跡に比べるとやや時期が遅れるが、深鉢と鉢の使い分けがあった可能性さえ考えられている。本遺跡においても、その出土個数は200点を越しており、必ずしも少なくない。また、1222のように胎土・色調などから在地産とみられるものも少なくはない。したがって、これらはいずれも持ち込みと考えるわけにはいかない。ここで分けて扱ったのは、調整・色調・器形など他と区別できるほど異なっているものである。

1284~1287は内外面ともミガキといっているほど丁寧な横方向のヘラナデが施されているものである。器種はいずれも鉢である。

1284は丸みをもった口縁端へ、内反して立ち上がる器形をした鉢で、波状口縁の頂部付近の破片である。頂部付近で最上の沈線が端部へ曲がり、その下は渦巻状となる。縄文原体はLRで、口縁部付近と、2本沈線の間の縄文は丁寧にすり消されている。磨消部は沈線の高まりもない。

1285はゆるやかに外反しながら立ち上がる口縁部で、端部近くで直に内側へ折れている。外面の沈線は矩形を呈し、沈線間のみRLの縄文原体を残し、その周囲は丁寧にすり消している。その際、一部の縄文も消されている。1284と同じく乳茶褐色を呈している。

1286は把手のある鉢である。把手は直径3cm余りの棒状を呈し、端部は丁寧に削って丸みをおびた矩形を呈している。この突起にLRの縄文原体と2本沈線の文様が付けられているが、沈線間の縄文は残され、その外の三角形や矩形を呈する部分はすり消されている。沈線内には刺突文が連続して付けられている。突起の下に沈線が見られる。外面は乳茶褐色を呈している。

1287は低い高台をもち、あげ底となる底部で、内外面だけでなく底部外面もヘラミガキで仕上げている。乳茶褐色を呈している。

1288は黒灰色を呈し、肩部の2か所に吊手状の突起をもつ鉢で、白色石を多く含む胎土を用いている。器形とともに色調・胎土にも特徴のあるものである。口径は8.8cmで、端部は丸みをおびている。肩部はゆるやかに内傾し、口縁端近くでゆるやかに立ち上がっている。約20cmある胴部最大径の部分から肩部にかけて2本の並行沈線で囲み、囲まれた部分は低い高まりをもつ。最下部の沈線は突起部近くで蕨手文状を呈して下へ曲がっている。突起部は山形状となり、中央に孔を穿っている。上の沈線は突起部と突起部の中間付近で上へ向って蕨手文

状に背中合わせとなって曲がっている。高まり部分から突起部にはLR原体の縄文が施されているが、その中に矩形や渦巻文の沈線文が10か所あり、この中は縄文がすり消されている。文様帯は中央の蕨手文の下に渦巻文を置き、その脇に矩形文が2個ずつ置かれる組み合わせになっている。白色石のほかには石英・長石・白雲母などを含み、粗い土を使っている。

1289～1291は内面の口縁上部で稜をもって屈曲するものである。

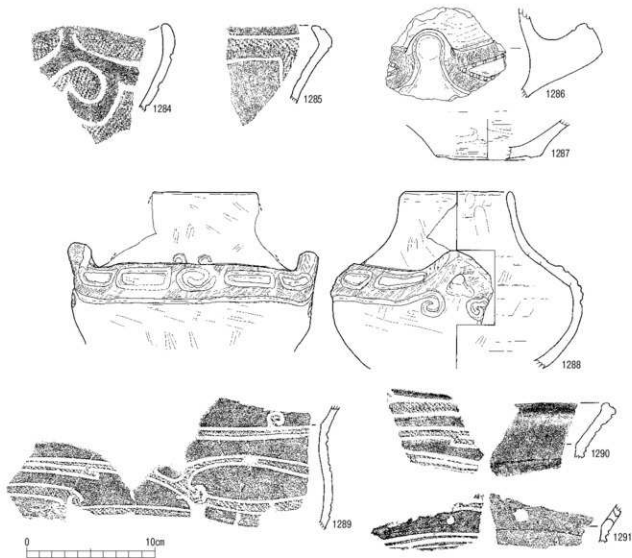
1289はまっすぐ伸びる口縁部と丸みをおびた胴部からなる深鉢である。外面は幅の狭い2本沈線が直線・曲線で引かれるが、線の端は蕨手文状に曲がり、入組文をなすところもある。頸部近くの最上にある直線は上に蕨手文をなしている。曲線は楕円文や矩形を作り、この中はRL原体の縄文をすり消している。灰褐色を呈しているが、

一部に丹塗り痕がみえる。

1290は短い口縁部のある鉢で、丸みをおび、やや上に立ち上がる口縁部には沈線がある。幅の狭い2本沈線は直線を主とし、1段下がりやや広がった部分では短い横線が1本引かれる。RL原体の縄文は沈線間のみに残され、その外側は丁寧にすり消されている。内面も丁寧なヘラミガキで仕上げている。

1291も1290と同じような文様をしているが、頸部の上に補修孔がある。

1292～1294・1296～1298は同一個体と思われる鉢である。安定した底からゆるやかに外へ反りながら口縁へ立ち上がり、口縁部には丸みをおびている。口径は36.6cmである。頂部と思われる口唇部には口縁部から2本あるいは3本の沈線が延びている。口縁近くの内面は稜をもって屈曲しているが、その下はやや窪んでいる。この

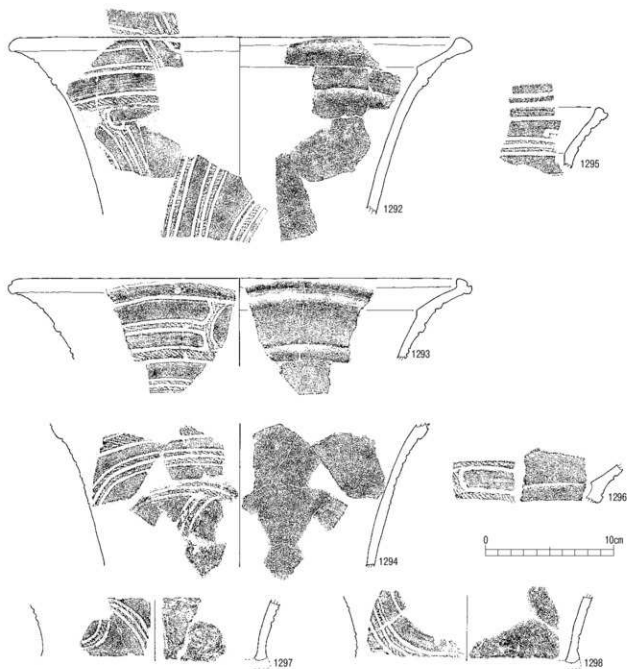


第155図 磨消縄文土器 (36) 持込み土器①

屈曲部のやや下の外側にある縄文帯はやや影らんでいる。縄文本体はRLで、沈線内は縄文が残され、それ以外はすり消されている。内面は丁寧なヘラの横ナアである。1292は上部が横方向の2本沈線、下部が縦方向の3本沈線である。2本沈線の最下部には蕨手文も見られる。1293は沈線で矩形を呈しており、その中は丁寧にすり消している。2段の矩形の右側は2本沈線を挟んで、楕円形になっている。1297・1298は底部近くの破片で、直径が約18cmである。底部を作ってから、胴部を乗せていく作り方である。縦方向におりてきた2本あるいは3

本の縦沈線は底近くで緩やかに曲がるか、そのまま止っている。これらは暗茶褐色を呈し、焼成度は普通で、軟質となっている。黄白色石・白雲母・長石などの3mmほどまでの細石を含む粘土である。

1295は1292などとよく似た破片だが、口縁端に沈線があり、影らむ縄文帯が1292などは頸部より下にあるのに対し、頸部より上にある。2本沈線で矩形や楕円形を作っている。沈線内に朱がある。



第156図 磨消縄文土器 (37) 持込み土器②

7 指宿式土器

本遺跡の指宿式土器は、器種では深鉢がその主体を占め、口縁部に施される直線的沈線による文様構成によるものがその主体を占める。

本報告書では、指宿式土器を器面に施されている文様により、Ⅰ類からⅦ類に分類して掲載している。

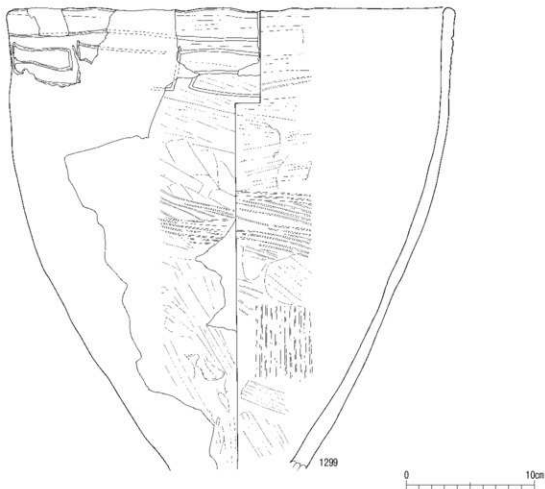
Ⅰ類土器は、直線的な沈線により文様が施されているものである。その構成される文様には、靴形・矩形・菱形・三角形・W字状などのものがある。Ⅱ類土器は、曲線的な沈線により文様が施されているものである。その構成される文様には、人形・楕円・つづら折り・S字状などのものがある。Ⅲ類土器は、横位の沈線のみによる文様が施されているものである。横位の直線のみ・横位の入組文のみ・横位の鉤状のみ・横位の波形のみなどのものがある。Ⅳ類土器は、指宿式土器のなかで、外面にヘラあるいは巻貝殻頂部を用いた沈線文と二枚貝腹縁や巻貝殻頂部による刺突文等を組み合わせた文様を呈するものである。Ⅴ類土器は、指宿式土器のなかで、外面の文様施文具に一部沈線があるものの、二枚貝・巻貝など

の貝類による文様を主体としているものである。二枚貝の腹縁部を押し付けて文様としたり、巻貝の殻頂部を突き刺したり殻頂部付近を転がしたりして文様としたりしている。Ⅵ類土器は、指宿式土器のなかで、口縁部の突起部に飾りを付けたものや把手である。平面的な突起部に穿孔するもの、立体的な突起部のものなどがある。Ⅶ類土器は、無文の土器である。

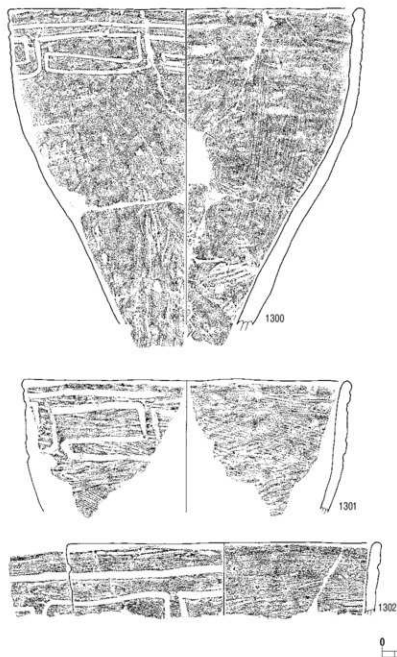
これらのⅠ類土器からⅦ類土器の指宿式土器は、深鉢形・鉢形・台付鉢形・小型土器などの器種に別れ、さらに口縁部が直行するもの、外反するもの、内反・内弯するものがある。また、口縁部が肥厚するものがある。器面調整は、内外面ともに貝殻痕により調整されるものがほとんどであるが、なかには丁寧なナデにより貝殻痕の痕跡をきれいにナデ消しているものが見られる。

(1) Ⅰ類土器 (第157図～第214図)

Ⅰ類土器は、直線的な沈線により文様が施されているものである。その構成される文様には、靴形・矩形・菱形・三角形・W字状のものがある。深鉢・鉢がある。器



第157図 指宿式土器 (1) Ⅰa類①



第158図 指宿式土器(2) Ia類②

形的には、口縁部が外反するもの、直行するもの、内反・内弯するものがあり、口縁部形態も平口縁、波状口縁のものがある。

ア Ia類土器(第157図～第214図 1299～1593)

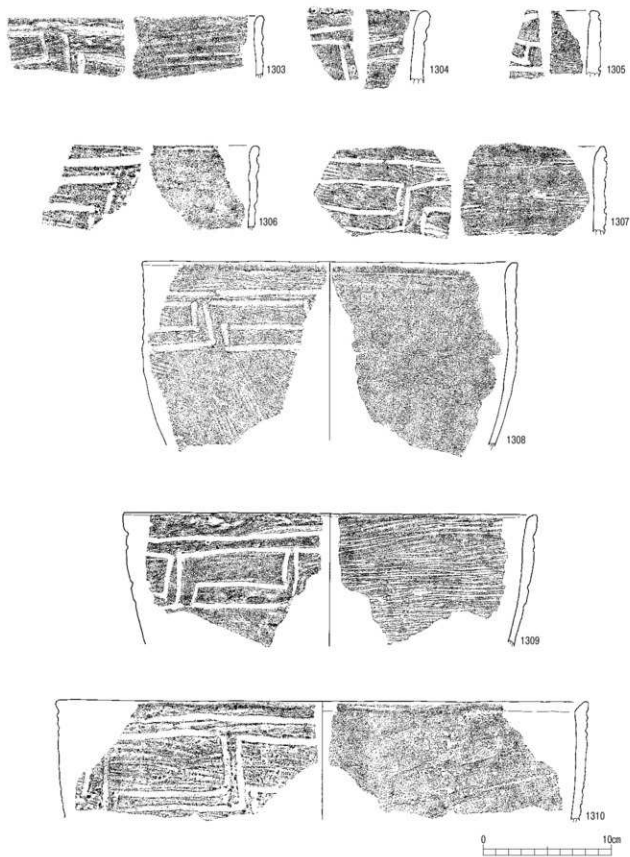
口縁部付近に、直線的な沈線により靴形文を横位に連続的に施すものである。靴形文の上位に横位の沈線を1本あるいは2本巡らすものと横位の沈線を巡らさないものがある。横位に展開する靴形文は、一筆書きのように一連に続けて描いたものと数回に分けて描くものとが観察される。また、靴形文の靴形先端部が角ばるものやや丸みを帯びるものがある。器面調整は、横位や縦位、斜位の貝殻条痕により施されているものがほとんどであ

る。底部は平底であり、外面に土器製作時に敷いた羅み物の痕が残っているものがある。

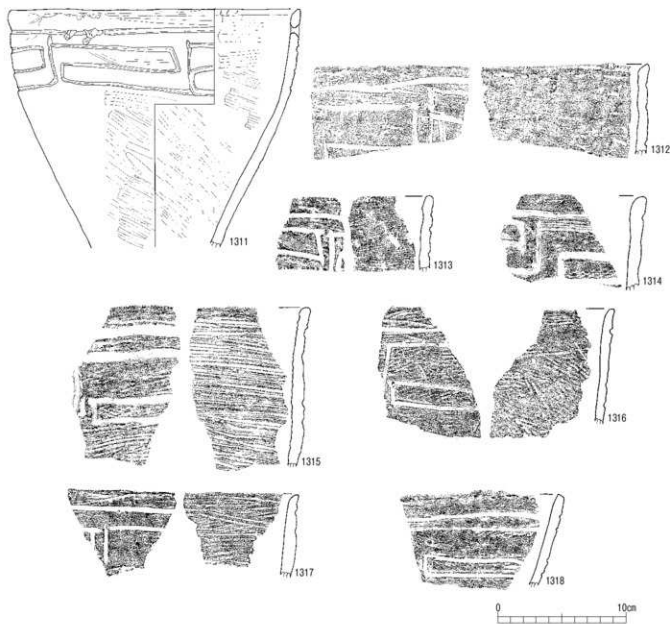
1299～1379は、深鉢であり、口縁部に靴形文を横位に施すものである。平口縁であり、口縁部がまっすぐ立ち上がるものあるいは胴部から開きながら口縁部にいたる器形のものである。口縁部は、丸く取まるもの、やや尖ったようになったもの、平らに仕上げられているものがある。

1299～1338は、口縁部に横位に沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。

1299～1308は、口縁部がまっすぐ立ち上がるものである。1301は、靴形文の靴形先端部がやや丸みを帯びるも



第159图 指宿式土器(3) Ia類③



第160図 指宿式土器(4) I a類④

のである。1303・1306は、器壁が薄いつくりのものである。1305は、口縁端部が平らに仕上げられている。

1309～1318は、胴部から開きながら口縁部にいたるものである。1309は、1つの靴形文を描くに、5回に分けて描いているものである。1311には、補修孔と思われる孔が2か所穿たれている。また、口縁端部内面には一部に刻みが施されている。1316・1317は、口縁端部がやや尖るように仕上げられている。1318は、口縁端部が平らに仕上げられている。

1319～1338は、1299～1318までのものと比べると、靴形文がやや細長く描かれているものである。

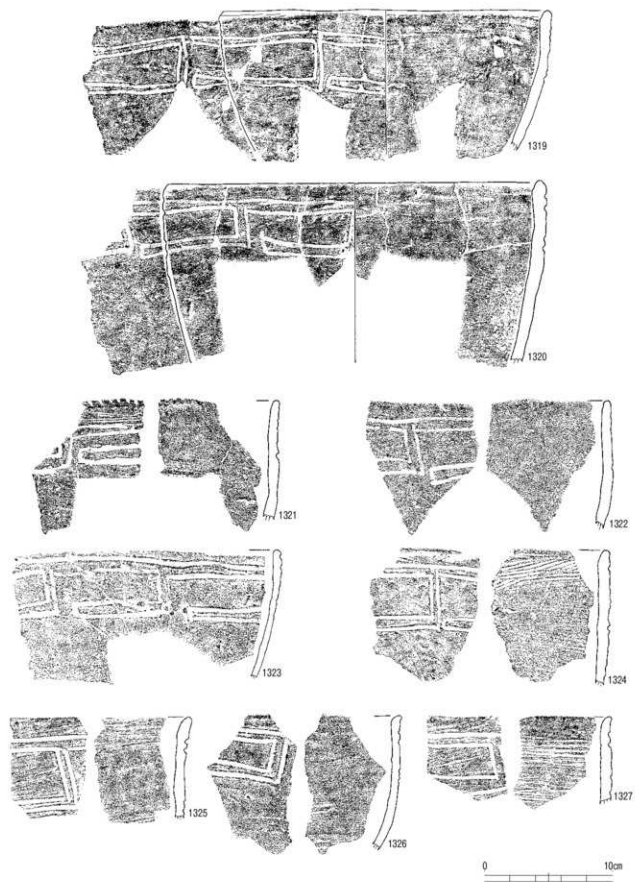
1319～1328は、口縁部がまっすぐ立ち上がるものであ

る。1321は、口唇部にヘラ状工具による刻みが施されている。

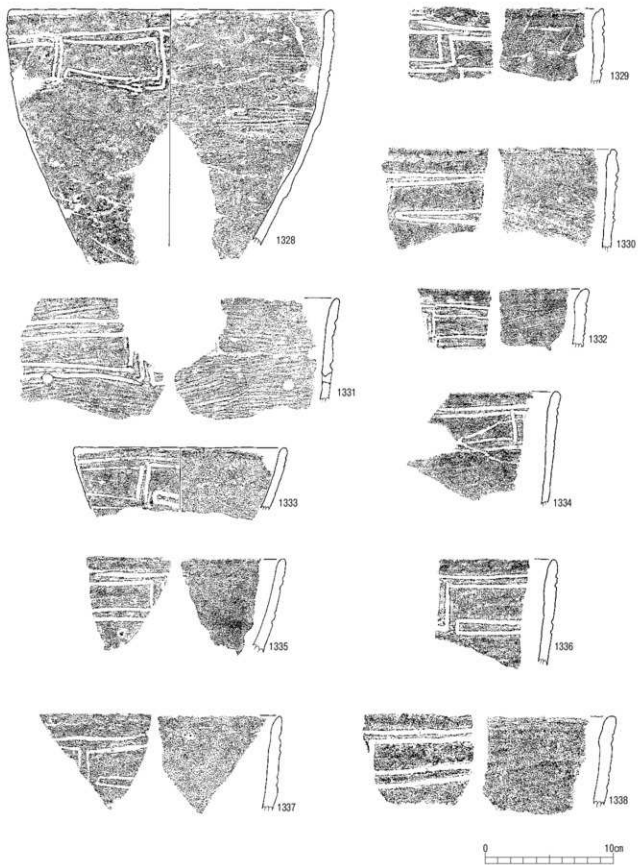
1329～1338は、胴部から開きながら口縁部にいたるものである。1330の靴形文の靴形先端部は、ほかのものに比べ丸くなっている。1331には、補修孔と思われる孔が穿たれている。靴形文のほとんどが靴形先端部が左向きであるが、1338の靴形文の靴形先端部は右向きとなっていると思われる。

1319・1321・1322・1324・1328・1332・1333・1334・1336は、靴形文の縦位の沈線が横位の沈線につながらずはみ出している。

1339～1363は、口縁部に靴形文を横位に連続して施す



第161图 指宿式土器(5) Ia類⑤



第162図 指宿式土器(6) Ia類⑥

ものである。口縁部に横位の沈線は巡らされていないものである。

1339～1352は、口縁部がまっすぐ立ち上がるものである。1339は完形ではないが、口縁部から底部までである。底部端部がやや張りその後ややくびれ、胴部に関きながら立ち上がり、口縁部はまっすぐ立ち上がるタイプの深鉢である。口縁部から胴部上部にかけて、靴形文が横位に施されている。底部には、土器製作時の敷物の痕（網代編みの痕）が観察できる。1340は、一筆書きのように連続して一つの靴形文が描かれたものではなく、4回に分けて一つの靴形文を描いたことが観察されるものである。1341は、靴形文を描く沈線の痕が内面側に浮き出ており、内外面ともに貝殻条痕により器面調整がなされている痕がしっかり観察できる。1349は、細い沈線により靴形文が施されているものである。1352の靴形文の靴形先端部は右向きである。

1353～1363は、胴部から関きながら口縁部にいたるものである。1353は、完形ではないが、口縁部から底部までである。底部から関きながら立ち上がり、口縁部にいたるタイプの深鉢である。口縁部から胴部上位にかけて、靴形文が横位に施されている。底部には、土器製作時の敷物の痕（網代編みの痕）が観察できる。1354・1362は靴形文の先端部分が広くなり厚くなったものである。

1359の靴形文の靴形先端部は右向きとなっている。

1364～1369は、口縁部に横位に沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものであるが、口縁端部が肥厚したものである。

1364～1367は、口縁部がまっすぐ立ち上がるもので、口縁端部が肥厚するものである。

1368～1371は、胴部から関きながら口縁部にいたるもので、口縁端部が肥厚するものである。

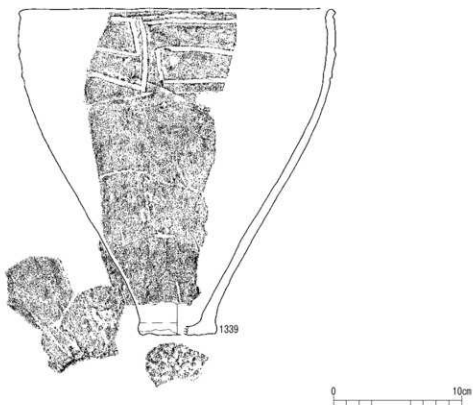
1372～1381は、口縁部に靴形文を横位に連続して施すものであるが、口縁部に横位の沈線は巡っていないものである。

1372～1375は、口縁部がまっすぐ立ち上がるもので、口縁端部が肥厚するものである。

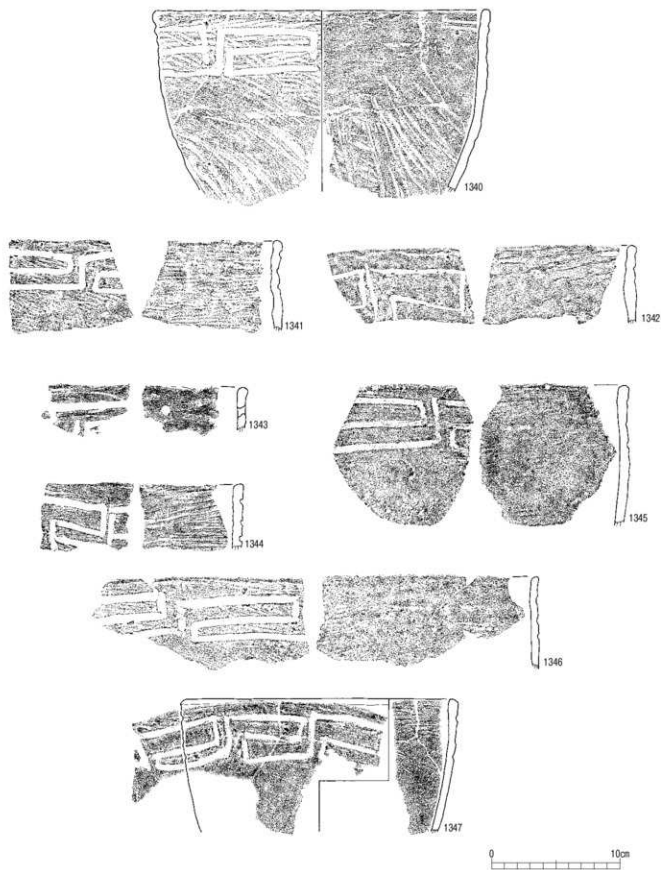
1376～1381は、胴部から関きながら口縁部にいたるもので、口縁端部が肥厚するものである。1376の靴形文は、やや細長く描かれている。

1382～1408は、波状口縁であり、口縁部がまっすぐ立ち上がるものあるいは胴部から関きながら口縁部にいたる器形のものである。口縁部に靴形文を横位に施すものである。

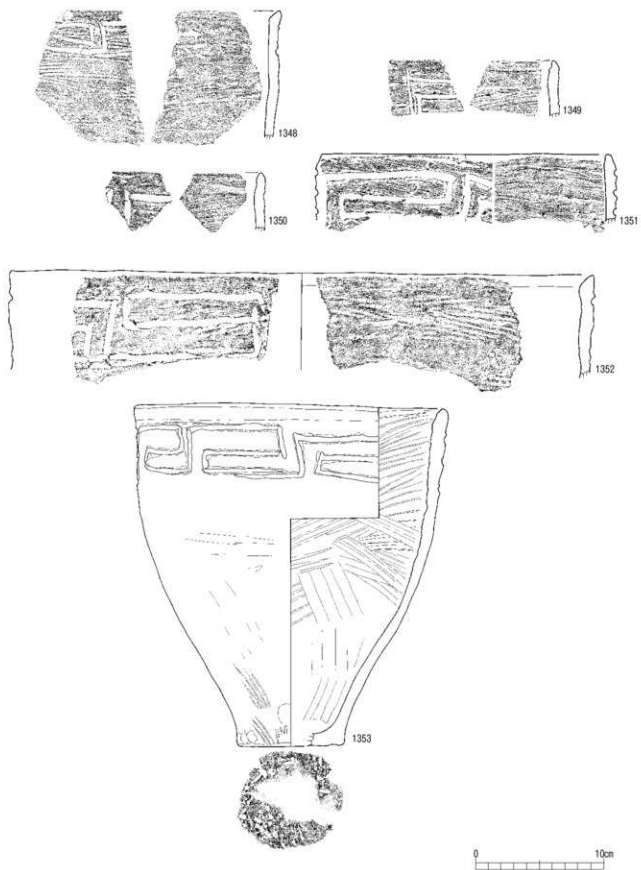
1382～1387は、口縁部がまっすぐ立ち上がるものであり、口縁部に横位に沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。1382は、M字状の



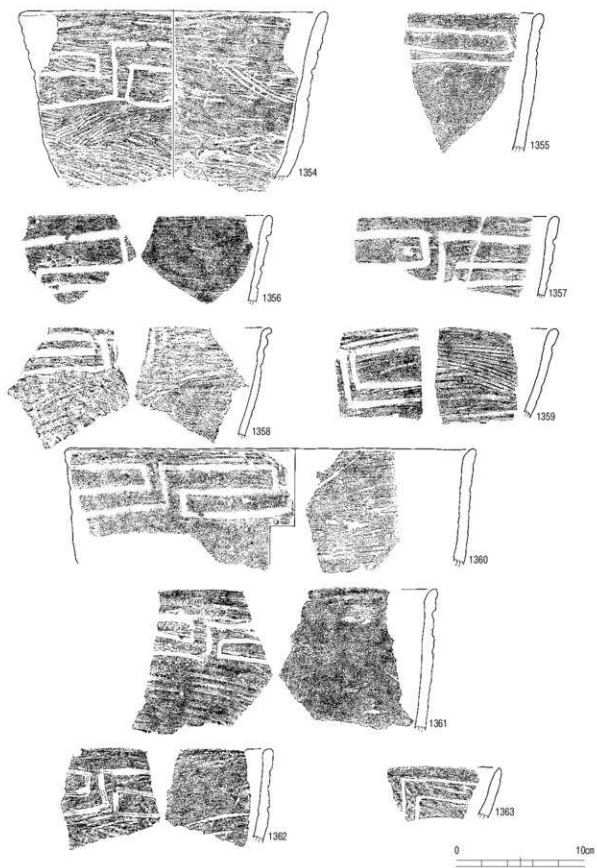
第163図 指宿式土器(7) Ia類⑦



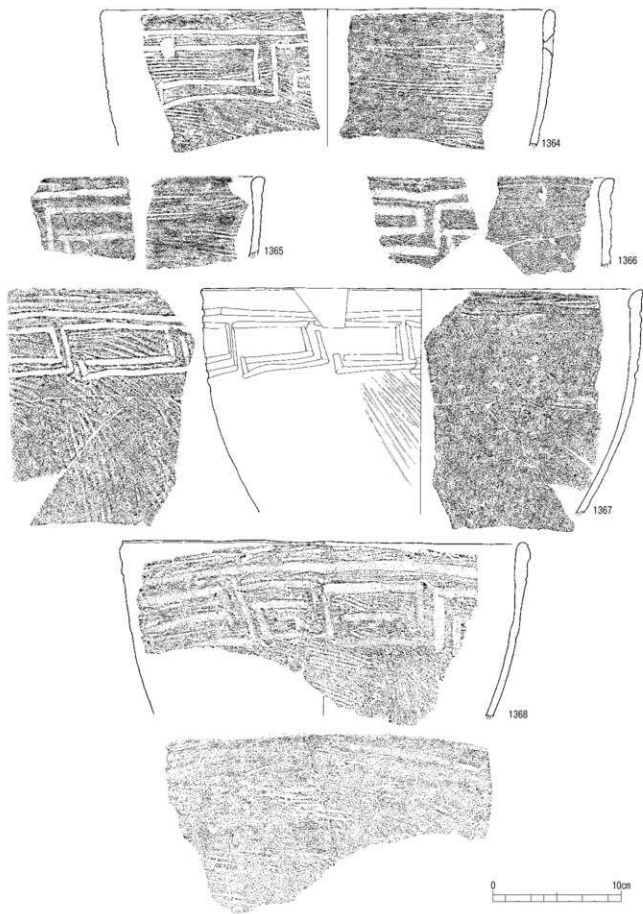
第164図 指宿式土器(8) Ia類⑧



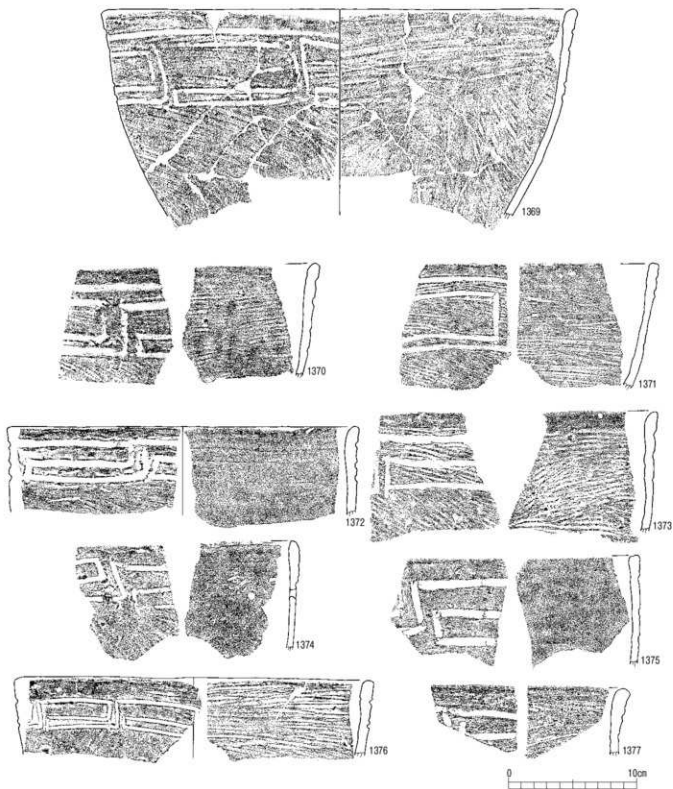
第165图 指宿式土器(9) I a類⑨



第166図 指宿式土器 (10) I a類⑩



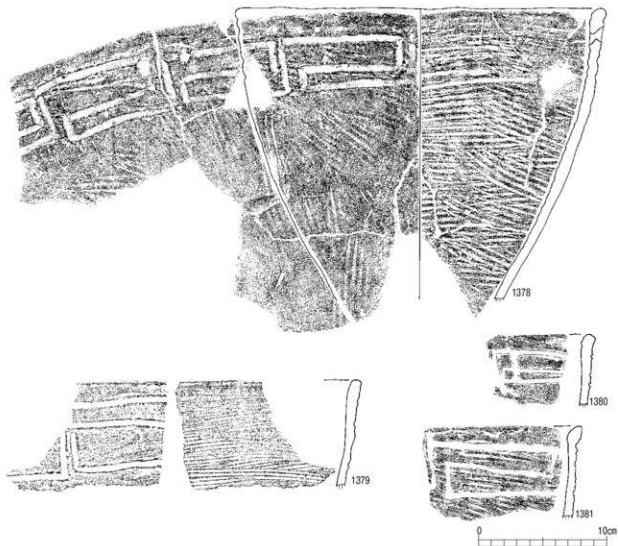
第167图 指宿式土器 (11) Ia類①



第168図 指宿式土器(12) Ia類⑫

平たい突起を有するものである。1384は、棒状工具の押圧による刻みのあるゆるやかな低い弧状の突起を4か所

に有するものである。突起内面には、斜位の短沈線が3本施されており、この短沈線の終わりには刺突文が施さ



第169図 指宿式土器 (13) I a類⑬

れている。

1388～1398は、胴部から聞きながら口縁部にいたるもので、口縁部に横位に沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。1388は、完形ではないが、口縁部から底部までである。底部から聞きながら立ち上がり口縁部にいたるタイプの深鉢である。口縁部から胴部上部にかけて、横位の沈線を1本巡らし、その下位に靴形文が横位に連続して施されている。三角形の孔がある山形の突起を4か所に有するものである。突起部上面から内面にかけて沈線が施され、内面の沈線の終わりには巻貝殻頂部による刺突文が施されている。また、突起部外面にも巻貝殻頂部による刺突文が施されている。底部には、土器製作時の敷物の痕(網代編みの痕)が観察できる。1393は、ゆるやかな低い弧状の突起を4か所に有するものである。突起部内面には、斜位の短沈線が4本施されている。

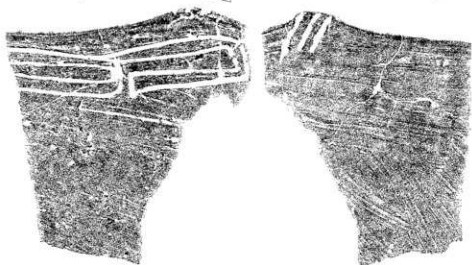
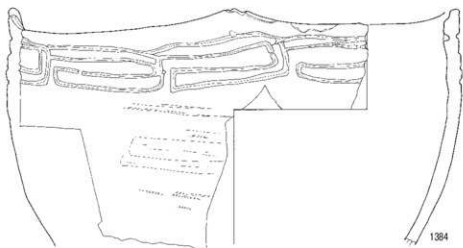
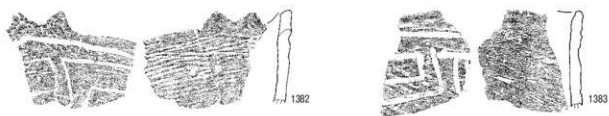
1399～1408は、口縁部がまっすぐ立ち上がるものある

いは胴部から聞きながら口縁部にいたるもので、口縁部が肥厚するものである。口縁部に靴形文を横位に連続して施すものである。

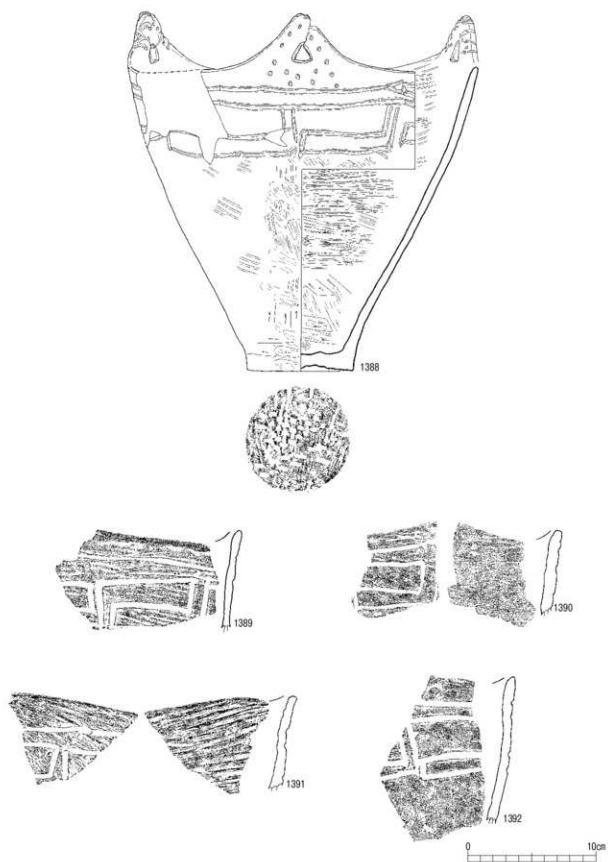
1399～1401は、口縁部に横位に沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。1399は、孔のある突起を有するものである。1401は、靴形文の靴形先端部が右向きであり、やや丸みを帯びている。

1402～1408は、口縁部に靴形文を横位に連続して施すもので、口縁部に横位の沈線は巡らされていないものである。1403は、ねじった粘土紐を貼り付けた突起を有するものである。1407は、粘土紐を橋状に貼り付けた突起を有するものである。1408は、口唇部から突起部内面にかけて細い棒状工具による押圧文が施されている弧状の突起を有するものであり、突起部内面の押圧文の下位には、弧状の沈線が施されている。

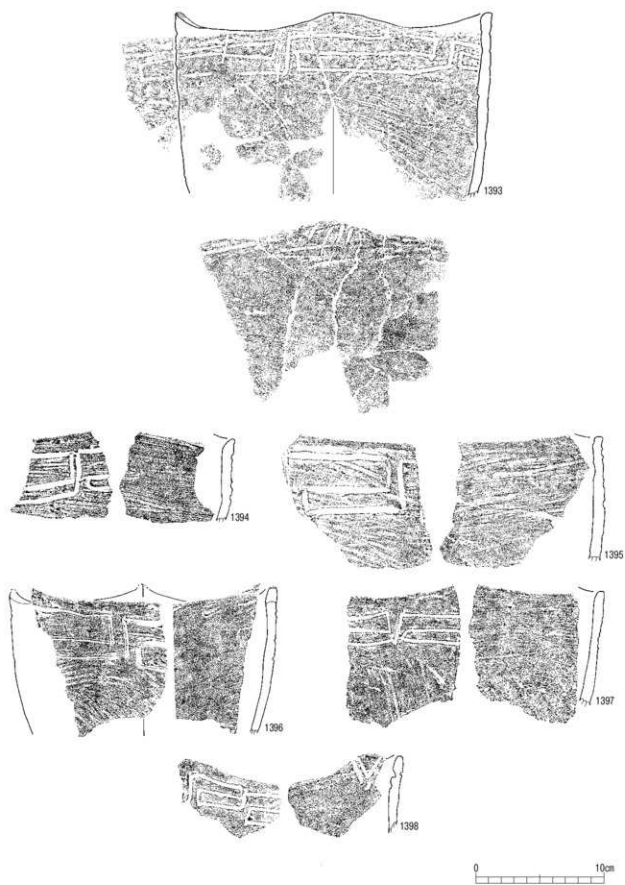
1409～1447は、深鉢であり、口縁部に靴形文を横位に施すものである。平口縁であり、口縁部がまっすぐ立ち



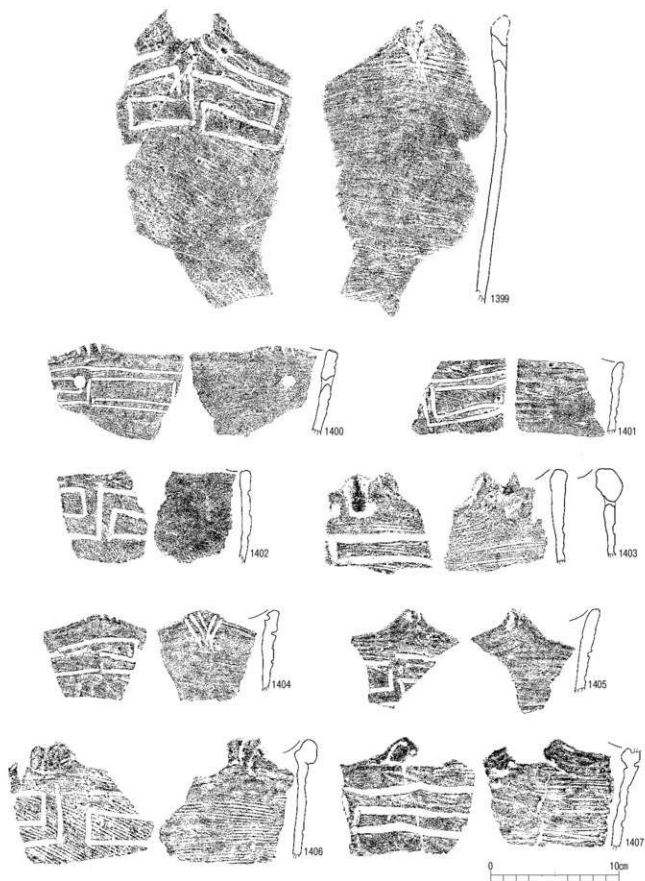
第170图 指宿式土器 (14) I a 類④



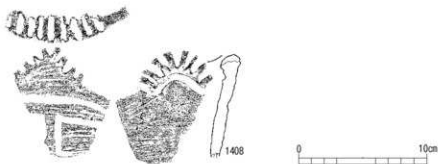
第171图 指宿式土器 (15) I a類¹⁵



第172図 指宿式土器 (16) I a類⑬



第173图 指宿式土器 (17) Ia類①



第174図 指宿式土器(18) I a類⑥

上がり口縁端部が外反する器形のものあるいは胴部から聞きながら口縁部にいたり口縁端部が外反する器形のものである。口縁端部は、丸く収まるものとやや尖ったようになったものがある。

1409～1419は、口縁部に横位に沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。口縁部はまっすぐ立ち上がり口縁端部が外反するものである。1410は、ほぼ完形であり、口縁部から底部までである。底部から胴部に関きながらいたり、口縁部はまっすぐ立ち上がり口縁端部が外反するタイプの深鉢である。口縁部から胴部上位にかけて、横位に沈線を1本巡らし、その下位に靴形文が横位に連続して施されている。底部には、土器製作時の敷物の痕(網代編みの痕)が観察できる。1411・1412は、靴形文が細長くなっているものである。1415・1416は、靴形文の先端部が上向きとなっているものである。1418・1419は、靴形文の靴形先端部が下向きとなっている部分がある。1410・1412・1415・1417・1418・1419は、内外面に貝殻条痕による器面調整の痕がはっきりと観察できるものである。口縁部付近は主に横方向の貝殻条痕による器面調整を施しているが、胴部・底部は横方向だけでなく、縦方向や斜め方向の貝殻条痕による器面調整を施している。

1420～1447は、口縁部に靴形文を横位に連続して施すものである。胴部から聞きながら口縁部にいたるものもあり、口縁端部が外反するものである。

1420～1434は、口縁部に横位に沈線を2本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。1420は、ほぼ完形である。底部から胴部に関きながら立ち上がり口縁部にいたるものもあり、口縁端部が外反するタイプの深鉢である。口縁部から胴部上位にかけて、横位に沈線を1本巡らし、その下位に靴形文が横位に連続して施されている。底部には、土器製作時の敷物の痕(網代編みの痕)が観察できる。1421・1424・1425・1427・1432は、靴形文の縦位の沈線が横位の沈線につながるがずはみ出している。1420・1422・1429・1431・1432・1434は、内外面に貝殻条痕による器面調整の痕がはっきりと確認できる。口縁部付近は主に横方向の貝殻条痕による

器面調整を施しているが、胴部・底部は横方向だけでなく、縦方向や斜め方向に貝殻条痕による器面調整を施している。

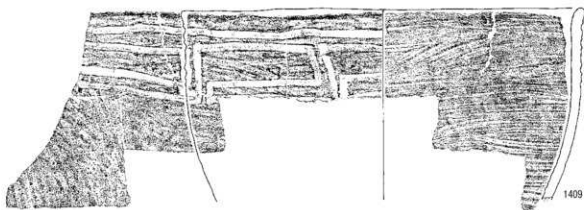
1435～1447は、口縁部に靴形文を横位に連続して施すもので、口縁部に横位に沈線は施されていない。1435・1436は、靴形文の縦位の沈線がやや斜位となっている。1437は、靴形文の先端部分が右向きとなっているものである。1441は、靴形文が連続して描かれているのではなく、一角ずつ描いていることの観察できるものである。また、沈線を描く工具として竹管状の工具を使用していることも分かるものである。1442は、靴形文が段状に描かれると思われるものである。1444～1447は、靴形文の先端部分がやや上向きのものである。1447は、補修孔と思われる孔が穿たれているものである。

1448～1457は、口縁部に靴形文を横位に連続して施すもので、口縁部は胴部から聞きながら口縁部にいたり、口縁端部が外反するものである。また、口縁端部は、肥厚するものである。

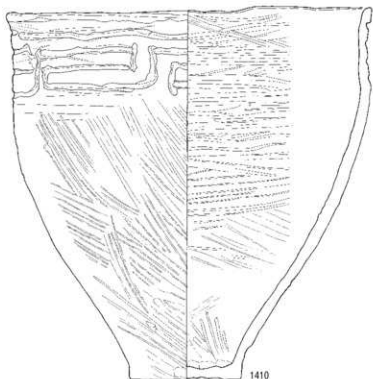
1448～1452は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。1449は、靴形文の先端部が細くなっている部分や靴形文の縦位の沈線がはみ出ている部分が観察される。1450は、靴形文の先端部が下向きとなっているものである。1452は、靴形文の向きが右向きとなっており、器壁が薄いものである。

1453～1457は、口縁部に靴形文を横位に連続して施すもので、口縁部に横位の沈線を巡らせてはいないものである。連続した靴形文は一筆書きのように描くため靴形文の上はあいいているが、1454は横位の沈線を描いたあとに靴形文を描いているため横位の沈線とつながり、靴形文の上が閉じた形となっているものである。

1458～1466は、深鉢であり、口縁部に靴形文を横位に施すものである。波状口縁であり、口縁部がまっすぐ立ち上がり口縁端部が外反するものあるいは胴部から聞きながら口縁部にいたり口縁端部が外反するものである。口縁端部は、丸く収まるものとやや尖ったようになったものがある。



1409



1410



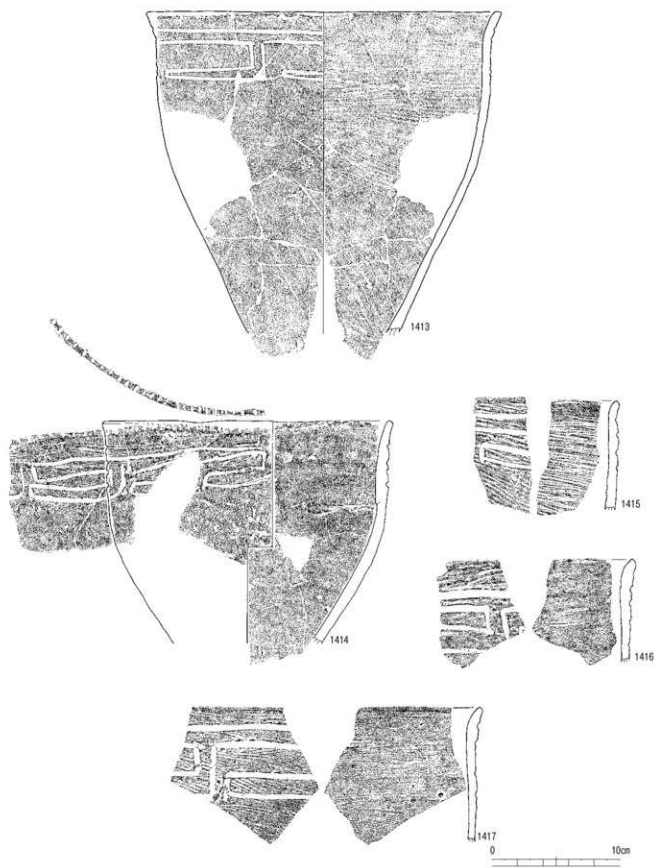
1411



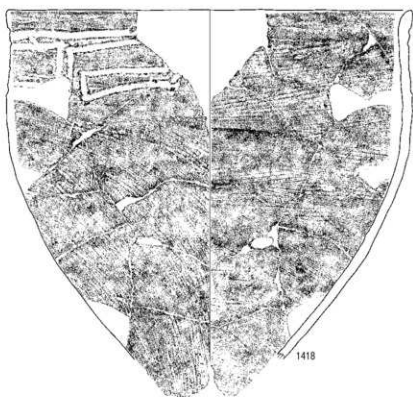
1412



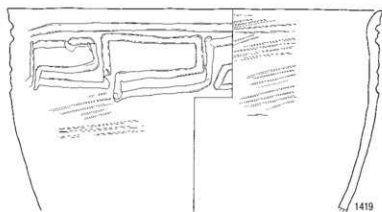
第175图 指宿式土器 (19) I a類⑨



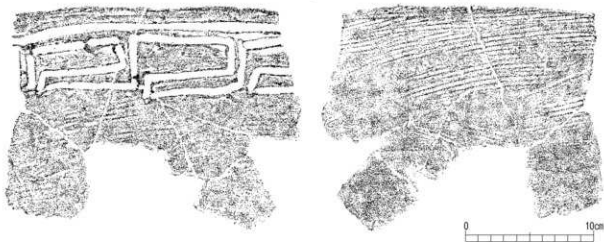
第176図 指宿式土器 (20) I a類㊟



1418



1419



0 10cm

第177図 指宿式土器 (21) I a類②

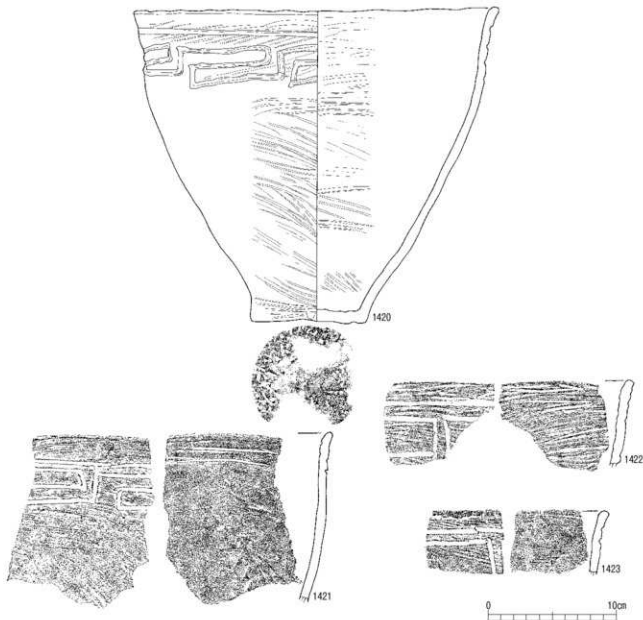
1458・1459は、口縁部がまっすぐ立ち上がり口縁端部が外反するものである。1458は、平口縁であり、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。靴形文が細長く描かれている。1459は、口縁部に横位の靴形文を施すもので、口縁部に横位の沈線は巡らされていない。

1460～1466は、胴部から聞きながら口縁部にいたるもので、口縁端部が外反するものである。1460は、ゆるやかな山形の突起を有するもので、突起内面に縦位の短沈線が2本施されている。1462は、ゆるやかな弧状の突起を有するものである。突起部外面には縦位の短沈線が2本、内面には縦位の短沈線が3本施されている。1463は、山形の突起を有するものである。突起内面に半円状に粘

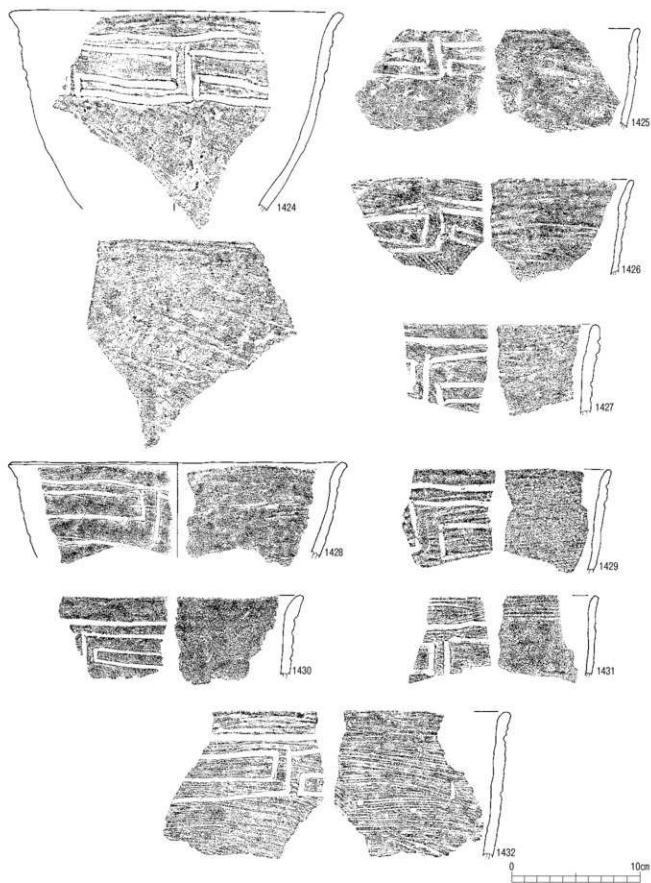
土を貼り付けている。1464は、ゆるやかな弧状の突起を4か所に有し、突起内面には斜位の短沈線が3本施されている。この沈線の終わりには、刺突文が施されている。1465は、ゆるやかな弧状の突起を有するものである。口唇部には、棒状工具による刻みが施されている。1466は、ゆるやかな弧状の突起を有するものである。突起内面には、3本の短沈線が施されている。

1467～1491は、深鉢であり、口縁部に靴形文を横位に施すものである。膨らむ胴部から口縁部が内傾・内弯する器形のもので、平口縁である。口縁端部は、丸く収まるものとやや尖ったようになったものがある。

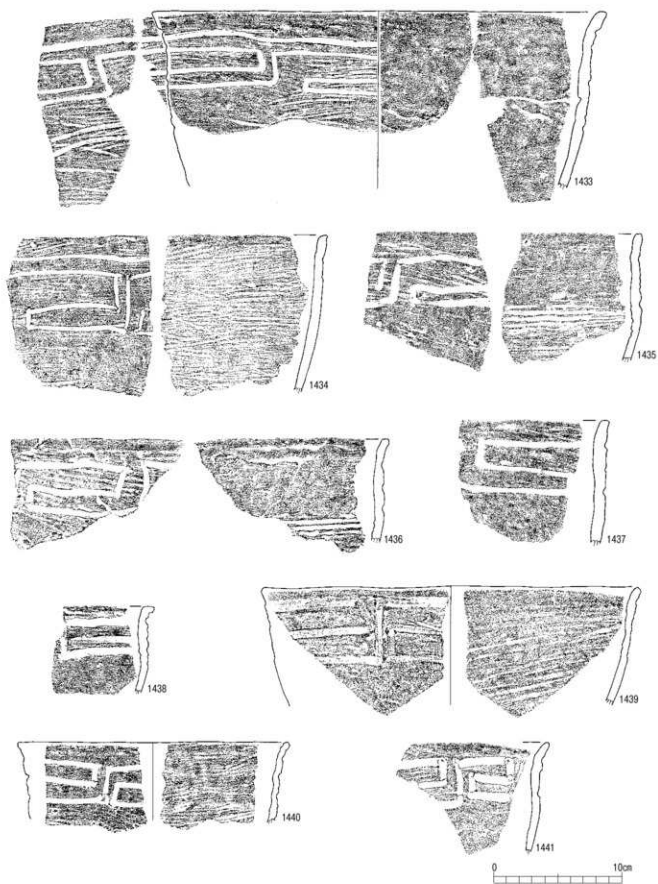
1467～1476は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。



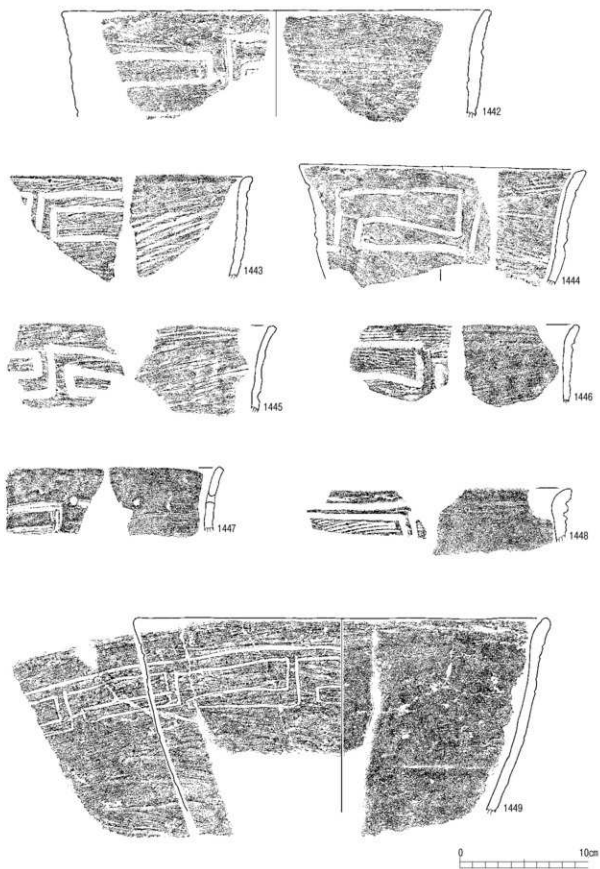
第178図 指宿式土器 (22) I a類②



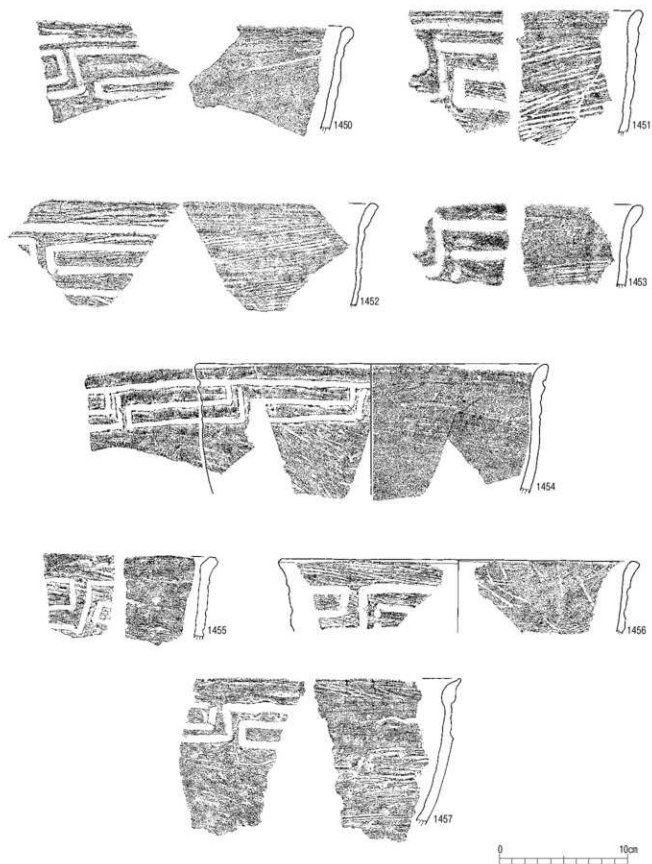
第179图 指宿式土器 (23) I a 類②



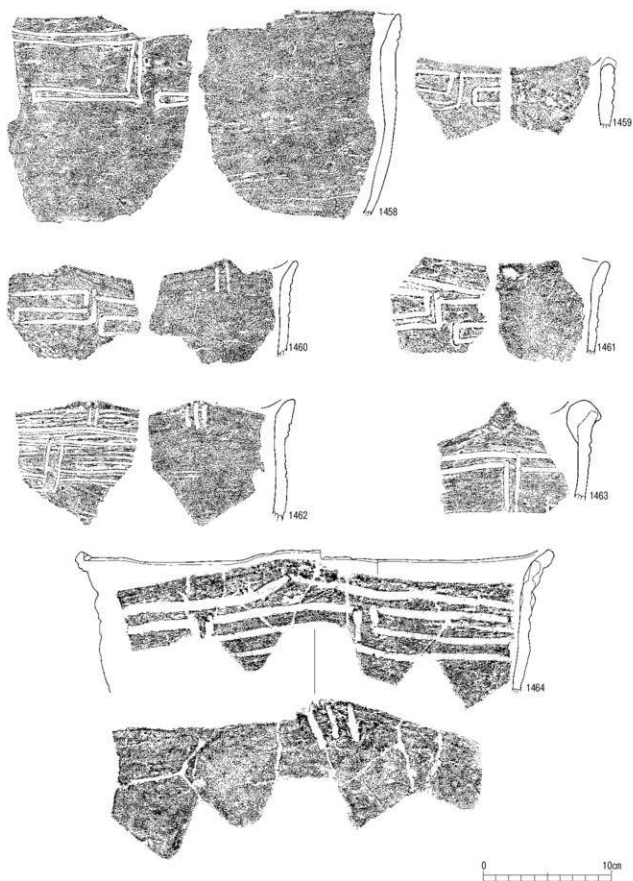
第180图 指宿式土器 (24) I a類



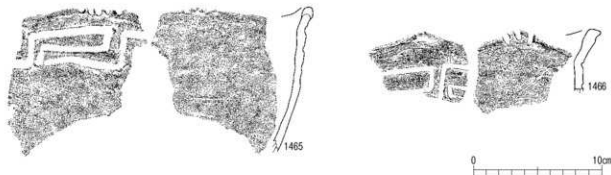
第181図 指宿式土器 (25) I a類㊟



第182図 指宿式土器 (26) I a類㊸



第183图 指宿式土器(27) Ia類㉞



第184図 指宿式土器 (28) I a類②

1468・1469は、靴形文の靴形先端部が上向きとなるものである。1472～1474・1476は、胴部上位に最大径があるタイプの深鉢である。1472は、靴形文が細長く描かれており、靴形文の先端部分が丸みを帯びているものである。1473は、口縁端部がやや尖ったようになっている。1つの靴形文を描くのに5回に分けて描いていることが観察できるものである。靴形文の先端部分がやや厚くなっている。1474は、靴形文の先端部分が細くなるとともに丸みを帯びており、やや上向きとなっているものである。外面は、貝殻条痕とともにヘラケズリにより器面調整が施されているものである。1476も、靴形文の先端部分が丸みを帯びているとともに、やや上向きとなっているものである。内外面にヘラナデによる器面調整が施されている。1474・1476は、横位の沈線が2本施されたあと、その下位に靴形文が施されている。また、靴形文の向きが右向きとなっている。1467～1472・1475は、内外面ともに貝殻条痕により器面調整がなされている痕がはっきりと観察できるものである。

1477～1482は、口縁部に靴形文を横位に連続して施すもので、口縁部に横位の沈線は巡らされていないものである。

1477～1480は口縁端部が丸く収まるものであり、1481・1482は口縁端部がやや尖ったようになったものである。1477の外面は、丁寧なナデにより貝殻条痕の痕がナデ消されている。1478は、靴形文の先端部がやや上向きとなっている。1479は、内外面に貝殻条痕による器面調整の痕がはっきりと確認できる。1480は、胴部にケズリによる調整が施されている。また、1つの靴形文を描くのに4回に分けて描いていることが観察できるものである。1481・1482は、細長い靴形文が描かれている。

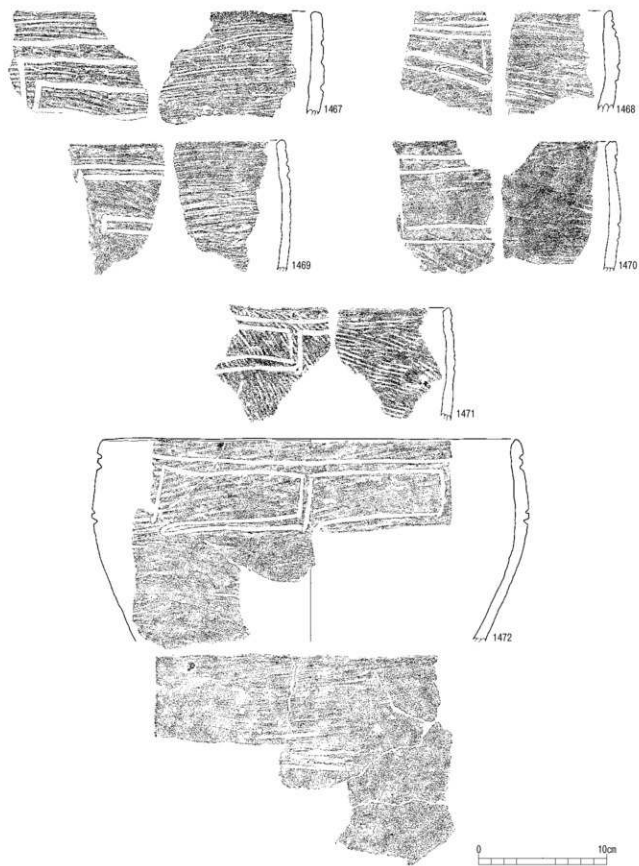
1483～1491は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものであるが、口縁端部が肥厚しているものである。1483・1484は、同一個体であると思われるものである。口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に細長い靴形文が施されている。底部は平底である。内外面ともに貝殻条痕により器面調

整がなされている痕が観察できるものである。1485は、他のものに比べると口縁端部がやや尖ったようになったものである。口縁端部内面を斜めに仕上げている。1486は、やや幅の広い靴形文が施されている。1487・1488・1490は、靴形文の縦位の沈線がやや斜位に描かれている。1483～1485・1488は、内外面ともに貝殻条痕により器面調整がなされている痕がはっきり観察できる。1486は、外面の貝殻条痕による器面調整の痕が、丁寧なナデにより消されている。

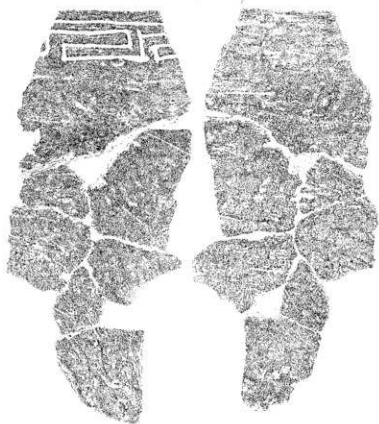
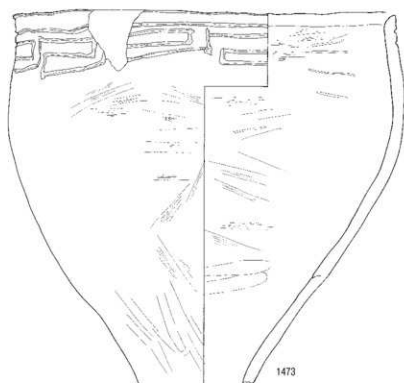
1492～1503は、深鉢であり、口縁部に靴形文を横位に施すものである。波状口縁であり、口縁部が内傾・内弯するものである。口縁端部は、丸く収まるものとやや尖ったようになったものがある。

1492～1496は、口縁部に靴形文を横位に施すものである。1493・1494は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。1494は、低い山形の突起を4か所に有するものであり、口縁部に細長い靴形文が描かれている。1493～1495は、口縁端部を尖ったように仕上げている。1496は、完形ではないが、口縁部から底部まである。棒状工具の押圧による刻みが施された低い山形の突起を4か所に有するものである。底部から胴部を開きながら立ち上がり、胴部上位に最大径のあるタイプの深鉢である。口縁部から胴部上位にかけて、横位の沈線を1本巡らし、その下位に靴形文が横位に施されている。靴形文は、4回に分けて描かれている。内外面ともに貝殻条痕により器面調整がなされている痕が、はっきり観察できる。底部には、土器製作時の敷物の痕（網代編みの痕）が観察できる。

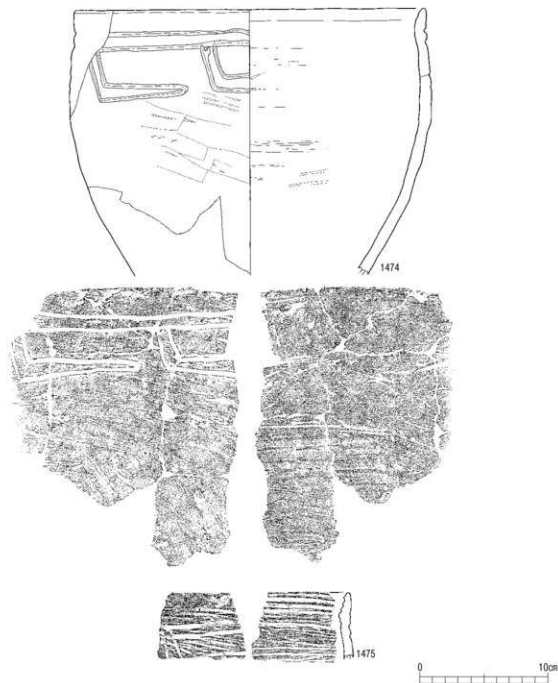
1497～1503は、波状口縁で、口縁部が内傾・内弯するものであり、口縁端部が肥厚したものである。1497～1499は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものであるが、横位の沈線は縦位の短沈線とつながるように描かれている。1499は、靴形文の先端部分が上向きになっている。1500は、靴形文の向きが右向きになっている。1503は、刻みの施された突起を4か所に有するものである。靴形文は左向



第185图 指宿式土器(29) I a類㊟



第186図 指宿式土器(30) I a類㊸



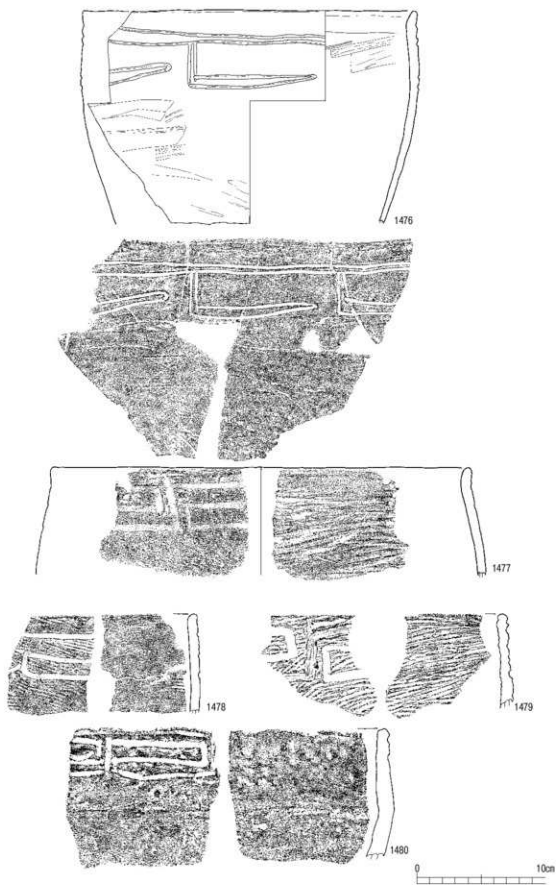
第187図 指宿式土器 (31) I a類③

きに描かれているが、突起直下には左右対称に靴形文が描かれている。突起上面から口縁端部内面に続くように沈線がV字状に施されている。

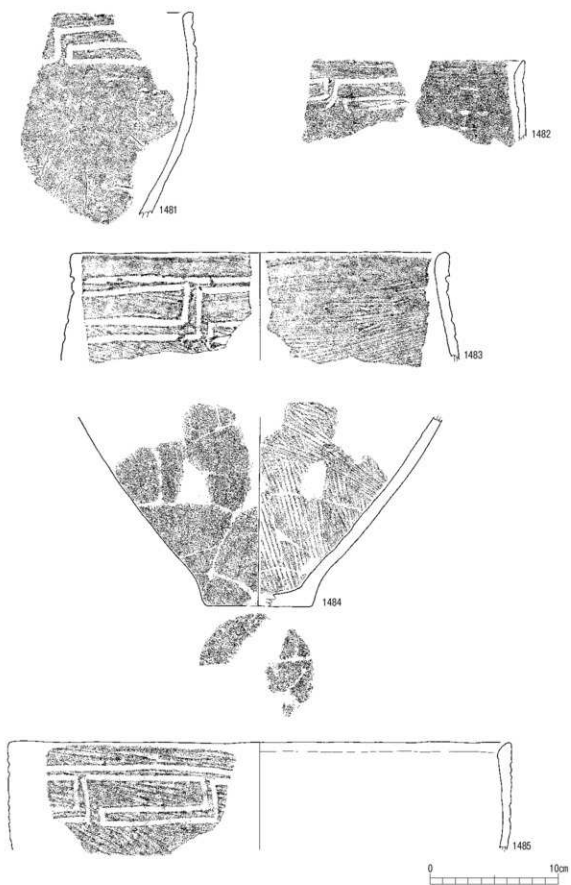
1504～1541は、深鉢であり、口縁部に靴形文を横位に施すものである。平口縁であり、口縁部が内傾・内弯しその端部が外反する器形のものである。口縁端部は、丸く収まるものとやや尖ったようなものがある。

1504～1524は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に靴形文を横位に連続して施すものである。

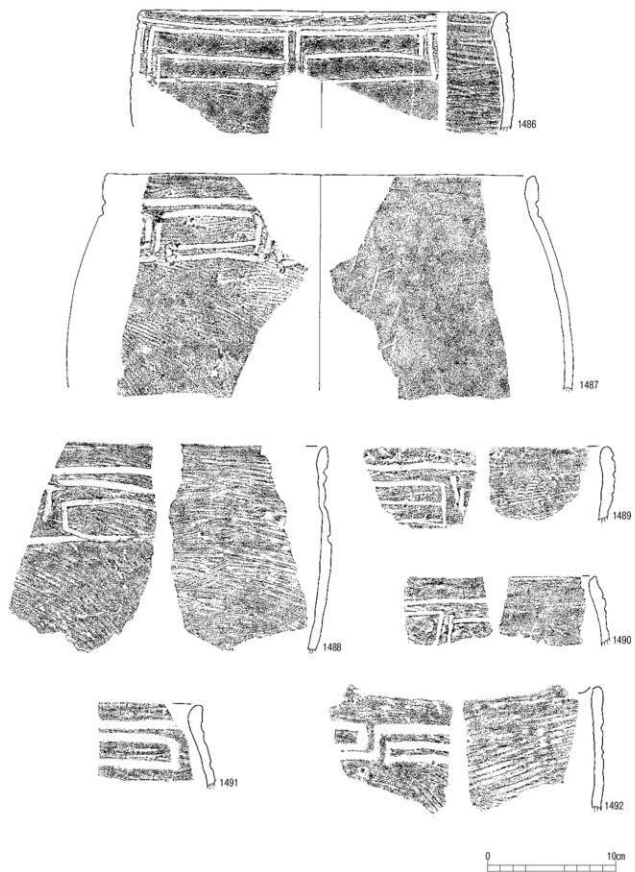
1504・1506・1512・1513は、細長い靴形文が施されている。1505・1506・1508・1513は、靴形文の縦位の沈線がやや斜位になって施されている。1509は、靴形文を一筆書きではなく、数回に分けて描いたことので分かるものである。1511は、靴形文が短く描かれたものである。1514は、靴形文の先端部分がやや細くなるように描かれている。1515は、靴形文の先端下部が尖るように描かれている。1516は、靴形文の向きが右向きになっているものである。1517は、靴形文の先端部分が上向きとなっている。



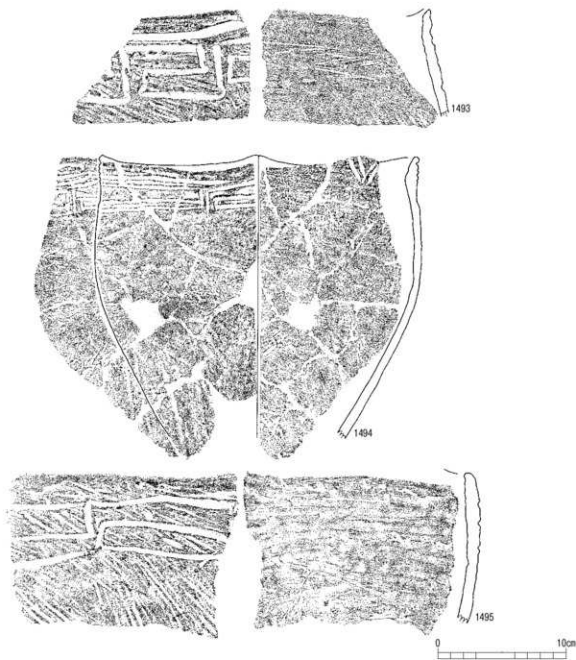
第188図 指宿式土器 (32) I a類㊸



第189図 指宿式土器 (33) I a類㊸



第190図 指宿式土器 (34) I a類㊸



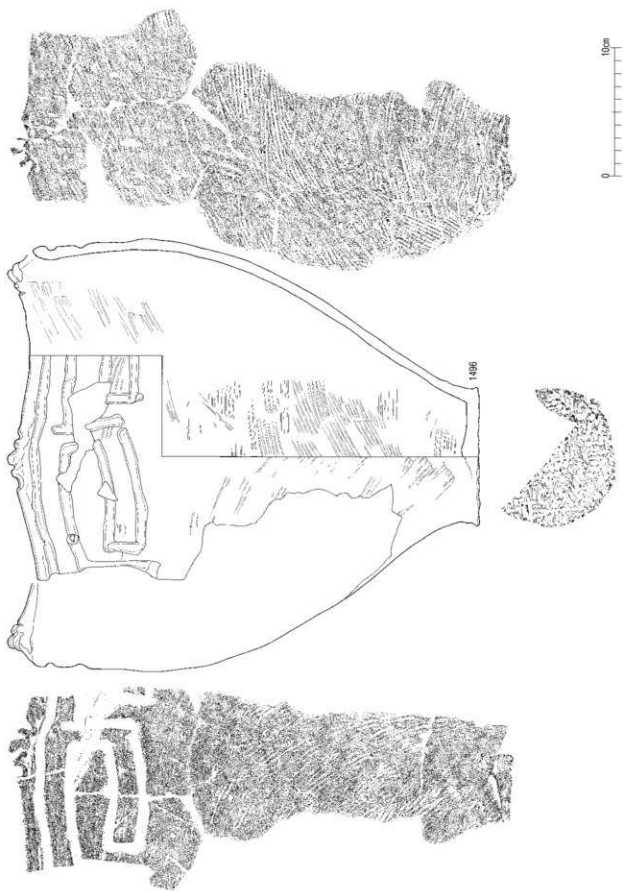
第191図 指宿式土器 (35) Ia類⁵⁹

1518～1524は、最大径が胴部上位にあるタイプの深鉢である。1518～1520は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に横位に細長い靴形文が連続して施されている。1518は、靴形文の縦位の沈線がはみ出しているものである。1520は、靴形文の先端部分をつなぐように描いている。1521は、口縁端部を外反させるとともに、口縁端部内面を斜めに仕上げるため、口縁部内面に残ができています。1522は、靴形文の先端部分が厚くなるように描かれている。1523は、靴形文の先端部分が右向きとなっている。1524は、1つの靴形文を一筆書きのように連続

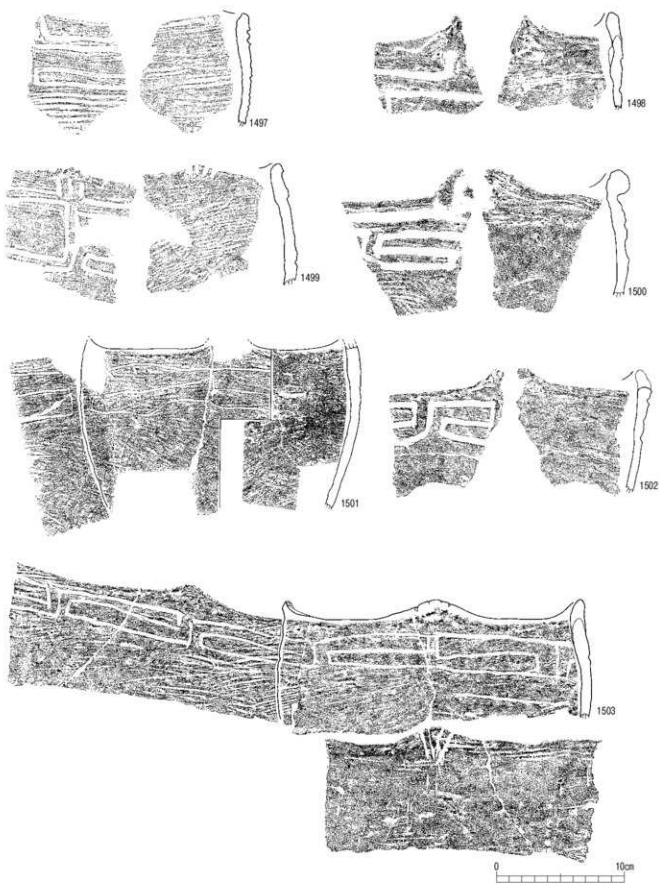
して描いていることが観察できるものである。

1525～1541は、口縁部に靴形文を横位に連続して施すものである。平口縁であり、口縁部が内傾・内弯しその端部が外反する器形のものである。口縁端部が肥厚するものである。

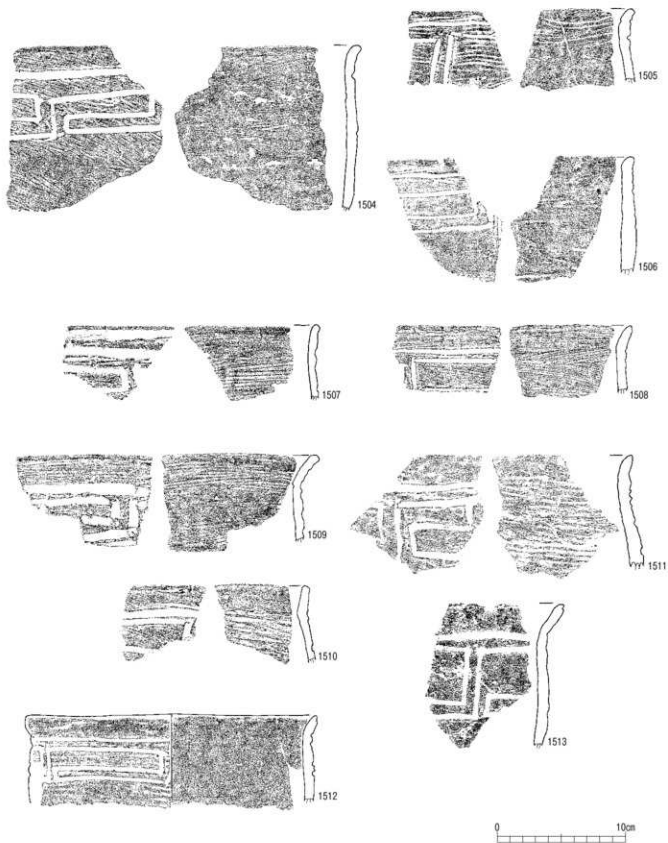
1525～1538は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に横位に靴形文を連続して施すものである。1525・1526・1528は、細長い靴形文が施されているものである。1528は、靴形文の先端部分が下向きに描かれている。1529は、靴形文の先端部分が上向きに描かれてい



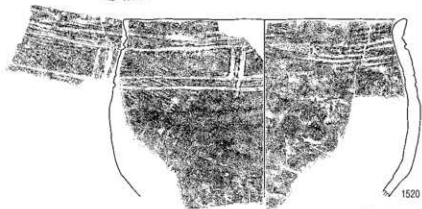
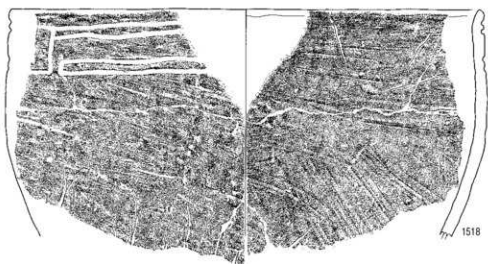
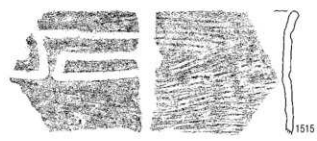
第192図 指環式土器 (36) I a類³⁶



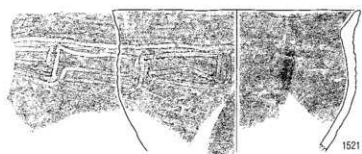
第193図 指宿式土器 (37) I a類⑦



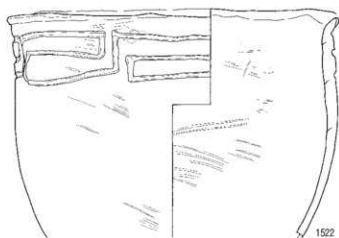
第194図 指宿式土器(38) Ia類[※]



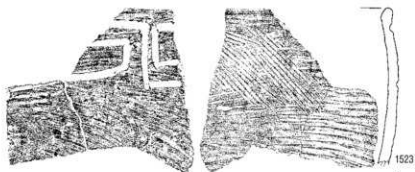
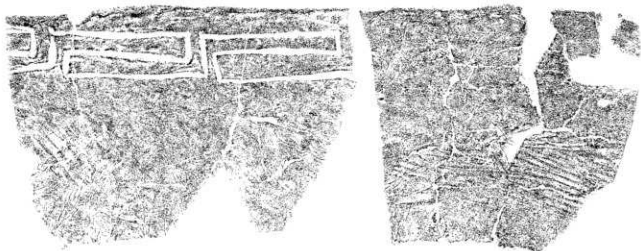
第195図 指宿式土器(39) I a類⑨



1521



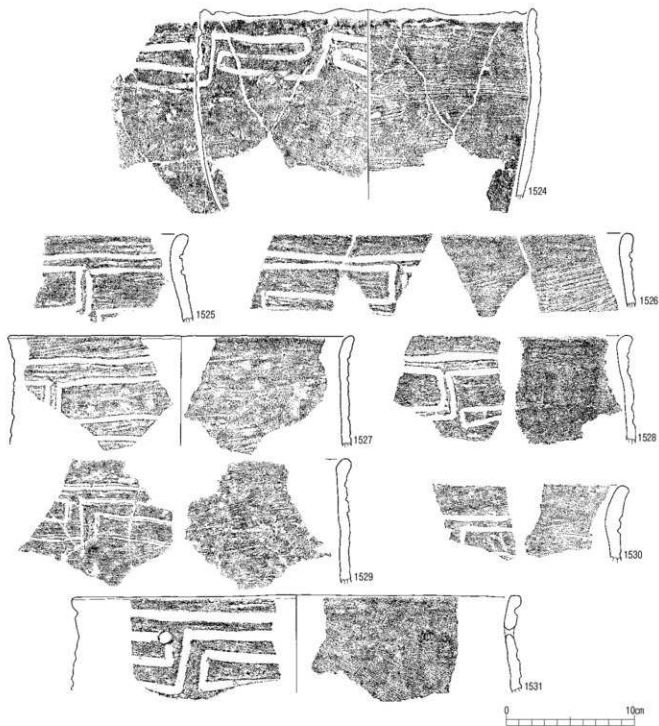
1522



1523



第196図 指宿式土器(40) I a類④

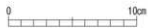
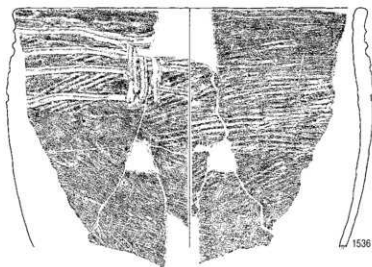


第197図 指宿式土器(41) Ia類④

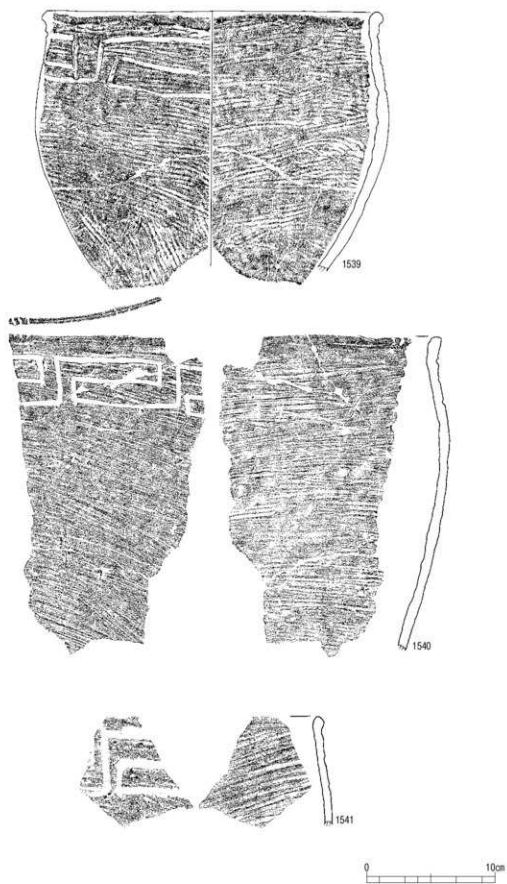
る。1531は、補修孔と思われる孔が穿たれている。1532は、器壁が薄いものである。1535は、頭部でくびれ大きく外反するものである。口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に細長い靴形文が横位に施されている。鉢の可能性もあるものである。1536は、靴形文の縦位の沈線がはみ出しているもので、内外面に貝殻条痕による器面調整の痕がはっきりと観察できるものである。1538は、口縁部に横位の沈線が数回に分け施され、その下位

に細長い靴形文が横位に施されているものである。

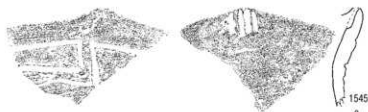
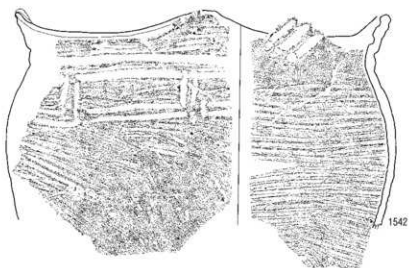
1539～1541は、口縁部に靴形文を横位に連続して施すもので、口縁部に横位の沈線は巡らされていない。どれも、靴形文の先端部がやや上向きとなっており、内外面ともに貝殻条痕により器面調整がなされている痕がはっきり観察できるものである。1539は、靴形文の先端部分がやや厚くなっている。1540は、口唇部の一部に細い刻みが施されている。



第198図 指宿式土器(42) I a類②



第199図 指宿式土器(43) Ia類③



第200図 指宿式土器(44) Ia類④

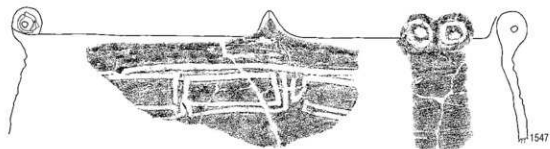
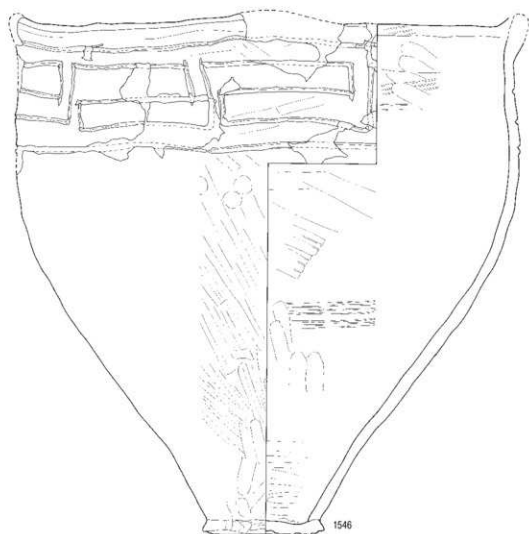
1542～1552は、深鉢であり、口縁部に靴形文を横位に施すものである。波状口縁であり、口縁部が内傾・内弯しその端部が外反する器形のものである。口縁端部は、丸く収まるものとやや尖ったようなものがある。

1542～1545は、口縁部に靴形文が施されているものである。波状口縁のものや突起を有するものである。影らむ胴部から口縁部が内傾・内弯し、その端部が外反する器形のものである。1542は、突起を4か所に有するものである。口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に細長い靴形文が施されている。突起内面には、斜位の沈線が3本施され、その沈線の下位に刺突文が施されている。1543は、棒状工具の押圧による刻みの施された低い

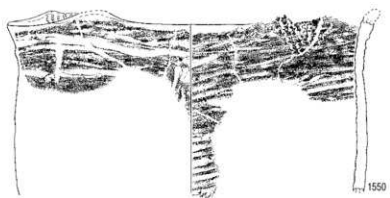
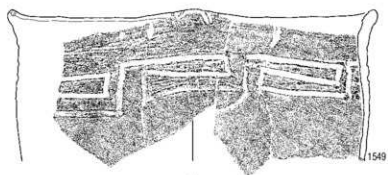
弧状の突起を有するものである。1542・1543は、内外面ともに、貝殻条痕により器面調整がなされている痕がはっきり観察できるものである。

1546～1552は、口縁部に靴形文を横位に連続して施すものであり、波状口縁のものや突起を有するものである。影らむ胴部から口縁部が内傾・内弯し、その端部が外反する器形のもので、口縁端部が肥厚するものである。

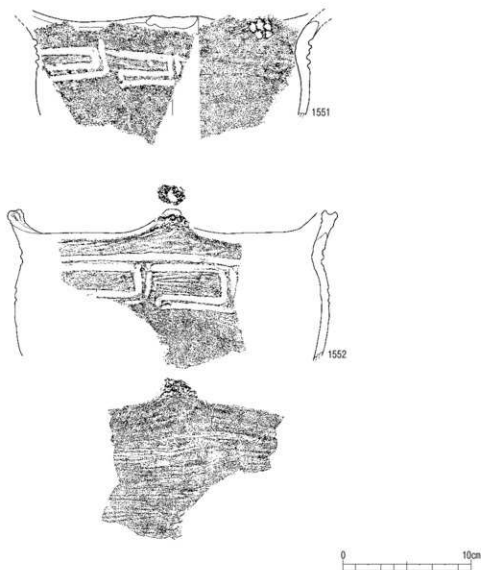
1546～1548は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に横位に靴形文を連続して描くものである。1546は、完形ではないが、底部までであるものである。底部から影らむ胴部に聞きながら立ち上がり、頭部でややくびれ口縁端部が外反するタイプの深鉢である。口縁部から



第201图 指宿式土器(45) I a類④



第202図 指宿式土器(46) Ia類⑥



第203図 指宿式土器(47) I a類④

胴部上部にかけて、横位の沈線を1本巡らし、その下に靴形文が横位に連続して施されている。低い突起を4か所に有するものである。底部には、土器製作時の敷物の痕(網代編みの痕)が観察できる。1547は、孔の穿たれた突起を4か所に有するものである。細長い靴形文が描かれている。1548は、靴形文の縦位の沈線が一部描かれていない部分がある。

1549は、靴形文の先端部分が厚くなっている。1550は、低い山形の突起を3か所に有するものである。突起の内面には、貝殻縁線による刺突文がV字状に施されている。1551は、突起を4か所に有するものである。突起の内面には、刺突文が施されている。1552は、凹みのある突起を4か所に有するものである。突起部の周りや上面には巻貝殻頂部による刺突文が施されている。口縁部に

横位の沈線を1本巡らし、その下に横位に細長い靴形文が連続して施されている。靴形文の先端部分は、やや丸みを帯びている。

1553～1593は、これまでのものに分類できなかったものである。

1553～1573は、平口縁のものである。

1553～1559は、靴形文の一部が描かれていると思われるものである。なかには、I b類の矩形の文様になるものもあると思われる。

1560～1563は、口縁部に巡らされる沈線かわりに、鉤状の文様のある沈線を横位に1本あるいは2本巡らしたものである。

1560は、口縁部に鉤状の文様のある沈線を横位に2本巡らし、その下に靴形文が横位に連続して施されてい

る。靴形文の先端部分がやや厚くなっている。

1561～1563は、口縁部に鉤状の文様のある沈線を横位に1本巡らし、その下位に靴形文が横位に連続して施されている。1563は、靴形文の先端部分がやや丸みを帯びているものである。

1565・1566は、靴形文の縦位の沈線が1本少ない部分があるものである。

1567・1568は、靴形文の上位に施される横位の沈線が2本になっているものである。

1569は、靴形文の縦位の沈線が1本多い部分があるものである。

1570は、靴形文の横位の沈線部分の一部が鉤状の沈線

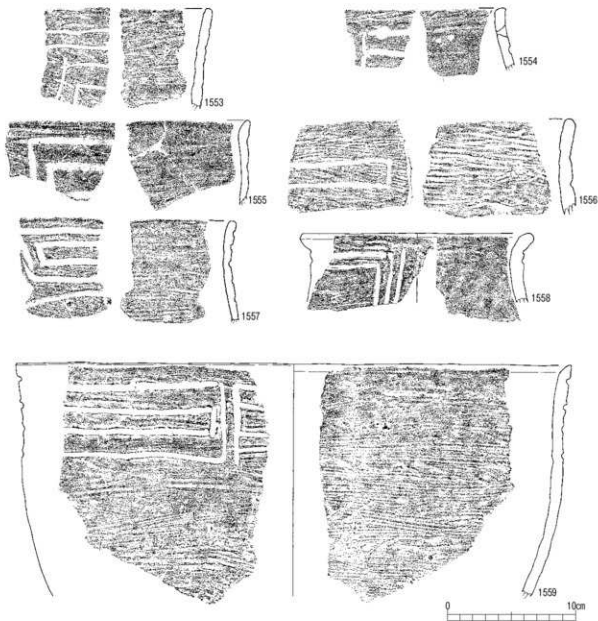
となっているものである。

1571・1573は、靴形文の上位に施されている横位の沈線が入組文状になっているものである。

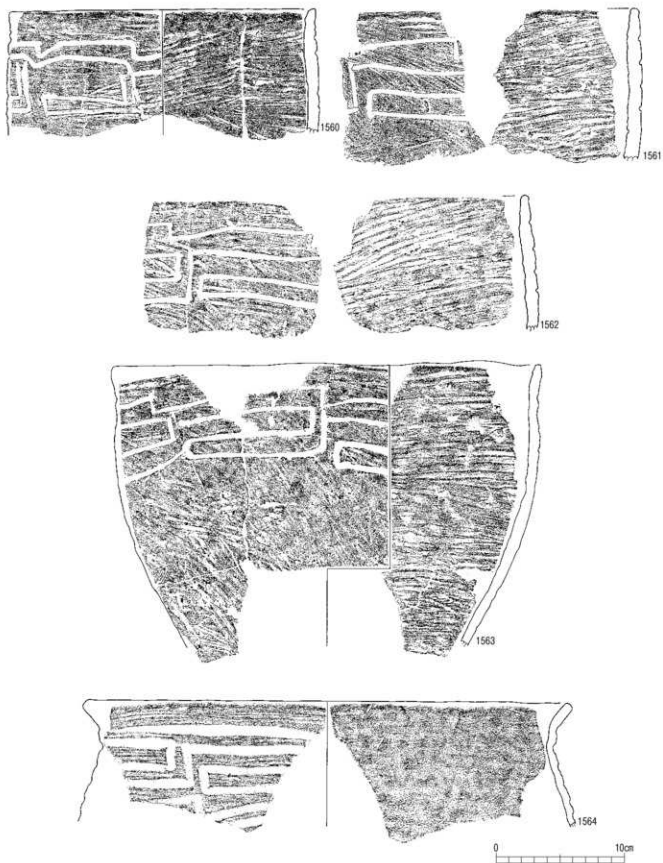
1574・1575は、かかとが大ききはみ出たような変形した靴形文を施すものである。1575は、口径が40cmを超える大型の深鉢である。口縁部に横位の沈線を巡らし、その下位にかかとが大ききはみ出たような変形した靴形文を施すものである。靴形文の他にも直線や曲線による幾何学的な文様が施されている。

1577～1593は、波状口縁のものや突起を有するものである。

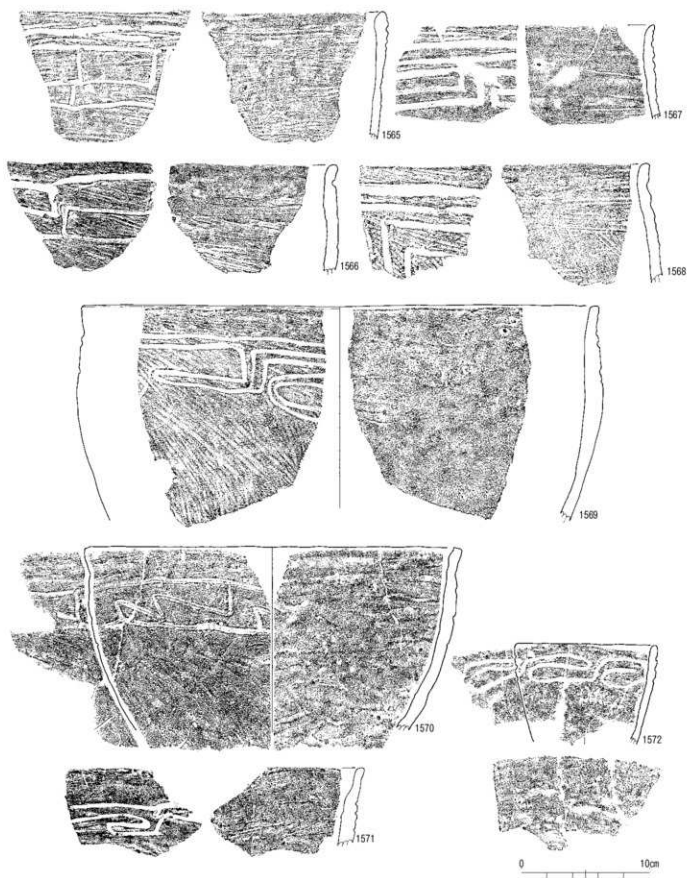
1577・1578は、突起を有するものである。突起から横



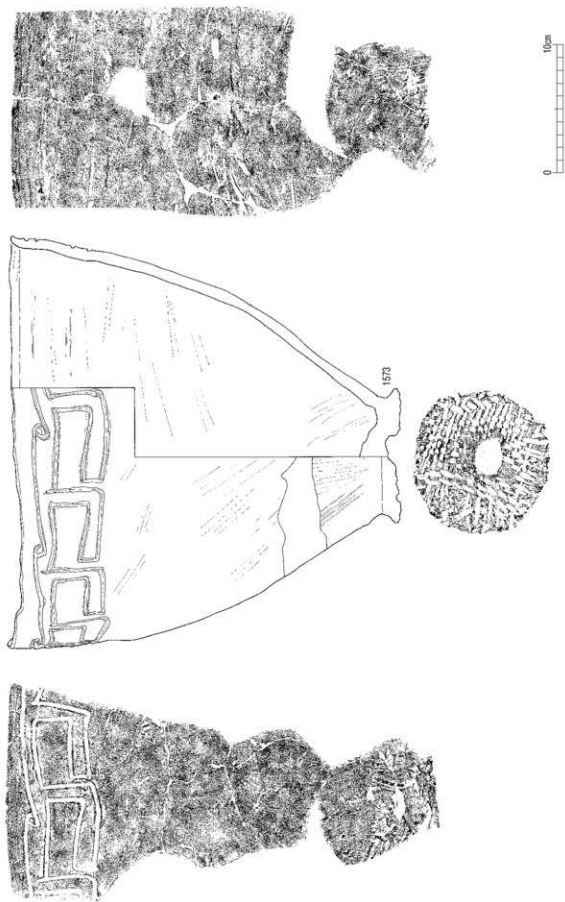
第204図 指宿式土器(48) I a類④



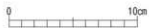
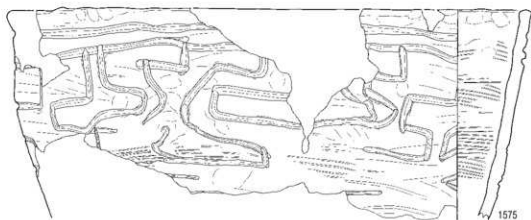
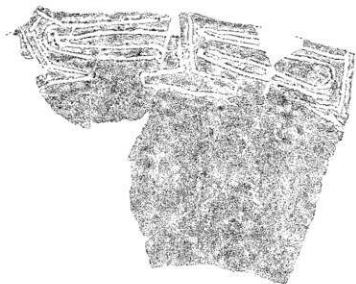
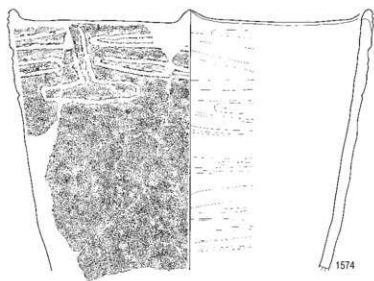
第205図 指宿式土器(49) Ia類④



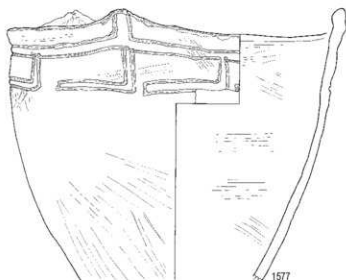
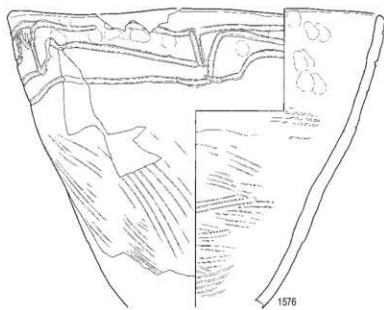
第206図 指宿式土器(50) Ia類50



第207図 指環式土器 (51) I a類⑤



第208図 指宿式土器 (52) I a類②



第209図 指宿式土器 (53) I a類③

位の沈線が始まっているものである。

1579は、横位の沈線が2本施されているものである。

1580は、粘土紐を橋状に貼り付けた意のある突起を4か所に有するものである。突起部には、貝殻腹縁部による刺突文が施されている。靴形文の先端部の縦位の沈線が描かれていないものである。

1581・1582も、靴形文の先端部の縦位の沈線がないものである。

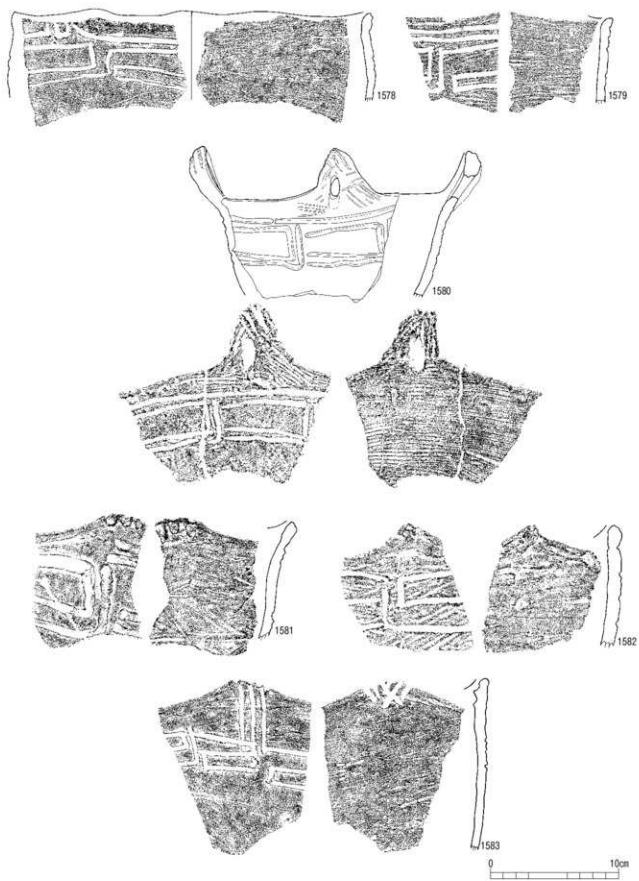
1583は、突起部外面に縦位に3本の短沈線が施され、

突起内面にはW字状に沈線が施されているものである。

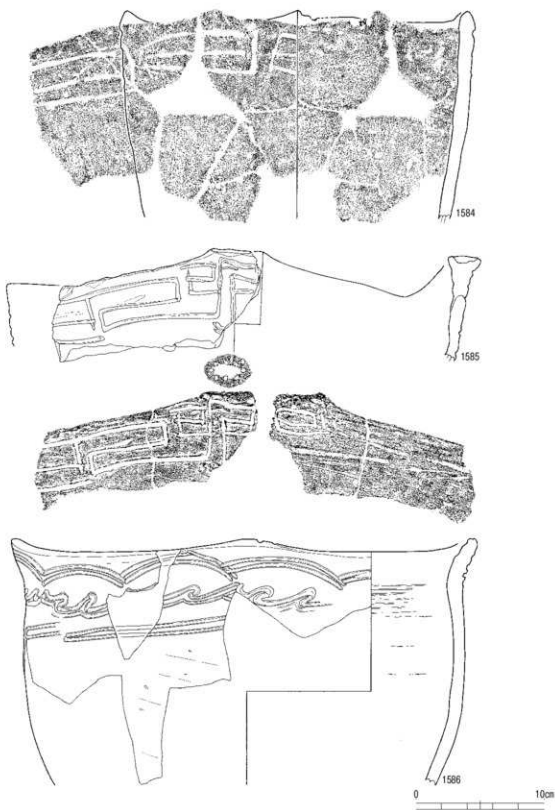
1585は、凹みのある台形状の突起を有するものである。突起部下位に小さな靴形文が施されている。また、突起部内面にも小さな靴形文が施されている。

1586は、口縁部に巡らせた横位の沈線のかわりに連続した弧状の沈線と入組文状の沈線が横位に施され、その下位に細長い靴形文が施されているものである。

1587は、横位の沈線間に矩形の文様を施すものである。波頂部の内外面に斜位の短沈線が施されている。



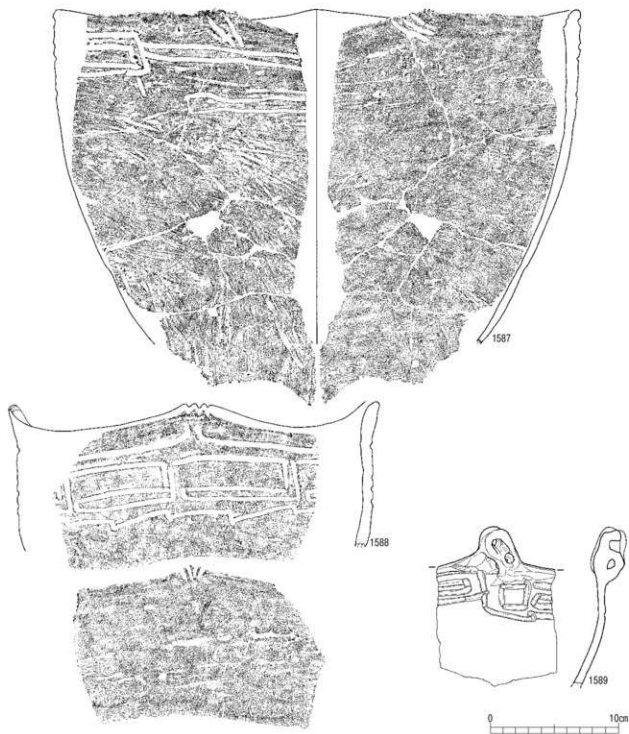
第210图 指宿式土器 (54) I a類㉔



第211図 指宿式土器 (55) I a類⑤

1588は、刻みのある波頂部を4か所に有し、横位の沈線はこの波頂部から始まるものである。靴形文の下位に鉤状の横位の沈線が施されている。

1589は、孔が4か所ある立体的な突起を有するものである。口縁部には、靴形文の先端部が丸くなる靴形文が施されている。また、突起部の下位には、矩形が描かれ



第212図 指宿式土器 (56) I a類⑤

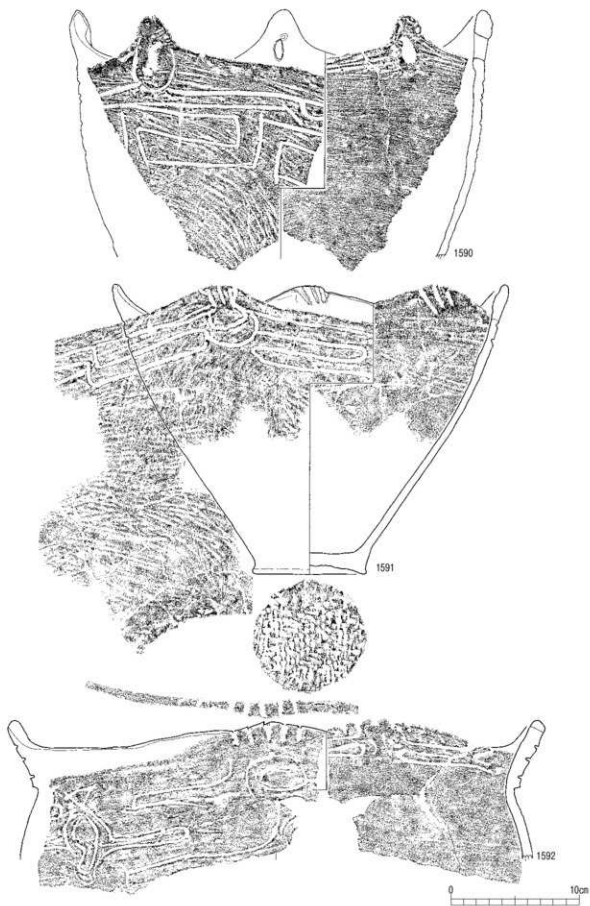
ている。外面は、丁寧なナデにより仕上げられている。

1590は、窓がつくように粘土紐を橋状に貼り付けた突起を4か所に有し、横位の沈線が鉤状に施されている。

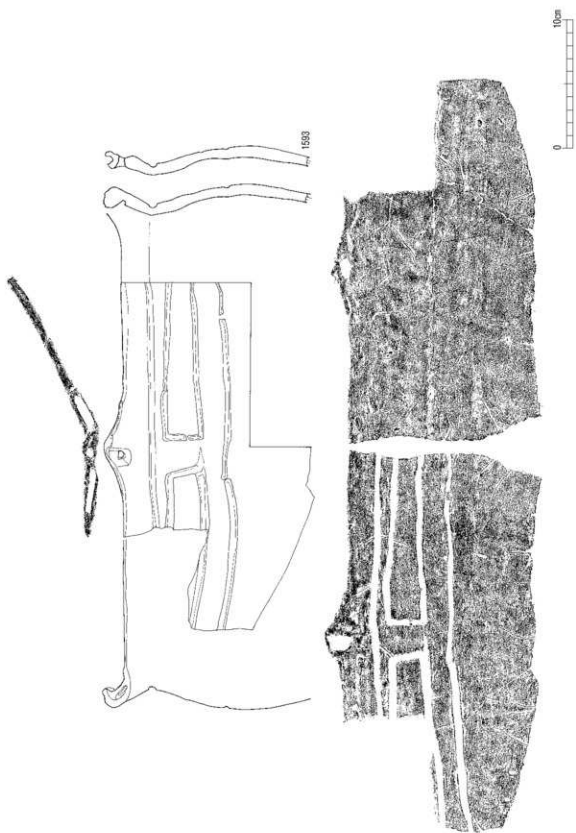
1591は、突起内外面に縦位・斜位の短沈線が施されている。外面の短沈線の下位には、この短沈線を囲むように弧状の沈線が2本施されている。また、頂部を中心に、靴形文が左右対称に描かれている。

1592は、刻みのある突起を4か所に有し、渦巻き状や8字状の文様が施されているものである。

1593は、靴形文の途中であるのか矩形を描くものであるのかどうかはっきりしないものである。孔のある山形の突起を4か所に有する。突起頂部には凹みがあり、凹みの左右は溝状になっている。



第213图 指宿式土器 (57) I a類⑤



第214図 指環式土器 (68) I a類⑨

イ I b類土器(第215図～第244図)

I b類土器は、横長の矩形沈線を繰り返すものである。これには深鉢・鉢・台付鉢がある。

(ア) 深鉢 (第215図～第242図 1594～1674)

深鉢は、口縁下から矩形を繰り返すもの(1594～1617)、上下に横沈線を引き、その間に1ないしは2の矩形を描くもの(1618～1665)、4本の横沈線の間に短い縦沈線を引いて区切り、矩形の繰り返しとなるもの(1666～1694)、一筆描きで直角に屈曲を繰り返し、矩形を描くもの(1695～1744)に分けられる。

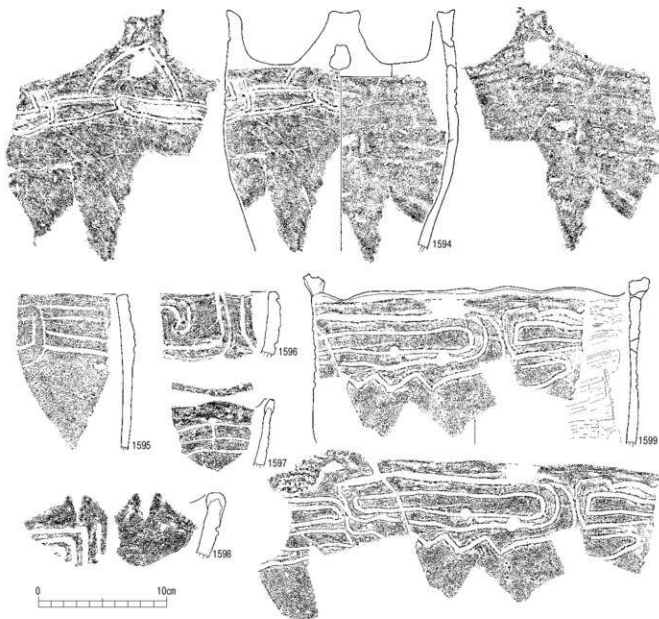
1594～1617は一重あるいは二重の矩形、2段になる矩形などが描かれるものである。

1594～1605はまっすぐ伸びる器形をしている。

1594は4か所に台形状の高い突起がある口径18cmの小型深鉢で、やや内傾きみに立ち上がっている。突起の下には三角沈線が描かれ、その中には円形の孔が穿たれている。頂部には穿孔が設けられ、内面には突起から口縁端にかけて巻貝刺突文がある。外面に2本沈線があり、それを縦線で区切って矩形としているが、線の上へL字状に立ち上げている箇所もある。

1595は直立する器形で、左側は二重の矩形に見え、右側は外側の線に横線を引いて3段の矩形に見える。

1596は口縁から下へ2本のコの字形線を引き、矩形に見える。左の矩形内には横向きのJ字文がある。



第215図 指宿式土器(59) I b類①

1597はゆるい突起で、突起の口唇部には巻貝刺突文が6個ある。外面には3本の細い横沈線が引かれ、それと直交して縦線を引き、2段の矩形としている。

1598は二つのとがった突起部をもつもので、三重の矩形とその間に縦線が引かれている。

1599は2か所に粘土紐を組みあわせた突起がある口径27.2cmの口縁で、突起の内外及び口唇部に二枚貝刺突文がある。外面には2本沈線による矩形が連続して描かれているが、丸みをおびたものもある。2段になった部分や二重矩形もあり、下に鋸歯文・直線の横線も描かれている。間に縦線があり、割れ口を挟んで補修孔もある。

1600は小さい三角形の貼付突起が4か所にある、口径が28.4cmのはほぼ直線状に広がる深鉢である。突起部の外面には縦4本、横2本の沈線があり、頂部にも2本の刻みがある。外面は二重の矩形が繰り返されている。

1601も突起部の近くで、突起の下は楕円文となり、その脇に二重の矩形がある。

1602は傾きが浅鉢風となっていることからゆがんだ口縁と考える。上下に2本の幅が狭い細長い矩形があり、その間が矩形となっている。突起の下はY字状の2本沈線がある。

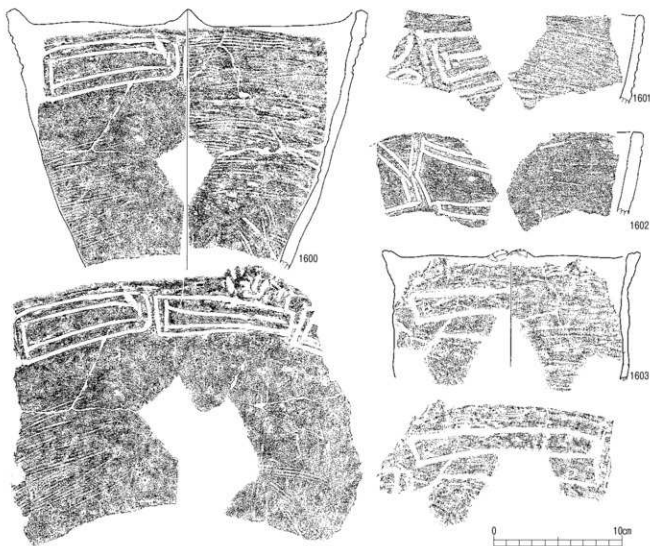
1603はねじり紐状の突起が4か所にある口径が20.3cmの深鉢で、薄い作りである。突起部は欠けているが、2つの山となっている。外面は矩形と横線が互い違いとなって繰り返される。

1604は口径が32.4cmあり、矩形が横に並び2段となっている可能性もある。補修孔が1個ある。

1605は細い縦と横の沈線で作った矩形が2段にある。

1606～1614はやや外反ぎみの器形をしている。

1606～1609は矩形と横線がひとつの段にある文様で、矩形は互い違いとなっている。1606のように矩形が2段あるものと、1608・1609のように1段のものがあるが、1607などは1段の下にさらに矩形が1段ある。1609の矩形は中に横線がある。1606・1607は緩やかな突起、1608・



第216図 指宿式土器(60) I b類②

1609は鋭い突起となる。1609の突起は粘土紐のねじり文である。1606の口径は29cmある。

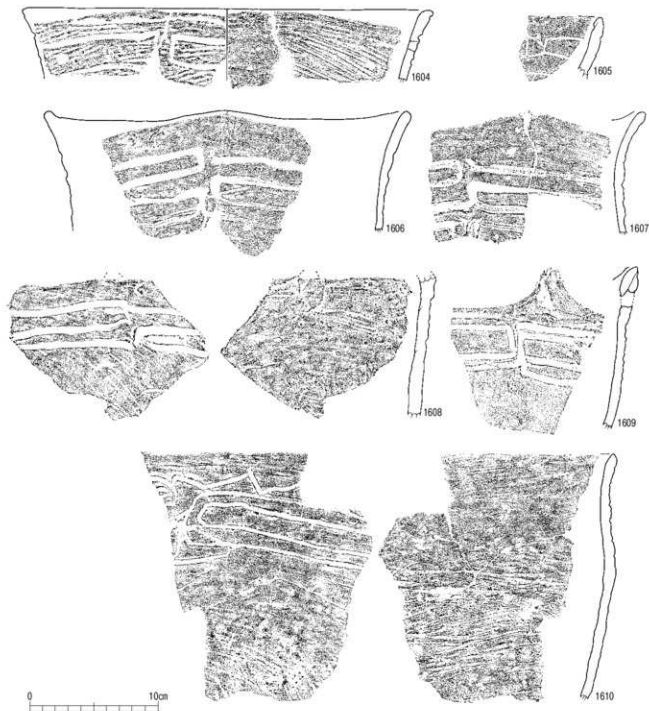
1610は突起部に渦巻文が、その脇に鋸歯文がある。その下に二重の矩形があるが、突起下にはU字文や靴形らしき文様もある。

1611~1614にはやや外反する器形で、1611・1612には山形突起がある。

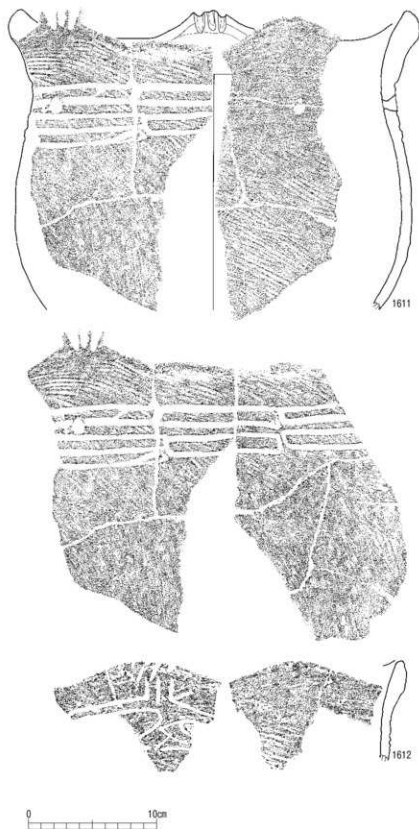
1611は口径が30cmあり、突起外面には3列のヘラ押圧

文がある。外面には2本沈線と、その下に連続する横長矩形が1段、あるいは2本沈線がなく矩形2段があるが、左側の矩形には中に1本の横線がある。補修孔も見られる。口縁端は分厚い。

1612はゆるやかな山形突起部で、ここには3列の左下がりのヘラ沈線がある。上の横線は突起部でL字状に立ち上がり、その間に1本の縦短線がある。下には角の丸い矩形や楕円・W字文などが描かれている。灰色がかつ



第217図 指宿式土器(61) I b類③



第218図 指宿式土器 (62) I b類④

た色調を呈している。

1613は口縁をまたいで内から外へ粘土継が貼り付けられた平口縁で、外面には浅くて広い中央に横線のある矩形沈線と時計回りの渦巻文がある。2段の矩形となっっている。雑な作りで、分厚い。

1614は中央右側に端が下へ鉤状に折れる横線と矩形が、左側には中央に刺突文のある矩形がある。中央には左から伸びた横線が下へ曲がる渦巻文が見られるが、途中で切れている。

1615～1617はやや内反する器形で、1615は口縁線を利用した二重矩形の中央に横線が、1616は細線の二重矩形が描かれている。内側の矩形は丸みをおびており、分厚い作りである。1617は口径41cmと大きく、4か所に小型突起を有するもので、連続する二重矩形があり、突起下の矩形の中に丸みをもった矩形があり、その中には5個の巻貝刺突文がある。突起の右下にも3個の巻貝刺突文がある。

1618～1665は上や下に横線を引き、その下や上・間に長方形を主とした矩形のあるものである。

1618～1624はまっすぐ外へ開きながら口縁端へ向かう器形をしている。

1618は口径38cmの大型のもので、平口縁だが口縁端はでこぼこしている。横沈線の下に鉤状を呈する横線があり、その屈曲内面に横長の矩形が上下交互にある。その下に左端が入組文、右側が逆コの字状となる三角状文様がある。

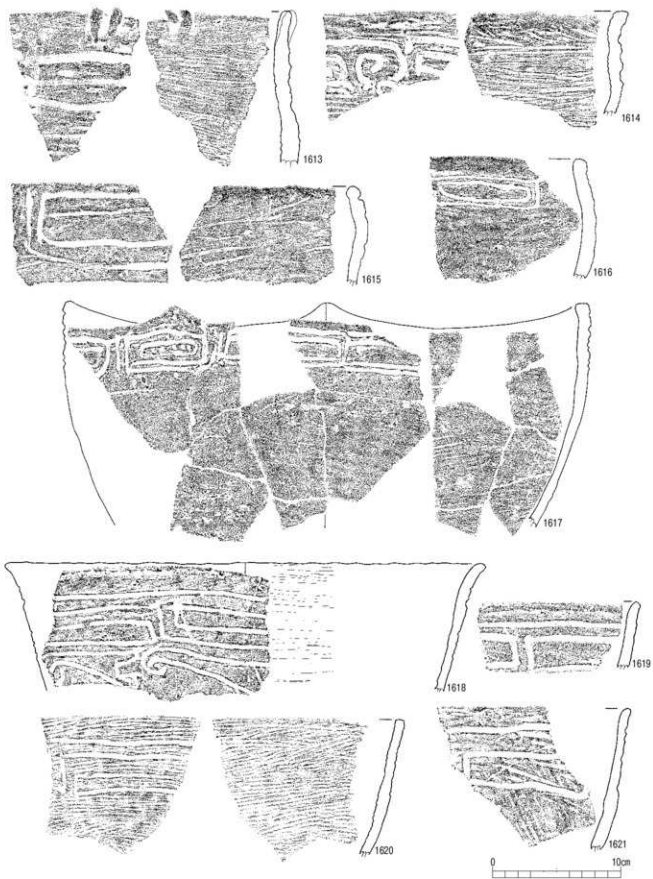
1619～1621は横沈線の下に横長矩形がある。

1619は胎土等からして指宿地方産である。

1620は横線の下に鉤状沈線があり、屈曲内面に横長矩形がある。

1622は横沈線と横長の矩形があるが、横線・矩形とも段違いとなっている。

1623は波状口縁部の破片で、外



第219図 指宿式土器(63) I b類⑤

面の突起部上の横沈線はL字状に屈曲しており、その下に横長の矩形がある。突起部内面には逆三角形の押圧文が3本施されている。

1624は口径が29cmで、色調・胎土から指宿地方産と思われる。上に横沈線、その下に横長の矩形が描かれている。

1625～1634は内反さみとなる器形をしている。

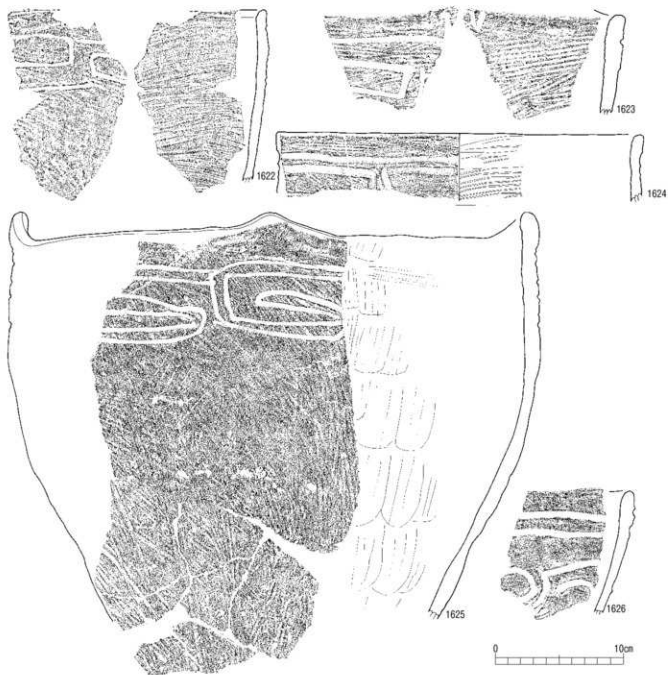
1625は4か所に低い山形突起のある口径が41.8cmの大型深鉢である。2本沈線で横線・矩形・楕円状矩形が描かれているが、突起下の矩形はやや幅広となり横線と接

し、右側で内側へ屈折して楕円状を呈している。

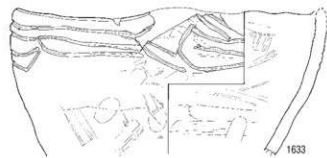
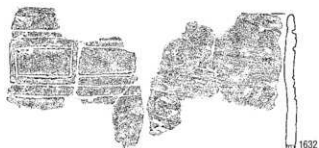
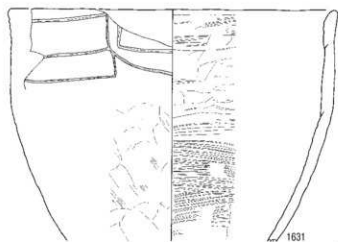
1626は波状口縁の突起部近くで、上に横方向の2本沈線が、その下に時計回りの渦巻文と矩形状の文様が見える。

1627は口径が33.8cmで、2本の横沈線の下に上向きコの字形で矩形を連続して描き、さらに、その下には鉤状沈線や2本沈線で、互い違いの矩形を描いている。

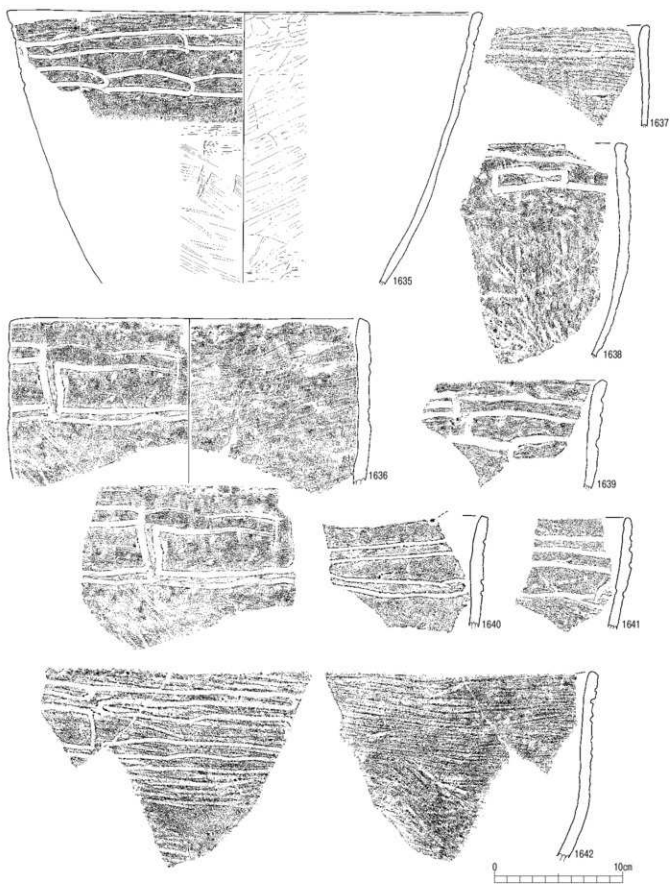
1628は2本横沈線が上下に2段あり、それを区切って矩形としている。さらにその下にも二重の矩形が連続している。



第220図 指宿式土器 (64) I b類⑥



第221图 指宿式土器 (65) I b 类⑦



第222図 指宿式土器(66) I b類⑧

1629は突起部近くの分厚い破片で、突起の下には時計回りの渦巻文があり、その脇に上下の沈線を区切って矩形が描かれている。

1630は色調・胎土からして指宿地方産のもので、上下に横方向沈線があり、その間に矩形が描かれる。右側の矩形の縦線は上の横線につながっている。左側は楕円状となり、さらに下に沈線がある。

1631は口径が26cmあり、細沈線で2段の矩形が描かれているが、左側の方は3本横線と縦線で2つの矩形を描き、右の方は下の横線が上へつながっていない。さらに横線が長く、3本沈線風となる。

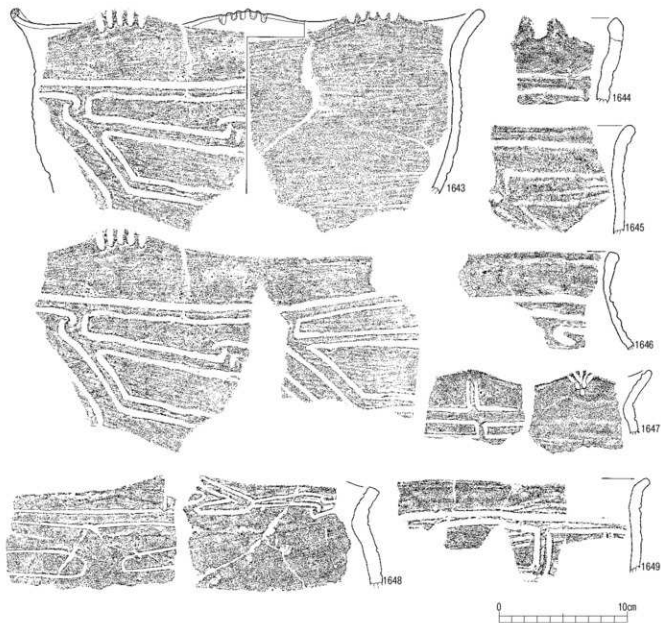
1632は直立する器形をしており、細くて深い沈線で、上下に2本沈線が、その間に矩形が描かれている。

1633は口径が24.3cmで、4か所に低い山形突起がある。2本の横沈線の下に曲線に近い矩形が描かれている。矩形の中に1本の横線もある。突起の下は三角状を描いている。

1634は鋭い突起となり、突起の内外には2本の逆三角形が描かれる。外面は4本の横沈線を縦沈線で区切り、矩形としている。外面は丁寧にナデているが、内面は貝殻条痕がくっきりと残っている。

1635～1642はまっすぐ伸びる器形をしている。

1635は口径が37.6cmと大型で、口縁部はでこぼこしているが、平口縁である。2段の矩形が描かれているが、上は2本沈線の間の8か所に縦区切りがあり、下には右から左へ曲線状の矩形が16個描かれている。薄い作りで



第223図 指宿式土器(67) I b類⑨



第224图 指宿式土器(68) I b類⑩

軽い。

1636は口径が28.2cmで、口縁端は細くなる所もある。上下に横線があり、その中に矩形があるが、その一部は上下の横線につながっている。

1637・1638は上に1本沈線があり、その下に矩形がある。1637は薄い作りで、色調・胎土から指宿地方産と思われる。浅い沈線の二重矩形である。1638は太い沈線で、矩形の右は横線となる。

1639は上に1本沈線があり、その下にコの字形沈線を引く矩形とし、中に横線がある。さらにその下も横線やコの字形沈線で互い違いの矩形を作っている。

1640は山形突起の近くで、やや曲線風の矩形が引かれている。上下に2本沈線があり、その端は区切られている。

1641は口縁端がやや細くなっており、内面は黄みがかった明茶褐色。外面は茶褐色を呈しているが、内面の口縁部近くは外面と同じ色調となっている。3本の横沈線の下に、横と右下がり沈線があり、菱形風となるが、その間から蛇行状の縦線が上へ伸び矩形に区切っている。

1642は鉢状の器形となっており、上下に横沈線があり、そこからつづら折りや長楕円形の曲線や矩形が描かれている。

1643～1665は外反する器形である。

1643は口径が36.6cmと大型で、4か所に波状突起がある。突起部には5列の押圧文がある。上に1本の横沈線があり、その下に横・斜方向の沈線で矩形・菱形を描き、沈線の一部は入組文になっている。

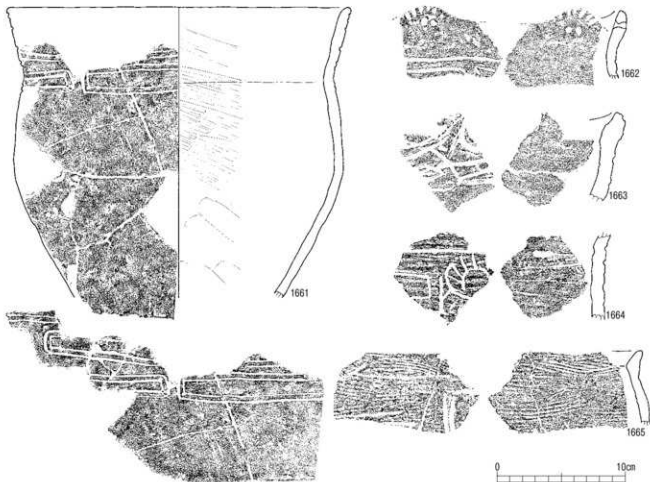
1644は2個のこぶ状突起のある破片で、横沈線の下に矩形沈線が並んでいる。

1645は横沈線下に、矩形や菱形、あるいは逆三角形の沈線がある。色調・胎土からして指宿地方産である。

1646の横方向2本沈線の下は、横長の丁字文が背中合わせになっている。その下にも横線があり、薄い作りである。

1647は波状口縁の突起部で、上の横線はL字形に上へ立ち上がり、その下に矩形が並んでいる。突起内面には5本の巻貝押圧文が逆三角形にあり、端に3つの股頂刺突文が見られる。

1648も山形突起付近の破片で、2本の横沈線は突起部



第225図 指宿式土器(69) I b類①

で上へ縦線が引かれている。その下にはやや曲線ぎみの矩形が描かれている。内面は口縁近くには2本の横線が引かれるが、これは入組文でつながれている。突起部近くは一筆描きで三角形が描かれている。口縁端は矩形を呈し、分厚い。

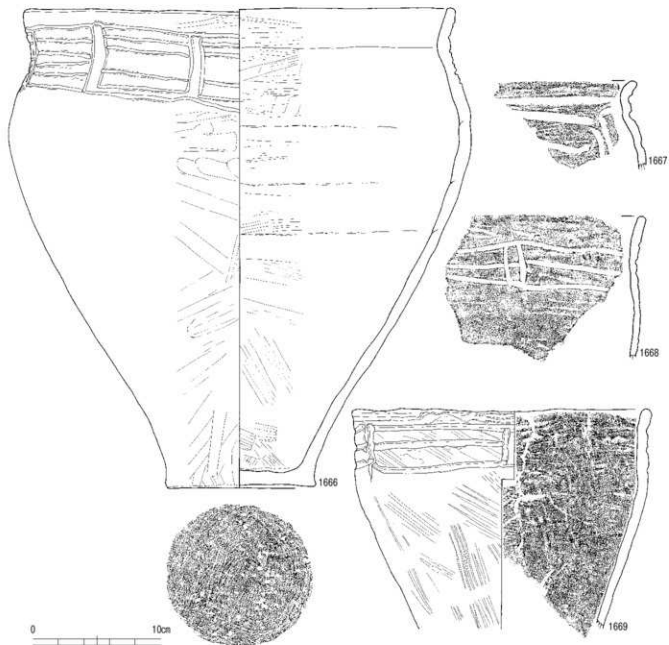
1649は1本の横線とその下に矩形があるが、矩形には中央付近で2本の縦線が引かれるものもある。

1650は平口縁で、口径が32cmある。上に立ち上がる横線が口縁近くであり、横線の途中で上に反時計回りの渦巻文もある。その下には横沈線で挟まれた丸みのある横長矩形が進んでいる。

1651は薄い作りで、上に2本の横線があり、途中に上向きの半円形がある。左側は2本の右上り斜線を引いた矩形があり、右側中央に横線のある横長の丁字文がある。

1652はやや太い沈線で2本の横沈線と矩形が描かれている。

1653は直に伸びる器形で、4か所に山形突起がある。突起頂部には3列のヘラ押圧文が外側から頂部にかけて施される。外面は上下に横沈線があり、その間に長い長方形と短い長方形がある。上の横線は突起部で途切れ、いずれも上へ立ち上がり、その間には凹字沈線がある。下の横線は突起下で入組文となる。



第226図 指宿式土器(70) I b類⑫

1654は4か所にこぶ状突起のある口径24.5cmの深鉢で、突起部にへこみとその両脇に3つの巻貝刺突文がある。2本沈線の上に矩形が、下に横線が引かれているが、横線は矩形間でやや上に盛りあがっている。

1655は口縁部がでこぼした粗く分厚い作りで、貝殻条痕も粗い。横沈線の下に矩形があるが、矩形の上や下が内側へ屈曲し、L字状や渦状を呈している。

1656は横沈線の下に大きな矩形があり、さらに矩形の中に2本の矩形が描かれる。その下に横沈線がある。

1657～1659は長方形の間に正方形を置くものである。

1657は突起部で、中央を強く押さえてこぶに見える。突起下は2本の正方形で、その脇は上下を横線で挟まれた長方形がある。横線の端は押さえている。

1658・1659は横沈線の下にやや太目の長方形と正方形

が描かれ、1658には補修孔がある。

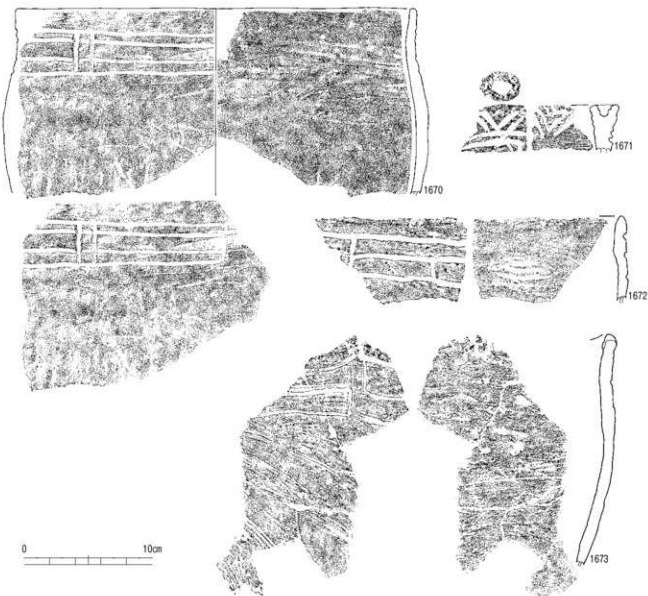
1660は板状のねじりを貼り付けた突起部破片で、上に横方向、下に矩形の沈線がある。

1661は口径が27cmある平口縁で、頭部がくびれ、胴部中ほどがふくらんでいる。いずれも細い2本沈線で、上に横線が、その下に矩形が2段にある。

1662はゆるやかな山形突起部で、頂部に6つのヘラ刻みがあり、その下に2個の小さな円孔がある。上に横方向の沈線があり、その下には矩形が連なる。

1663は橋状把手のある突起部で、外面沈線は矩形・横線・菱形・楕円など多様である。

1664は口縁部を欠いているが、1本の横沈線の下に矩形・渦巻文・L字文などがあり、渦巻文の中にはヘラ沈線もある。



第227図 指宿式土器(71) I b類⑬

1665は口縁端近くで外へ強く屈曲する山形突起部で、右下の沈線ははっきりしているが、他の部分は浅い。上に1本の横線があり、その下に矩形沈線が連なる。左側の上は鈎状直線となる。施工具は巻貝である。

1666～1694は横沈線の間に短い縦沈線を引いて矩形としているものである。

1666～1678はやや外反する器形である。

1666は口径34.2cm、底径11.4～11.8cm、高さ37.8cmで、肩がやや張る器形をしている。底は安定した平底で、網

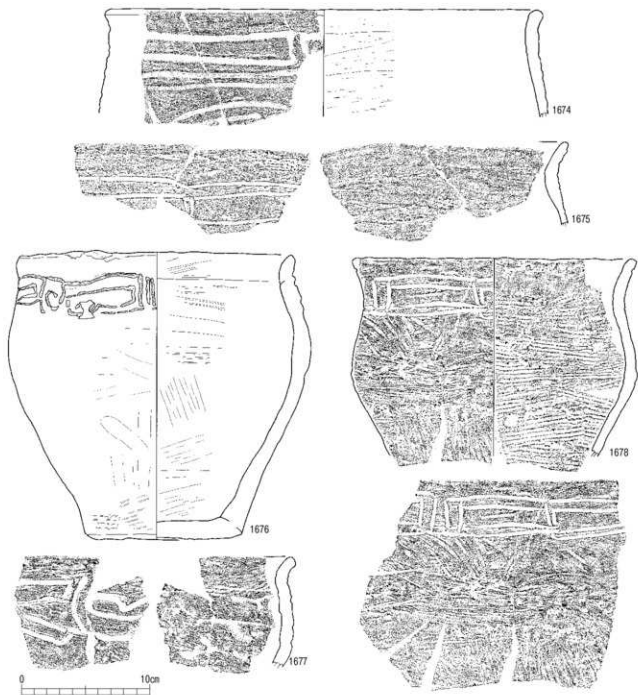
代痕を丁寧にナデ消している。頸部付近に2本の縦線を引き、6本の横線で矩形としている。

1667は口縁下に横線を引き、下の矩形内には上へ立ち上がる凹状の横線がある。

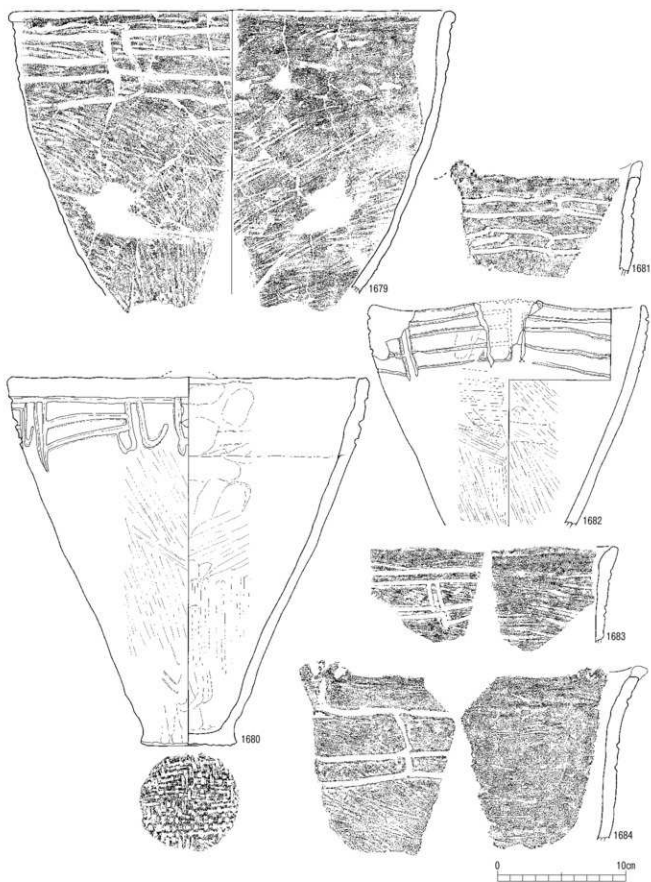
1668は3本の横線を引いたあと、縦に2本沈線を引く。左上に菱形風の沈線がある。ススの付着が厚い。

1669は外反度が低く、口径は23.7cmある。6か所に縦線がはいり、矩形の中央に横線がある。

1670は口径が31.5cmで、4本の横沈線に2本の縦線を



第228図 指宿式土器(72) I b類⑭



第229图 指宿式土器(73) I b類⑬

引き矩形とする。

1671は頂部に窪みがあり、まわりに巻貝刺突文がある。突起内外には逆三角形があり、その下に2本沈線による矩形が作られる。

1672は3本の横沈線に縦沈線のあるもので、縦線は3本に施すものと、下の2本に施すものがある。

1673は山形突起部で、突起部の内側から外へ縦沈線が引かれている。矩形は上と下に互い違いに引かれている。

1674は口縁から外へ広がって下がる器形で、口径は34.6cmある。上から矩形、2本横線、中央に横線のある楕円文、斜線などの文様がある。

1675は横線の下に2本沈線で区切った矩形がある。

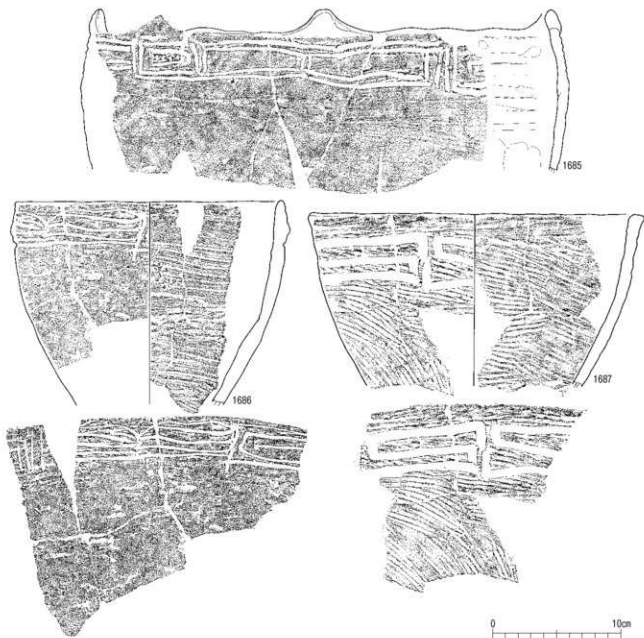
1676は口径21.8cm、底径12.4cm、高さ22.7cmとやや小型である。一筆描きによる二重の矩形が描かれ、その間に渦巻文や縦線が引かれるが、1か所では縦線が口縁まで達している。底は網代敷を丁寧にナデ消している。

1677は突起近くには渦巻様の文様があり、その脇に矩形がある。分厚いつくりである。

1678は1676に似た器形をし、縦線を入れ二重の矩形を作っている。

1679-1694はまっすぐ伸びるか、やや内反する器形である。

1679は口径が35.3cmで、4本の横線を2本の縦線で



第230図 指宿式土器(74) I b類⑬

切って3段の矩形が描かれている。

1680は口径28.6cm、底径7.6cm、高さ29cmである。突起が剥脱しているが、2か所に三角形突起があるものと思われる。突起内には4本の二枚貝腹縁刺突によってV字状が描かれている。上に横沈線があり、その下に2段の矩形がある。途中に背向かいのJ字文や縦沈線がある。底は接合できないが、外へやや開き、格子状の網代痕がある。

1681は小さな高い山形突起のあるもので、2段に矩形が連なっている。

1682はゆるやかな波状突起が2か所か3か所にある口径23cmのものである。突起口唇部にヘラ押圧文が見られる。外面には3段の矩形があるが、縦線が先に引かれる所と、横線が先に引かれる所がある。

1683は内面の口縁端近くで、外へ屈折するものである。上に2本横線を引いたあと、縦に区切りを入れ、そのあと横線を引いて矩形を作り、その下に鉤状の段がある横線が引かれる。

1684はやや外反するもので、突起部には3列のヘラ押圧文が見られる。3本の横線に1本の縦線が引かれ、2

段の矩形が作られるが、上の横線は突起部で上へ立ち上がっている。上の矩形が幅は広い。

1685は口径が35.6cmで、4か所に三角突起がある。上下に横線があり、それを縦線で区切るが、その中にある矩形も2本の沈線で2つに分けている。突起の下にある矩形の中には巻貝殻頂の刺突文が5個ある。

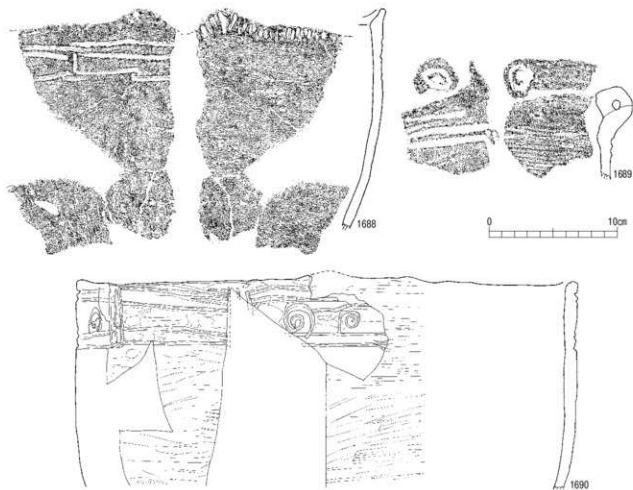
1686は口径が21cmで、横・縦方向の細沈線で、中に横線のある矩形がある。

1687は口径が26.4cmで、太い一筆描き沈線で矩形を作っている。貝殻痕が良く残っている。

1688は細い作りの突起部付近で、内面の口縁端には巻貝刺突文が巡っている。3本の横線を区切って、矩形を作っているが、下の横線は入組文でつないでいる。

1689は板状粘土を貼り付けたこぶ状突起があるが、この両側には円形沈線と小さい円孔がある。外面に2本沈線の矩形がある。

1690-1691は上下にある2本の横沈線を縦線で区切り、矩形とし、中に背中あわせの渦巻文がある。1690は口径が39.5cmと大きく、矩形は8か所あり、その中の4か所に渦巻文がある。1691は口径が30.5cmで、渦巻文が多く、



第231図 指宿式土器(75) I b類⑦

補修孔がある。

1692は一筆描き横沈線と縦線で矩形を描いている。

1693は口径26.6cmで、山形突起が4か所にある。突起内面に3つのヘラ押しで逆三角形を描く。外面は横と縦方向沈線で、2段の矩形を作っている。

1694は台形状の突起をもつものである。まず2本の横沈線を引いたあと、縦線で区切って矩形を作っている。その中にくずれたZ字文を描き、突起部には一筆描きの三角文を描く。口唇部から突起内面には4本の沈線と押圧によって逆三角形が描かれており、端は押されている。

1695~1745は連続して線を引き、直線の矩形を表現しているもので、中には曲線状となるものも多い。

1695~1697はやや内反ぎみに立ち上がる器形をしている。

1695は口径が22cmあり、左向きのコの字形が連続している。1696と同様に貝殻条痕の調整痕を残しているが、外面は文様部分を主に丁寧なヘラナデ調整をしている。

1696は鉤状に細い沈線を引き、ジグザグに2段の矩形が並ぶように見える。口径は25cmである。

1697は口径が31cmと大型で、口縁部はでこぼこしている。口縁端近くの内面は、くの字状に外へ屈曲している。

ジグザグの屈曲で、2段の矩形を描いている。外面はスズで、内面はコゲで黒色化している。

1698は口縁端近くで外反する器形を呈している。上に横沈線が引かれ、その下に鉤状の屈曲沈線で矩形を引いているが、下の矩形は幅が狭い。

1699も1698と同じような文様である。

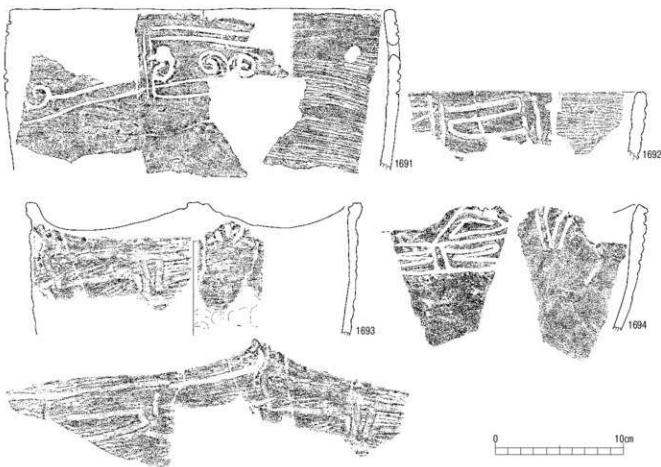
1700は口径が26cmで、上に横線が引かれ、左から右へ鉤手状に線を引き、3段の矩形を描く。内面の下部にはコゲが、外面の上部にはスズが付着している。

1701はまっすぐ伸びる器形をしており、低い山形突起がある。口径は23.2cmで、上に矩形が1段あり、その下には横線がある。

1702は三角状に立ち上がる突起部で分厚い。上から下へ線がおりる一筆描きで、2段の矩形を描いているようだが、上下の線は突起部でそれぞれ上下へ伸びている。突起部内面には縦2本と斜め2本の短線で逆三角形を描いている。

1703は口径が28cmで、変則な縦・横沈線で、2段の矩形を描いている。長方形だけでなく、正方形のものもある。

1704は横沈線と、その下に整然と屈曲し、直線で2段



第232図 指宿式土器(76) I b類⑧

の矩形を描いている。口縁端はやや外へ屈曲し、でこぼこしている。

1705は1本の横沈線の下に、鉤状沈線と楕円状の矩形が描かれる。砂質の胎土からして指宿地方産のものと思われる。

1706は口縁へ向かって内傾する器形で、口径が43cmと大型である。上下に横線があり、その間に2段の矩形が描かれているが、上段矩形の横線は上部の横線を利用してはいる。

1707は左側に左向きのコの字形で3段の矩形を描き、右側には二重の矩形が描かれている。

1708は細くてゆるやかなカーブの線で、楕円状の矩形と横線を描いている。

1709は鉤状の横線で区切られ、段違いの矩形となる。

1710は小さな三角突起部で、突起内面に左右3本の沈線でV字形が描かれる。外面には鉤形の沈線が引かれ、

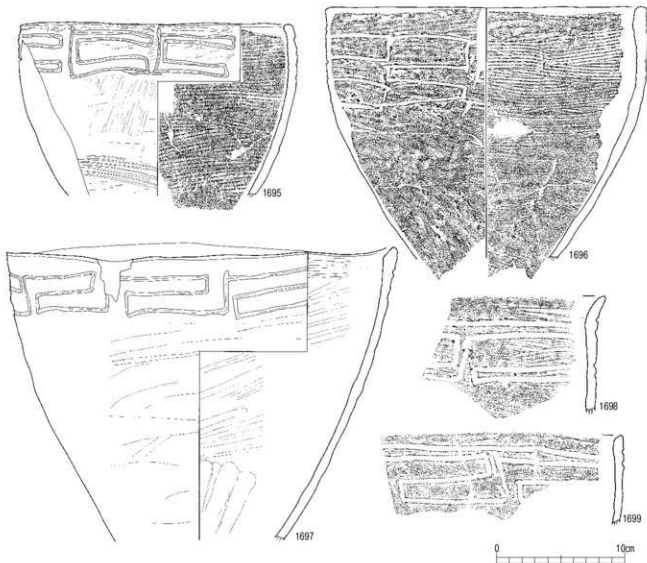
突起下には五角形がある。

1711は小さい三角突起で、突起外面にはV字状の短斜沈線が、突起内面には中央に縦、左右に斜めの短沈線で逆三角形が描かれ、端には2個の刺突文がある。外面は、左向きと右向きのコの字形で矩形が描かれている。

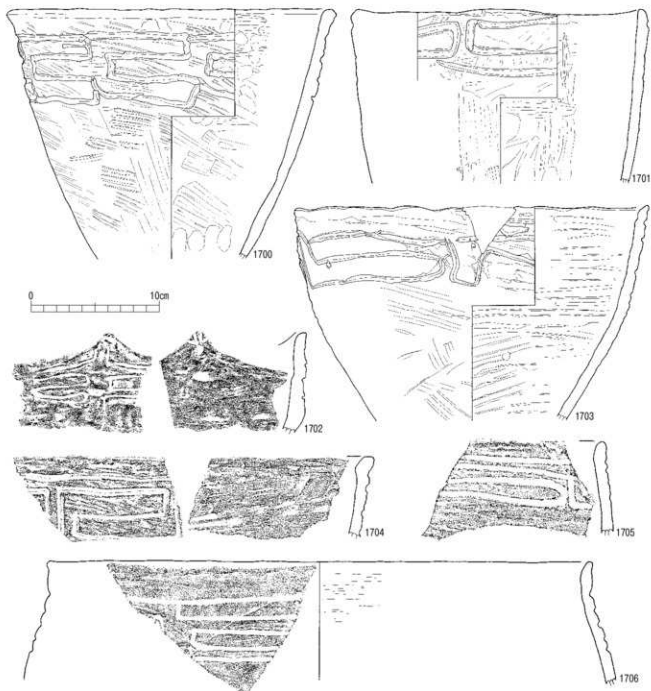
1712は外反する口縁で、上に2本沈線、その下に横線と下に向かう縦線、その下に右側がJ字状におりる沈線、その下に2本の沈線がある。2本沈線の下に二重矩形のある配置と思われる。

1713はやや外反する器形で、山形突起が4か所にある。口径は35cmである。突起部には頂部から内面にかけて4列の二枚貝腹線の刺突文があり、その下に内から外への穿孔がある。外面の最上横線は突起部で上へ立ち上がる。コの字形が向かいあう形で矩形に描かれて、連続する。

1714は突起部の破片で、外面には矩形があるが、突起



第233図 指宿式土器(77) I b類⑨



第234図 指宿式土器 (78) I b類②

に向かって上の線が立ち上がっている。突起の頂部にはヘラ押印文が施される。

1715は丸みを帯びた矩形と横線が引かれている。外面は灰褐色、内面は黄灰色を呈しているが、外面の中央部は矩形に黒色を呈している。

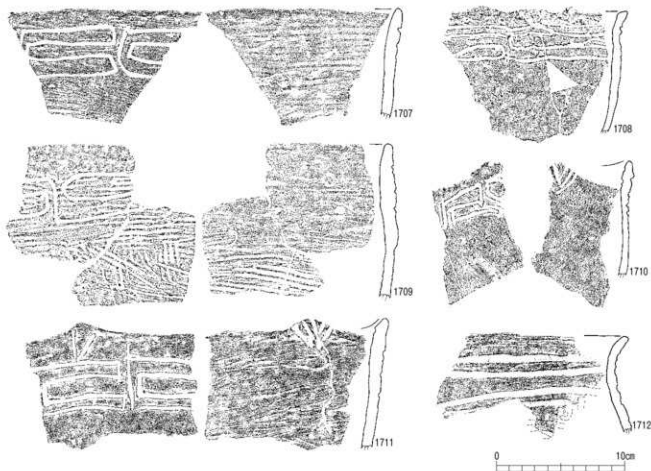
1716～1722は口縁端近くの内面が外へ屈曲するもので1719・1720は屈曲部から上が長い。

1716は口径が26.5cmあり、4か所に山形突起がある。突起内面には3本のヘラ押印文がある。外面には中央に

横線のある矩形が描かれているが、中央と上の線は入組文となり、下の線は、入組文の所で下へ鉤状に屈曲している。

1717は内面の端がやや外へ屈曲するもので、巻貝によって二重の矩形が描かれている。沈線の外は盛り上がっている。

1718は上下に横線があるが、下の横線は鉤状に屈曲し、その上と下に矩形が互い違いに描かれ、右側のものは二重になっている。



第235図 指箱式土器 (79) I b類②

1719はつづら折り状に細い沈線が引かれて、3段以上の曲線状矩形が描かれているが、突起から右は直線状となる。

1720は口径が28cmあり、右向きのコの字状文が連続して引かれている。

1721はやや内反している器形で、左側はコの字状で2段の矩形が、右側は上下に横線があり、その間に矩形がある。しっかりした線と浅い線がある。

1722は低い波状口縁で、上に3本ほどの鋸歯文と横線で三角形が、その下に三重の矩形が描かれている。

1723は口径が30.8cm、底径10.2cm、高さ30.3cmの完形品で、4か所に山形の突起がある。突起頂部かつ内面に3本短沈線があるものと、頂部に穴の掘られるものが対面しており、その下に小円が穿たれている。外面にはコの子形をつないだ矩形が連続して描かれ、最下線の端はJ字状になっている。底部は外へ広がる安定した平底で、ザル形の網代痕跡が残っている。

1724は口径が28.6cmあり、やや内反ぎみとなる。時計回りに直線が巡り、三・四重の矩形を作るが、途中で5本の横線をつないでいる。4つの矩形が1組となるが、その中央では口縁へ向かい三重の逆三角形が描かれる。

さらに左端の矩形最下直線から下へ逆三角形の浅い斜沈線も引かれる。

1725は突起部破片で、頂部には巻貝殻頂の刺突文が、内面には2本の半円沈線と外面が膨らむほどの深い窪みがある。外面は上下に2本沈線があり、間には一筆書きで2段の矩形が連続して描かれている。

1726は分厚い破片で、内外とも貝殻痕調整だが、外面は丁寧になでて仕上げている。上に2本横沈線があり、その下に2本沈線で2段の矩形が描かれ、それを上の横沈線から縦に結んだり、横線で矩形をつないでいる。2個の補修孔がある。

1727は口径40.4cm、底径10cm、高さ42.2cmの口縁がやや内反する大型の土器で、4か所に山形突起がある。突起内面には3本の縦沈線があり、端は巻貝殻頂で押さえられている。外面の口縁近くに入組文でつなぐ横線が2本あり、突起部では上へ立ち上がる。その下には乙状の沈線と縦沈線で、2段の矩形を描いている。底は外へ広がり、格子状に組み合わさる網代底である。

1728は口縁がゆるやかに内反する口径28.5cmの深鉢である。つづら折り状の曲線で、曲線風の矩形が描かれ、6か所あるつなぎ目で中央に縦2本の沈線があるコの字